

道後城北遺跡群Ⅲ

道後城北 RNB・文京 29 次・土居窪Ⅲ
道後北代・松山城北郭・松山城東郭跡

2014

松山市教育委員会
公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団
埋蔵文化財センター

どう ご じょう ほう く い せ き ぐ ん
道後城北遺跡群Ⅲ

どう ご じょう ほう く ぶん きょう ど い く ぼ
道後城北 RNB・文京 29 次・土居窪Ⅲ

どう ご き た し ろ ま つ や ま じ ょ う き た く る わ ま つ や ま じ ょ う ひ が し く る わ あ と
道後北代・松山城北郭・松山城東郭跡



2014

松山市教育委員会

公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団

埋蔵文化財センター

序 言

本書は松山市北部の道後城北地区において、昭和 62 年度から平成 20 年度にかけて実施した 6 遺跡についての埋蔵文化財発掘調査報告書です。

遺跡が所在する道後城北地区は、松山平野内でも有数の遺跡地帯として知られており、これまでの調査・研究の結果、縄文時代から中近世に至る継続的な集落の営みが明らかになっています。

今回報告します道後城北 RNB 遺跡では、縄文時代後期や晩期の土器が層位的に出土し、松山平野における縄文土器編年の指標となる貴重な資料を得ることができました。文京遺跡 29 次調査や土居窪Ⅲ遺跡では多数の弥生時代の集落関連遺構や遺物が見つかり、道後北代遺跡では中世の建物址や水稲耕作に伴う溝や足跡が発見されました。また、松山城北郭遺跡では、松山城築城に伴う石垣の一部が発見され、東郭跡では江戸時代後期から幕末にかけて存在した家老屋敷に関連する礎石のほか、松山の空襲による被災状況を物語る石組溝の存在などが明らかになりました。

このような成果が得られましたのも、市民の方々をはじめ関係各位のご協力の賜物であり、深く感謝申し上げます。今後、本書が埋蔵文化財研究の一助となり、地域の歴史や考古学研究の資料としてご活用いただければ幸いです。

平成 26 年 2 月

松山市教育長 山本 昭弘

例 言

1. 本書は昭和 62 年度から平成 20 年度までの間に、松山市教育委員会と財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター（現 公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団埋蔵文化財センター）が、松山市道後樋又、道後緑台、道後北代、鉄砲町、平和通、大街道の 6ヶ所において実施した埋蔵文化財発掘調査の成果をまとめたものである。
2. 整理作業及び報告書作成作業は、公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団埋蔵文化財センターが行った。
3. 本書掲載の遺構は、呼称名を略号化した。
竪穴建物：SB、掘立柱建物：掘立、溝：SD、自然流路：SR、土坑：SK、柱穴：SP
4. 本書で使用した標高値はすべて海拔標高を示し、方位は国土座標を基準とした真北である。
5. 本書で使用した土層や遺構埋土の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』（1998）に準拠した。
6. 遺物の実測・製図・復元は調査担当者の指示のもと、石丸由利子、木西嘉子、戸川安子、中村紫、西本三枝、平岡直美、松下郁子、松本美代子、山下満佐子が行った。
7. 本書掲載の遺構図・遺物図は、縮分値をスケール下に記した。
8. 本書の執筆は第 7 章を橋本雄一が担当し、その他は宮内慎一が担当した。なお、本書の編集は宮内が行った。
9. 発掘調査の遺構写真は調査担当者で大西朋子が担当し、写真図版の作成は大西が行った。
10. 本書に掲載した遺物や図面、写真等の記録類は、松山市立埋蔵文化財センターにて保管されている。
11. 報告書抄録は、巻末に掲載している。

目 次

第1章	はじめに	(宮内)	2
第1節	調査に至る経緯		2
第2節	調査・刊行組織		2
第3節	歴史的環境		4
第2章	道後城北 RNB 遺跡	(宮内)	7
第1節	調査の経緯		7
第2節	層 位		7
第3節	遺構と遺物		10
第4節	小 結		18
第3章	文京遺跡 29 次調査	(宮内)	24
第1節	調査の経緯		24
第2節	層 位		24
第3節	遺構と遺物		26
第4節	小 結		31
第4章	土居窪Ⅲ遺跡	(宮内)	36
第1節	調査の経緯		36
第2節	層 位		36
第3節	遺構と遺物		38
第4節	小 結		39
第5章	道後北代遺跡	(宮内)	43
第1節	調査の経緯		43
第2節	層 位		44
第3節	遺構と遺物		45
第4節	小 結		56
第6章	松山城北郭遺跡	(宮内)	61
第1節	調査の経緯		61
第2節	調査の概要		61
第7章	松山城東郭跡	(橋本)	63
第1節	調査の経緯		63
第2節	遺跡の概要		64
第3節	遺構と遺物		67
第4節	小 結		72
第8章	調査の成果と課題	(宮内)	73

挿図目次

第1章 はじめに	
第1図 道後城北地区の主要遺跡分布図……………	6
第2章 道後城北 RNB 遺跡	
第2図 調査区測量図……………	7
第3図 遺構配置図……………	8
第4図 北壁・東壁土層図……………	9
第5図 第9層及び第10層遺物出土状況図……………	12
第6図 第9層出土遺物実測図……………	13
第7図 第9B層出土遺物実測図……………	14
第3章 文京遺跡 29次調査	
第13図 調査区測量図……………	24
第14図 北壁土層図……………	25
第15図 遺構配置図	
第16図 SB1 測量図……………	26
第4章 土居窪Ⅲ遺跡	
第21図 調査区測量図……………	36
第22図 周辺遺跡分布図……………	37
第23図 遺構配置図・土層図……………	38
第5章 道後北代遺跡	
第26図 調査区測量図……………	43
第27図 西壁柱状土層図……………	44
第28図 第X層上面遺構配置図……………	45
第29図 SR2 出土遺物実測図……………	46
第30図 SK6 測量図……………	47
第31図 第Ⅷ層上面遺構配置図	
第32図 SD7・SD8 断面図……………	48
第6章 松山城北郭遺跡	
第40図 調査地位置図……………	61
第41図 調査区全景（北より）……………	62
第7章 松山城東郭跡	
第44図 松山城東郭位置図……………	65
第45図 遺構配置図・土層図……………	66
第46図 SK001 測量図・出土遺物実測図……………	68
第8図 第10A層出土遺物実測図……………	15
第9図 第10層出土遺物実測図……………	16
第10図 第10B層出土遺物実測図……………	17
第11図 第10A層または第10B層出土遺物実測図（1）	
第12図 第10A層または第10B層出土遺物実測図（2）…	18
第17図 SB1 出土遺物実測図……………	27
第18図 SB2 測量図・出土遺物実測図……………	28
第19図 SK1 測量図・出土遺物実測図……………	29
第20図 柱穴・地点不明出土遺物実測図……………	30
第24図 SD1・SD2 出土遺物実測図……………	39
第25図 第7層出土遺物実測図……………	40
第33図 第Ⅶ層上面遺構配置図……………	49
第34図 掘立柱建物測量図・出土遺物実測図……………	50
第35図 SD1～SD6 断面図……………	52
第36図 SD5 出土遺物実測図	
第37図 SK1～5・7～9 測量図……………	54
第38図 SK 出土遺物実測図……………	55
第39図 包含層・地点不明出土遺物実測図……………	57
第42図 掘り方断面（北より）……………	62
第43図 石垣測量図	
第47図 SK010 測量図・出土遺物実測図……………	70
第48図 SD004・SD005 と西南部の土坑測量図……………	71

表目次

第1章 はじめに	
表1 調査地一覧……………	2
第2章 道後城北 RNB 遺跡	
表2 溝一覧……………	19
表3 柱穴一覧	
表4 第9A層出土遺物観察表 土製品	
表5 第9A層出土遺物観察表 石製品……………	20
表6 第9B層出土遺物観察表 土製品	
第3章 文京遺跡 29次調査	
表12 竪穴建物一覧……………	32
表13 溝一覧	
表14 土坑一覧	
表15 柱穴一覧	
表16 SB1 出土遺物観察表 土製品……………	34
表17 SB1 出土遺物観察表 石製品	
第4章 土居窪Ⅲ遺跡	
表23 溝一覧……………	41
表24 SD1 出土遺物観察表 土製品	
表25 SD2 出土遺物観察表 土製品	
表7 第9B層出土遺物観察表 石製品……………	21
表8 第10A層出土遺物観察表 土製品	
表9 第10B層出土遺物観察表 土製品……………	22
表10 第10層出土遺物観察表 土製品……………	23
表11 第10層出土遺物観察表 石製品	
表18 SB2 出土遺物観察表 土製品……………	34
表19 SK1 出土遺物観察表 土製品	
表20 柱穴出土遺物観察表 土製品……………	35
表21 柱穴出土遺物観察表 石製品	
表22 地点不明出土遺物観察表 土製品	
表26 第7層出土遺物観察表 土製品……………	41
表27 第7層出土遺物観察表 石製品……………	42

第5章 道後北代遺跡

表28 溝一覧	58	表33 掘立柱建物出土遺物観察表 土製品	60
表29 自然流路一覧		表34 SD5 出土遺物観察表 土製品	
表30 土坑一覧		表35 土坑出土遺物観察表 土製品	
表31 掘立柱建物一覧	59	表36 包含層・地点不明出土遺物観察表 土製品	
表32 SR2 出土遺物観察表 土製品			

写真図版目次

第2章 道後城北 RNB 遺跡

図版1	1. 調査地全景（南西より）	2. 東壁土層（北西より）
	3. 第6層上面遺構検出状況（北より）	4. 柱穴検出状況（北西より）
	5. 第10層掘削状況（北より）	
図版2	1. 第9層遺物出土状況（北より）	2. 第9A層遺物出土状況（南より）
	3. 第9B層遺物出土状況①（北より）	4. 第9B層遺物出土状況②（北より）
	5. 第10A層遺物出土状況①（北より）	6. 第10A層遺物出土状況②（北より）
	7. 第10A層遺物出土状況③（北より）	8. 第10A層遺物出土状況④（北より）
図版3	1. 出土遺物（第9A層：1・3・5・8・10・13、第9B層：14・22）	
図版4	1. 出土遺物（第9B層：23・24・26・31、第10A層：32・41）	
図版5	1. 第10A層出土遺物	
図版6	1. 出土遺物（第10B層：68・74、第10A層または第10B層：79・81・86・87・89・92）	

第3章 文京遺跡 29次調査

図版7	1. 調査地全景（南西より）	2. 東半部遺構検出状況（西より）
	3. 西半部遺構検出状況（南より）	4. SB1完掘状況（南より）
	5. SB1遺物出土状況（南東より）	
図版8	1. SB2完掘状況（東より）	2. SK1遺物出土状況（南東より）
	3. 作業風景（南より）	4. 現地説明会風景（南東より）
	5. SB1出土遺物	
図版9	1. 出土遺物（SB1：12・14、SK1：18・20、SP55：23・26、SP16：29、地点不明：32）	

第4章 土居窪Ⅲ遺跡

図版10	1. 調査地全景（北より）	2. 南壁土層（北より）
	3. SD1完掘状況（北より）	4. SD2完掘状況（西より）
	5. 遺構検出状況（北より）	
図版11	1. SD2遺物出土状況（西より）	2. 作業風景（西より）
	3. 出土遺物（SD1：1、SD2：3・5、第7層：6・10・15・16・21・25）	

第5章 道後北代遺跡

図版12	1. 調査地全景（南東より）	2. 第Ⅹ層上面遺構検出状況（南西より）
	3. SR2遺物出土状況（南西より）	4. 第Ⅷ層上面遺構検出状況（南西より）
	5. SD8・足跡検出状況（南東より）	
図版13	1. 第Ⅶ層上面遺構検出状況（南より）	2. 掘立1遺物出土状況（西より）
	3. SD5遺物出土状況（北より）	4. SK1遺物出土状況（北西より）
	5. SK7・8検出状況（東より）	
図版14	1. 出土遺物（SR2：1・3、SK1：11・13、SK9：12、第Ⅶ層：16、第Ⅹ層：17、地点不明：18）	

第7章 松山城東郭跡

図版15	1. 調査地全景（北西より）	
図版16	1. 調査地南部全景（北西より）	2. 調査地中央北部全景（北西より）
	3. 調査地中央部土坑群と礎石2（南西より）	4. 調査地南部の土坑群と礎石3（南東より）
	5. 礎石2と整地土層（南西より）	6. SK010・埋甕半截状況（北東より）
図版17	1. 江戸時代の瓦廃棄土坑（東北東より）	2. 調査地中央部土坑群調査状況（東北東より）
	3. SK009（北東より）	4. SK001（北北西より）
	5. SD004（南より）	6. SD004土層断面（南西より）
図版18	1. 石垣検出状況（東南東より）	2. 石垣すりつけ部（南東より）
	3. 矢穴（南東より）	4. 基石

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

昭和62年度から平成20年度までの間に、松山市道後樋又、道後緑台、道後北代、鉄砲町、平和通、大街道の6ヶ所についての埋蔵文化財確認願が、関係者より松山市教育委員会に提出された。確認願が申請された道後樋又、鉄砲町は松山市が指定する埋蔵文化財包蔵地の『No.67 文京遺跡』、道後緑台は『No.55・56・57 北代・緑台・土居窪遺物包含地』、道後北代は『No.68 今市遺物包含地』内にあたり、周知の遺跡地帯として知られている。

発掘調査は、松山市教育委員会と財団法人松山市生涯学習振興財団（現 公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団）埋蔵文化財センターが主体となり、昭和62年度には道後城北RNB遺跡と松山城北郭遺跡、平成13年度に土居窪Ⅲ遺跡、平成17年度に松山城東郭跡、平成18年度に文京遺跡29次調査、平成20年度には道後北代遺跡が実施された。

表1 調査地一覧

遺跡名	所在地(松山市)	面積(m ²)	調査期間
道後城北RNB遺跡	道後樋又6-24	300	昭和63年1月5日～同年2月4日
文京遺跡29次調査	鉄砲町11番2	480	平成18年7月10日～同年8月31日
土居窪Ⅲ遺跡	道後緑台196-6	26.32	平成13年9月3日～同年9月14日
道後北代遺跡	道後北代1266番1の一部	約590	平成20年11月17日～平成21年2月16日
松山城北郭遺跡	平和通四丁目1-6	250	昭和62年10月21日～同年10月30日
松山城東郭跡	大街道三丁目2-24	263	平成18年3月9日～同年4月28日

第2節 調査・刊行組織

(1) 調査組織

[昭和62年度]

松山市教育委員会

教育長 平井 亀雄

参事 松原 重勝

次長 井手 治己

次長 古本 克

文化教育課

課長 渡部 忠平

課長補佐 大野 衛治

第二係長 菅野 治之

主任 西尾 幸則 (調査担当)

[平成 13 年度]

松山市教育委員会

	教育長	中矢	陽三
事務局	局長	大西	正氣
	次長	川口	岸雄
	企画官	一色	巧
文化財課	課長	馬場	洋
	主幹	八木	方人
	係長	田城	武志

財団法人松山市生涯学習振興財団

	理事長	中村	時広
事務局	局長	二宮	正昌
	次長	江戸	孝
	次長	森	和明
埋蔵文化財センター	所長	中川	隆
	専門監	野本	力
	調査係長	西尾	幸則
	調査員	吉岡	和哉(調査担当)
		大西	朋子(写真担当)

[平成 17 年度]

松山市教育委員会

	教育長	土居	貴美
事務局	局長	石丸	修
	企画官	江戸	通敏
	企画官	仙波	和典
	企画官	松本	義文
文化財課	課長	篠原	忠人
	主幹	家久	則雄
	主幹	田城	武志

財団法人松山市生涯学習振興財団

	理事長	中村	時広
事務局	局長	一色	巧
	次長	石丸	允良
	次長	丹生谷博一	
	調査監	杉田	久憲
埋蔵文化財センター	所長	丹生谷博一	
	次長兼管理係長	重松	幹雄
	次長兼調査係長	西尾	幸則
	調査員	橋本	雄一(調査担当)
		大西	朋子(写真担当)

[平成 18 年度]

松山市教育委員会

	教育長	土居	貴美
事務局	局長	石丸	修
	企画官	江戸	通敏
	企画官	仙波	和典
	企画官	宮内	健二
文化財課	課長	家久	則雄
	主幹	西尾	幸則
	主査	栗田	正芳

財団法人松山市生涯学習振興財団

	理事長	中村	時広
事務局	局長	吉岡	一雄
	次長	丹生谷博一	
	調査監	杉田	久憲
埋蔵文化財センター	所長	丹生谷博一	
	次長兼管理係長	重松	幹雄
	次長兼調査係長	田城	武志
	調査員	宮内	慎一(調査担当)
		大西	朋子(写真担当)

〔平成 20 年度〕

松山市教育委員会

教育長 土居 貴美
事務局 局長 石丸 修
企画官 仙波 和典
企画官 古鎌 靖
企画官 岸 紀明
文化財課 課長 家久 則雄
主幹 森 正経
主幹 森川 恵克

財団法人松山市生涯学習振興財団

理事長 中村 時広
事務局 局長 吉岡 一雄
埋蔵文化財センター 所長 丹生谷博一
次長 折手 均
次長兼調査係長 重松 佳久
主任 水本 完児(調査担当)
大西 朋子(写真担当)

(2) 刊行組織〔平成 25 年度〕

松山市教育委員会

教育長 山本 昭弘
事務局 局長 榊田 二郎
企画官 梶川 明彦
企画官 津田 慎吾
文化財課 課長 若江 俊二
主幹 篠原 昭二

公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団

理事長 一色 哲昭
(前任、～6/4)
理事長 中山紘治郎
(6/5～)
事務局 局長 中西 真也
次長兼総務部長 中野 忠
施設利用推進部 部長 玉井 弘幸
埋蔵文化財センター
所長兼考古館館長 田城 武志
調査研究リーダー 山之内志郎
調査研究リーダー 橋本 雄一
主任 宮内 慎一(編集担当)
大西 朋子(写真担当)

第 3 節 歴史的環境

松山平野には多くの遺跡が存在しているが、ここでは道後城北地区（道後地区・祝谷地区・城北地区に区分）を中心に時代別に概要を説明する。

(1) 縄文時代

最古の人の活動痕跡としては、文京遺跡 24 次調査（愛媛大学理学部構内）において前期末の土器が包含層中より出土している。また、後期には同 11 次調査にて屋外炉が検出されているほか、24 次調査、27 次調査、30 次調査などでは該期の土器や焼土、炭化物の集中が確認されている。また、晩

期には理学部構内で多数の土器が出土している。一方、道後城北地区北部の祝谷地区では、地区扇端部にある土居窪遺跡から後期から晩期にかけての土器が出土している。

(2) 弥生時代

前期では文京遺跡4次調査（東中学校構内）にて竪穴住居が検出されているほか、岩崎遺跡からは環濠と思われる大型溝や土坑群が確認されている。また、持田町三丁目遺跡からは土壙墓群や土器棺墓群で構成される墓域が確認されるなど、前期の集落様相が明らかになりつつある。

中期には祝谷地区の丘陵上にて平形銅剣の埋納土坑が発見された祝谷六丁場遺跡や、大規模な環濠集落と考えられる祝谷畑中遺跡があり、特に祝谷畑中遺跡からは弥生土偶が出土している。また、前述の土居窪Ⅲ遺跡からは櫛状木器や木鋏などの木製品が出土している。中期後半から後期では城北地区を中心に大規模な集落が展開されるようになり、竪穴住居が密集する居住区と、貯蔵穴や高床式倉庫群、さらに居住区東側には超大型の掘立柱建物や竪穴住居、方形壇などからなる集落中枢部が存在している。

(3) 古墳時代

集落遺跡では、松山北高等学校遺跡2次調査や松山大学構内遺跡2次調査にて前期の竪穴住居が検出されているが、遺構・遺物共に検出事例は少ない。中期から後期にかけては松山大学構内遺跡にて竪穴住居や溝、土坑など多数の遺構・遺物が確認されているほか、文京遺跡14次調査ではカマドを付設する竪穴住居群が発見され、フイゴの羽口や鉄滓の出土が確認されている。古墳は祝谷丘陵部にて、祝谷古墳群や御幸寺山古墳群、常信寺古墳群など、中期から後期の古墳が広く分布している。

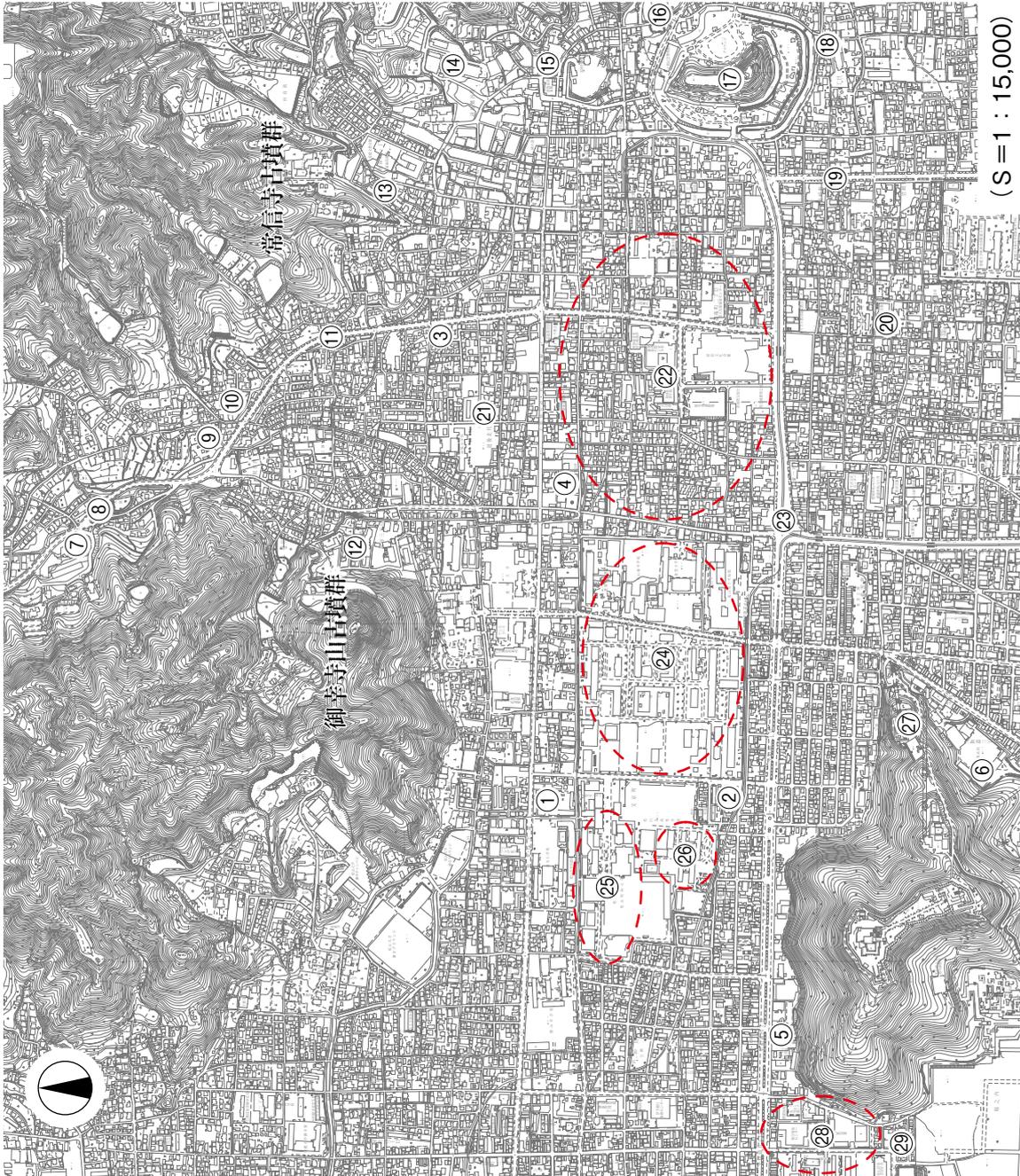
(4) 古 代

律令時代、愛媛県は伊予国と称されるようになり14の『郡』が設置された。松山平野には、そのうちの5郡（伊予・和気・久米・温泉・浮穴）が置かれていた。道後地区は温泉群に属しており、白鳳期の瓦が出土した湯之町廃寺や内代廃寺が古くから知られている。近年の調査では、道後温泉本館に隣接した位置で実施した道後湯月町遺跡にて池跡が発見され、飛鳥時代から平安時代の土器や瓦が多数出土している。また、前述の岩崎遺跡では奈良時代後半の区画溝（全長約1m、L字状に屈曲）や平安時代の掘立柱建物址などが検出されている。

(5) 中 世

道後地区では耕作地や集落が検出された道後今市遺跡があり、その東方には河野氏の居城である湯築城跡が存在している。

- ① 道後城北 RNB 遺跡
- ② 文京遺跡 29 次調査
- ③ 土居窪Ⅲ遺跡
- ④ 道後北代遺跡
- ⑤ 松山城北郭遺跡
- ⑥ 松山城東郭跡
- ⑦ 祝谷六丁場遺跡
- ⑧ 祝谷丸山遺跡
- ⑨ 祝谷大地ヶ田遺跡
- ⑩ 祝谷本村遺跡
- ⑪ 祝谷畑中遺跡
- ⑫ 御幸寺山東麓遺跡
- ⑬ 湯之町廃寺
- ⑭ 道後鷺谷遺跡
- ⑮ 道後湯月町遺跡
- ⑯ 道後姫塚遺跡
- ⑰ 湯築城跡
- ⑱ 内代廃寺
- ⑲ 岩崎遺跡
- ⑳ 持田町三丁目遺跡
- ㉑ 土居窪遺跡
- ㉒ 道後今市遺跡
- ㉓ 道後一万遺跡
- ㉔ 文京遺跡
- ㉕ 松山大学構内遺跡
- ㉖ 松山北高等学校遺跡
- ㉗ 東雲神社遺跡
- ㉘ 若草町遺跡
- ㉙ カキツバタ遺跡



第 1 図 道後城北地区の主要遺跡分布図

第2章 道後城北 RNB 遺跡

第1節 調査の経緯

1987（昭和62）年11月、南海放送株式会社取締役社長 門田 圭三氏より松山市道後樋又6-24地内における南海放送テレビスタジオ建設工事に伴う埋蔵文化財確認願が松山市教育委員会文化教育課（以下、文化教育課）に提出された。確認願が提出された申請地は松山市が指定する埋蔵文化財包蔵地の『No.67 文京遺跡』内に所在する。

1987（昭和62）年12月、文化教育課は申請地内における埋蔵文化財の有無を確認するため、試掘調査を実施した。調査の結果、柱穴と弥生土器や縄文土器を確認した。

この結果を受け、申請者と文化教育課は協議を行い、開発工事によって失われる遺跡に対して記録保存のための発掘調査を実施することになった。調査は文化教育課が主体となり、1988（昭和63）年1月5日より開始した。

第2節 層位

調査地は、調査以前は南海放送社屋の玄関口及び車両進入口として使用されており、現況の標高は27.40 m前後を測る。調査地の基本層位は、以下の11層である（第4図、図版1）。

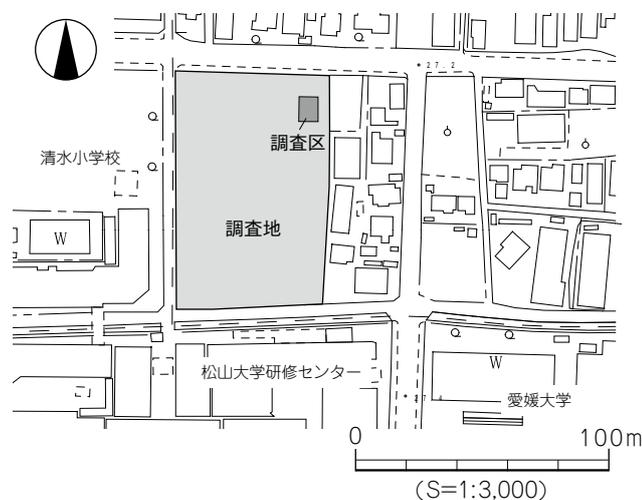
第1層：バラス層で、層厚10～20cmを測る。

第2層：真砂土層で、層厚40～80cmを測る。

第3層：黄橙色土で、層厚5～10cmを測る。

第4層：暗灰色砂質土で、層厚5～20cmを測る。

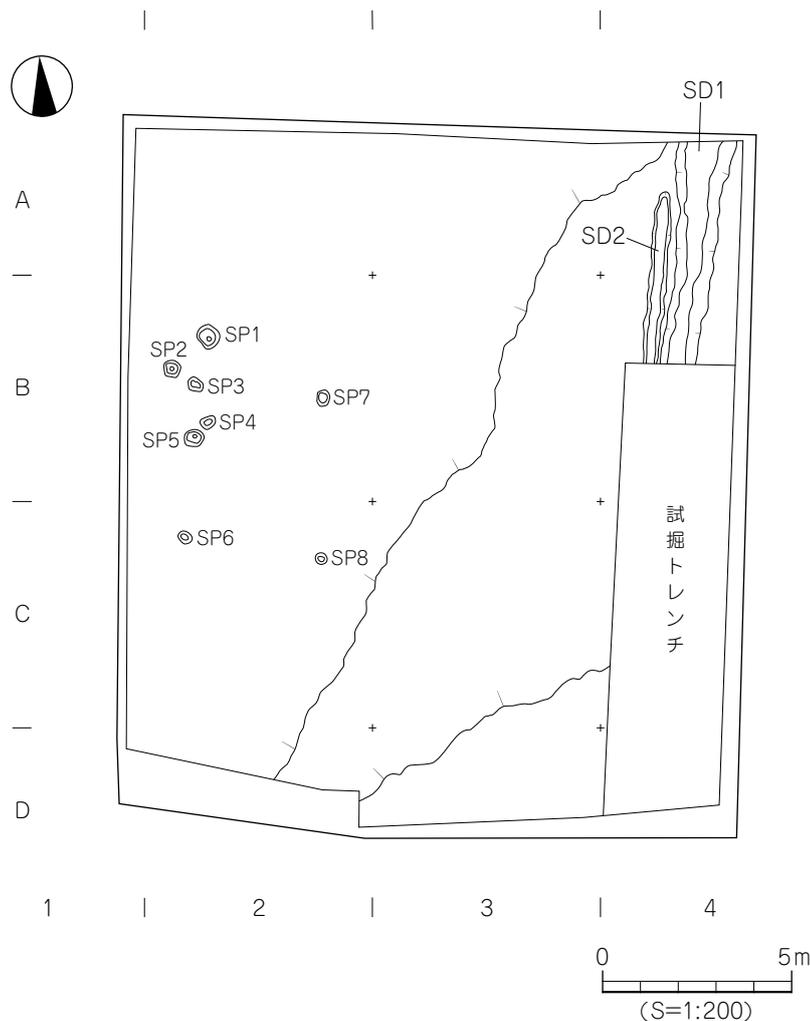
第5層：灰色粘質土で、層厚5～15cmを測る。



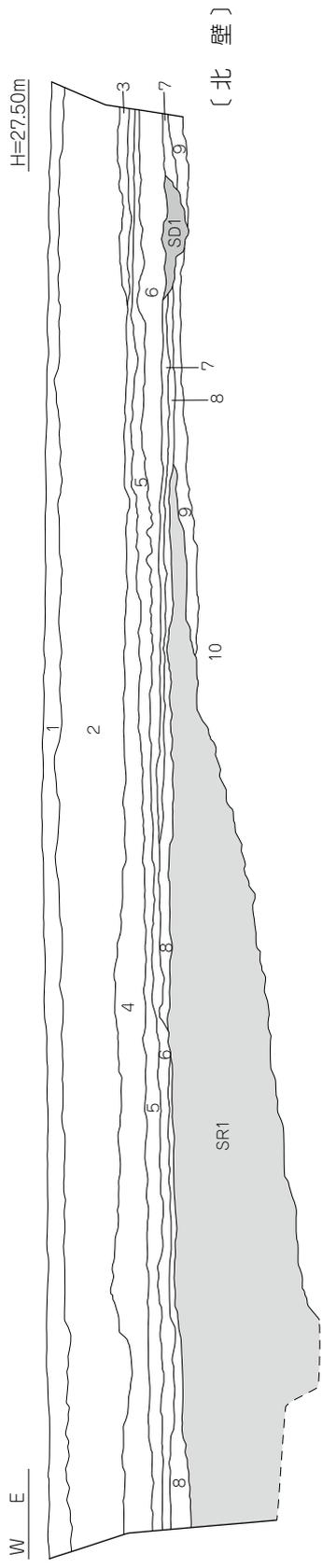
第2図 調査区測量図

- 第 6 層：黄褐色土で、層厚 5～15cm を測る。本層上面にて、柱穴を検出した。本層中からは、土師器や須恵器の破片が少量出土した。
- 第 7 層：緑黄灰色土で、層厚 5～10cm を測る。本層上面にて、溝を検出した。なお、本層中からは、遺物の出土はない。
- 第 8 層：にぶい黄色土で、層厚 5～15cm を測る。本層中からは、遺物の出土はない。
- 第 9 層：暗茶褐色粘質土で、層厚 5～40cm を測る。本層中からは、弥生土器や縄文土器が出土した。また、本層上面にて、自然流路を確認した。
- 第 10 層：黄色シルトで、層厚 10～110cm を測る。本層中からは、縄文土器が多数出土した。本層上面の標高を測量すると、調査地東側から西側に向けて傾斜をなし、東側では標高 25.70 m、西側では標高 23.30 m を測り、高低差 2.40 m となる。
- 第 11 層：河川氾濫堆積物で、灰色砂や径 5～20cm 大の円礫を含む。

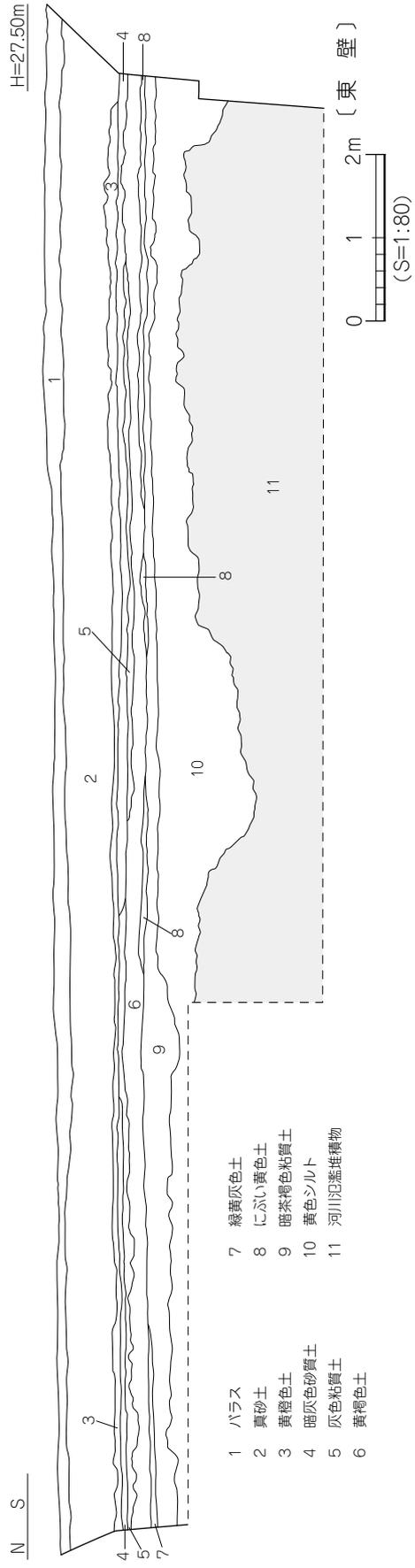
検出遺構や出土遺物より、第 10 層は縄文時代、第 9 層は弥生時代、第 6 層は中世までに堆積した土層と推測される。なお、調査にあたり調査地内を 5 m 四方のグリッドに分けた。グリッドは遺構の位置表示や遺物の取り上げ等に利用した。



第 3 図 遺構配置図



〔北壁〕



- | | | | |
|---|--------|----|---------|
| 1 | バラス | 7 | 緑黄灰色土 |
| 2 | 真砂土 | 8 | にふい黄色土 |
| 3 | 黄橙色土 | 9 | 暗赤褐色粘質土 |
| 4 | 暗灰色砂質土 | 10 | 黄色シルト |
| 5 | 灰色粘質土 | 11 | 河川沉澱堆積物 |
| 6 | 黄褐色土 | | |

層位

第4図 北壁・東壁土層図

第3節 遺構と遺物

調査では、溝2条と柱穴8基を検出した。このほか、調査壁の土層観察により自然流路1条を確認した。遺物は縄文土器や弥生土器、土師器、須恵器、石器が出土している。

(1) 溝

SD1 (第3・4図)

調査区北東部A・B4区で検出した南北方向の溝で、溝南側は試掘調査用トレンチに削平され、北側は調査区外に続く。第7層上面での検出であり、第6層が覆う。規模は検出長5.35m、幅0.50～1.30m、深さは検出面下3～7cmを測る。断面形態はレンズ状を呈し、埋土は灰色砂である。溝基底面は平坦であるが、北側から南側に向けて緩傾斜をなす(比高差4cm)。溝内からは、遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、検出状況から概ね中世段階の溝と考えられる。

SD2 (第3図)

調査区北東部A・B4区で検出した南北方向の溝で、溝南側は試掘調査用トレンチに削平されている。第7層上面での検出であり、第6層が覆う。溝の規模は、検出長4.40m、幅0.20～0.25m、深さは検出面下3～5cmを測る。断面形態はレンズ状を呈し、埋土はSD1と同様の灰色砂である。溝基底面は平坦であり、高低差は認められない。溝内からは、遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、SD1と埋土や検出状況が酷似することから、概ね中世段階の溝と考えられる。

(2) 自然流路

SR1 (第4図)

調査区北壁の土層観察により確認した北東-南西方向の流路で、本来は第9層上面での検出であり第8層が流路上面を覆う。規模は検出長21.70m、幅11.00m、深さ1.60mを測る。埋土は灰色砂を基調とし、径10～20cm大の円礫を含む。

時期：検出状況から、概ね弥生時代以降の流路とする。

(3) 柱 穴 (第3図、図版1)

調査では、8基の柱穴を確認した。すべて、第6層上面での検出である。平面形態は円形と楕円形があり、規模は径0.23～0.60m、深さ4～14cmを測る。柱穴掘り方埋土は、すべて暗灰色土である。このうち、3基の柱穴(SP1・2・5)からは柱痕を検出した。規模は径6～8cm、深さ3～10cmを測り、柱痕埋土は粘性の強い暗灰色土である。柱穴内からは、土師器や須恵器の小片が少量出土した。

(4) 包含層出土遺物

調査では、第9層や第10層中より縄文土器が出土した。ここでは、調査の状況をふまえて遺物の説明を行う。

まず、第9層を便宜上、上下2層に分層し、上層を第9A層、下層を第9B層として掘り下げを行った。測量用網を使用して20分の1縮分にて遺物の出土状況図を作成し、遺物の取り上げを行った(第5図)。なお、第9A層の掘り下げでは、調査区東半部に比較的まとまって遺物が出土し、第9B層ではほぼ全域に点在してみられた。その後、第10層黄色シルトの掘り下げを進めた。まず、第10層検出面より約10cmの地点付近まで掘り下げを行い、遺物の取り上げを行った(第10A層の調査)。第10A層の掘り下げでは調査区北東部を中心に遺物が集中して出土し、遺物の取り上げ後、さらに10cmの掘り下げを行い、遺物の検出と取り上げを行った(第10B層の調査)。第10B層の調査では、遺物の出土量は減少し、調査区北東部に散在して出土した。なお、第10層出土遺物のうちトレンチやベルト等、出土層位の不明な遺物は『第10A層または第10B層出土遺物』として実測図を掲載している。

1) 第9A層出土遺物(第6図、図版3)

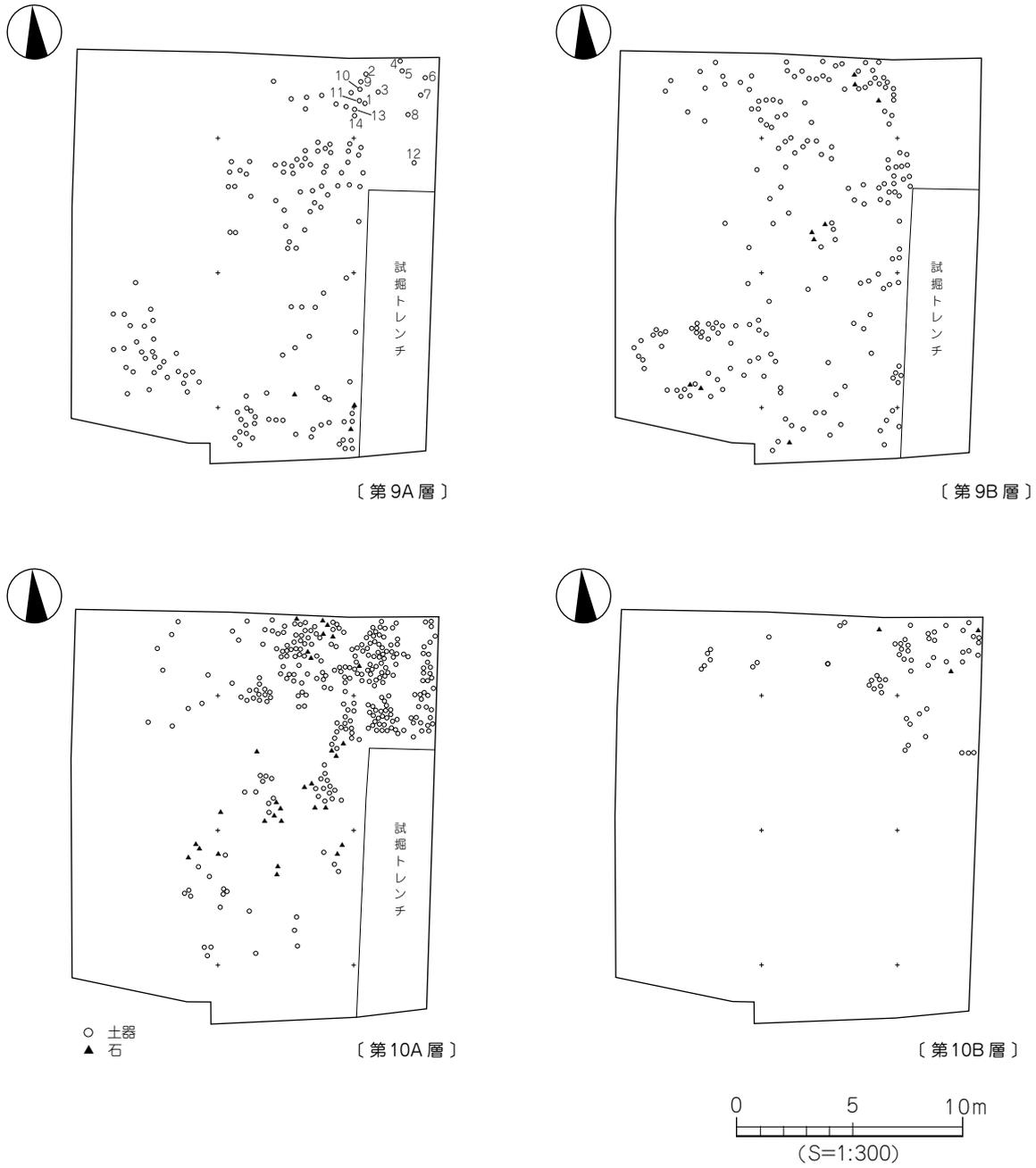
1～4は刻目凸帯文を有する深鉢で、1と2は口縁部に刻目をもつ。5～7は浅鉢で、5は口縁部に刻目、口縁部内面には1条の沈線をもち、内外面にはヨコ方向の丁寧なミガキ調整が施され、赤色顔料が付着する。胎土中には石英、長石のほか角閃石が少量含まれる。6は口縁部内面に1条の沈線をもち、内面に赤色顔料が付着する。7は胴部片で、凸帯上に刻目をもつ。8・9は深鉢、10は浅鉢で、8・9は高台の付く底部、10は突出部をもつ上げ底である。11はサヌカイト製の石匙で、側面に抉りをもつ。12はサヌカイト製の石錐、13はスクレイパーである。

2) 第9B層出土遺物(第6・7図、図版3・4)

14～16は刻目凸帯文を有する深鉢で、14・15は口縁部に刻目をもつ。17は口縁部外面に方形区画文が描かれ、RL縄文を施す。18は口縁部が「く」の字状に屈曲し、口縁部外面に斜線文を施す。19は口縁部がやや肥厚し、内外面には貝殻条痕を施す。20～23は浅鉢。20は推定口径38.8cmを測り、胴部外面に1条の沈線が巡る。内外面にはヨコ方向のミガキ調整が施され、口縁部と胴部外面には赤色顔料が付着する。21は波状口縁で、内面に方形の沈線をもつ。22は推定口径36.1cmを測り、胴部外面に斜線文を施す。23は口縁部小片で、刻目をもつ。24は壺の肩部片で、外面に赤色顔料が付着する。25は深鉢の底部で、高台が付く。26は打製石鏃、27～31は素材剥片で、石材はすべてサヌカイトである。

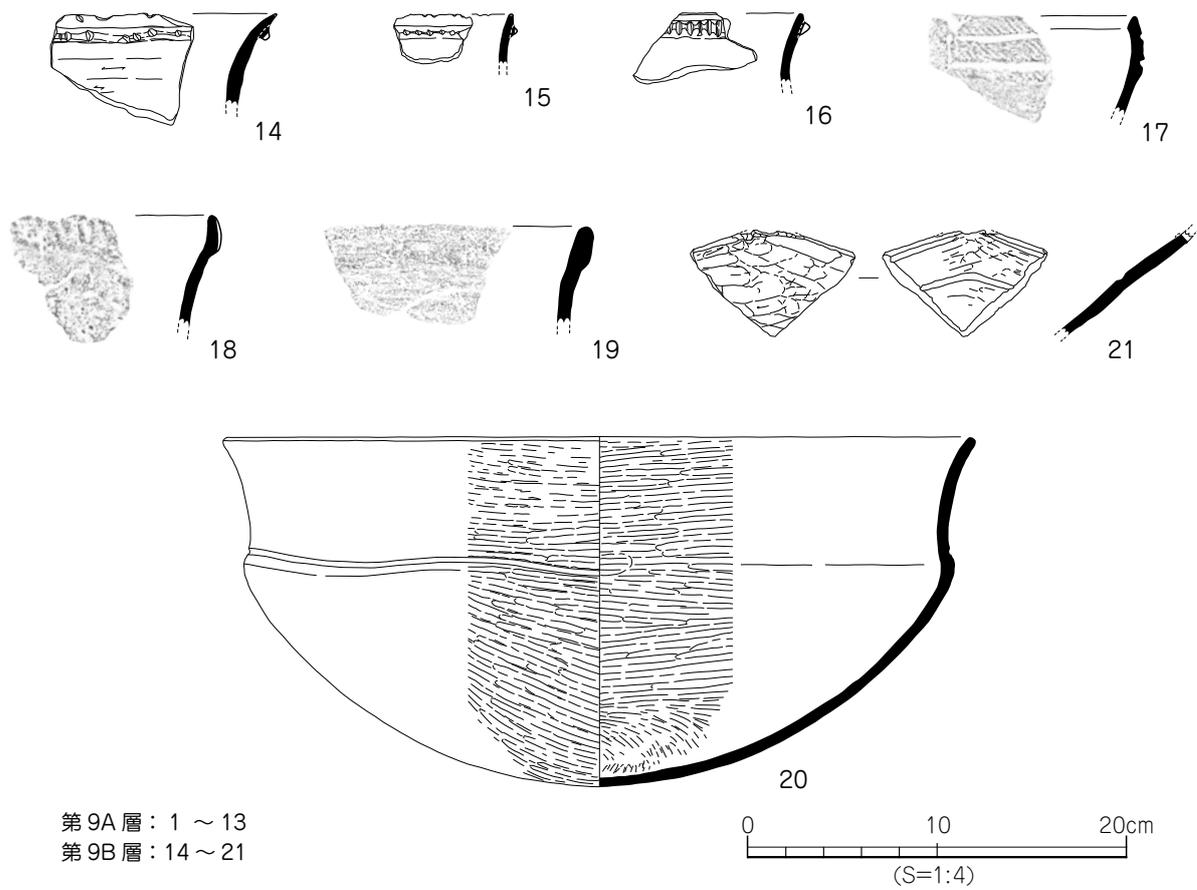
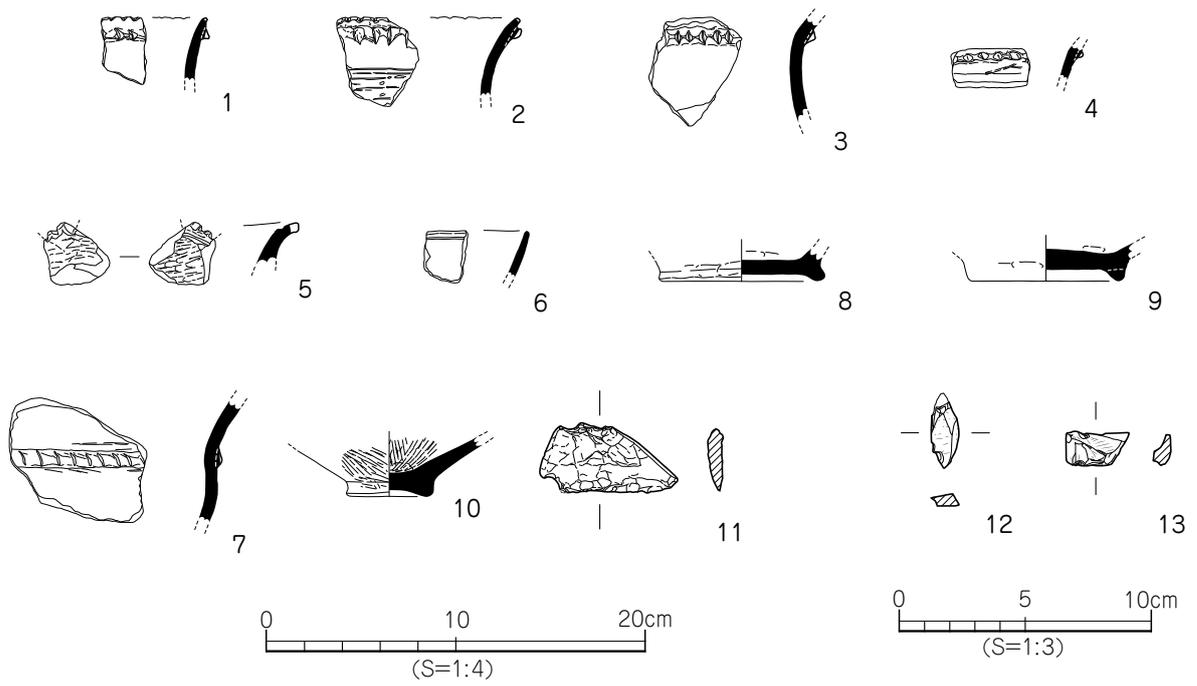
3) 第10A層出土遺物(第8・9図、図版4・5)

32～41は有文の深鉢口縁部である。32は波状口縁の波頂部をもち、口縁部内面は肥厚し、波頂部に孔を穿つ。33～36は口縁部外面が幅広く肥厚し、波頂部に平行沈線をもつ。なお、34は口縁端部に刻目をもち、33・34の器面には条痕を残す。38～41は口縁部が「く」の字状に屈曲し、口縁部に平行沈線をもつ。42～50は無文の深鉢口縁部である。42・43は口縁端部が面取りされ、口縁端部に刻目をもつ。44～46は口縁部が外反し、口縁端部がわずかに肥厚する。46の外面には条痕が残る。47・48は口縁部が上下方に肥厚し、48の器面にはミガキ調整を施す。49は口縁端部が肥厚し、器面に条痕を残す。50は内湾口縁で、内外面に巻貝条痕を施す。51は有文深鉢の胴部片で、沈線とRL縄文を施す。52は小型の鉢で、胴部下半にRL縄文をもつ。53・54は無文の浅鉢口縁部で、53の器

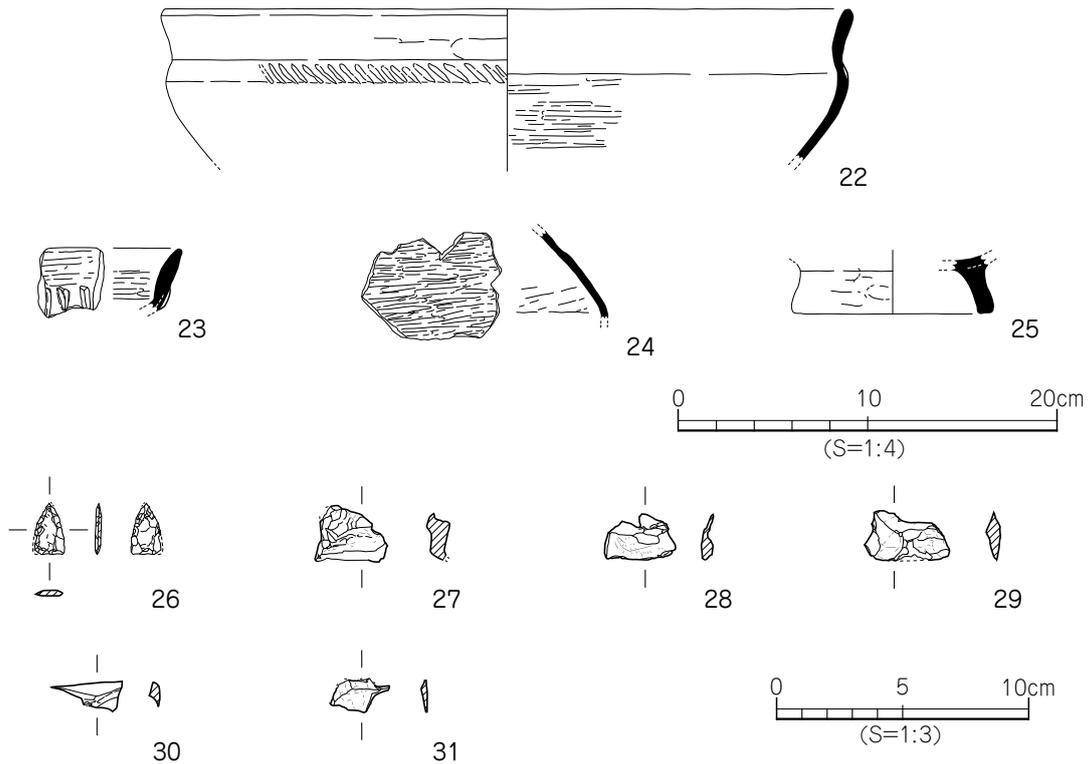


第5図 第9層及び第10層遺物出土状況図

遺構と遺物



第6図 第9層出土遺物実測図



第7図 第9B層出土遺物実測図

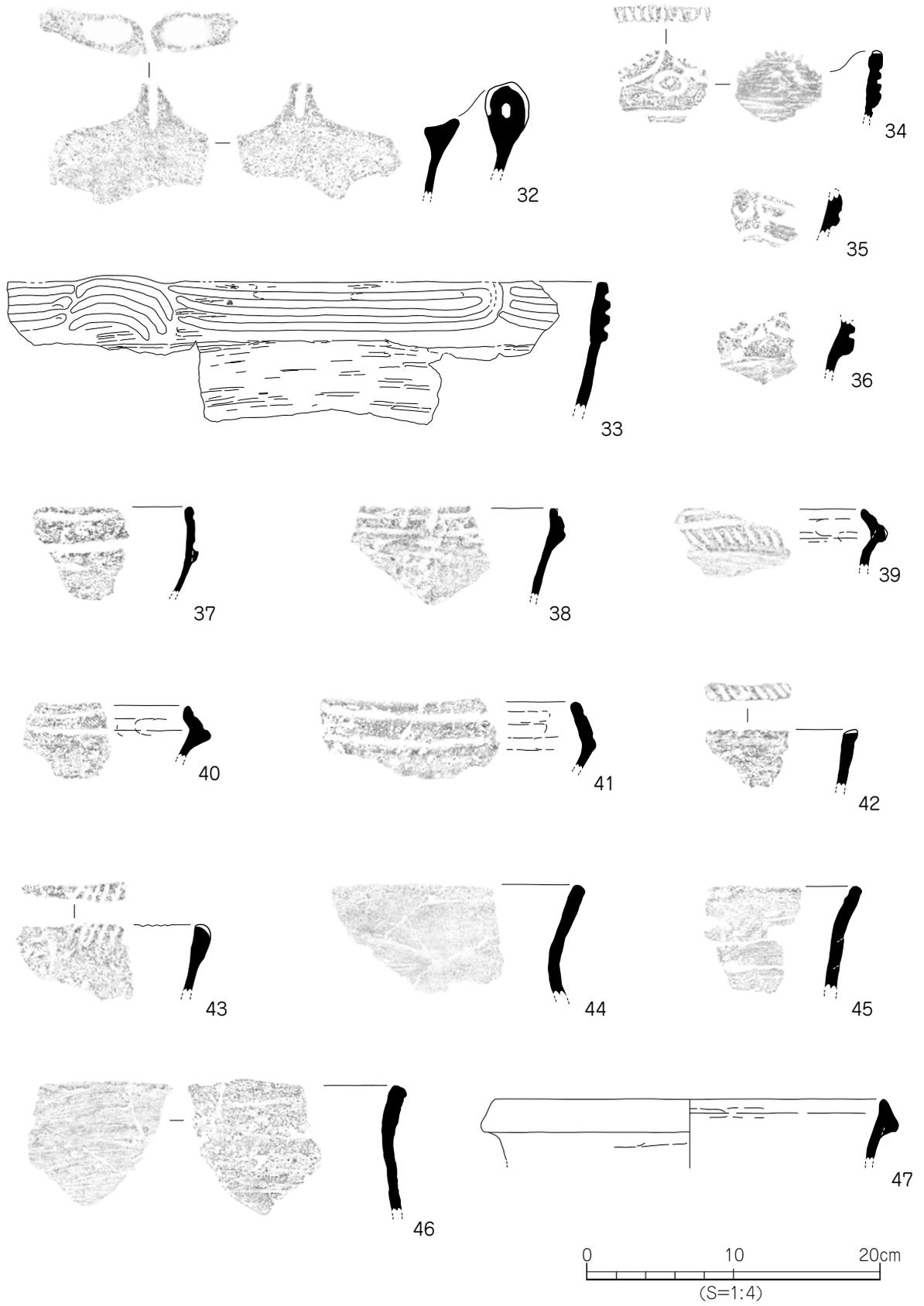
面にはミガキ調整を施す。55～67は深鉢の底部である。55～64は高台の付く底部で、55～57は上げ底気味となる。65・66は底部中央部が凹み、67は平底である。なお、65～67の器面にはミガキ調整を施す。

4) 第10B層出土遺物 (第9・10図、図版6)

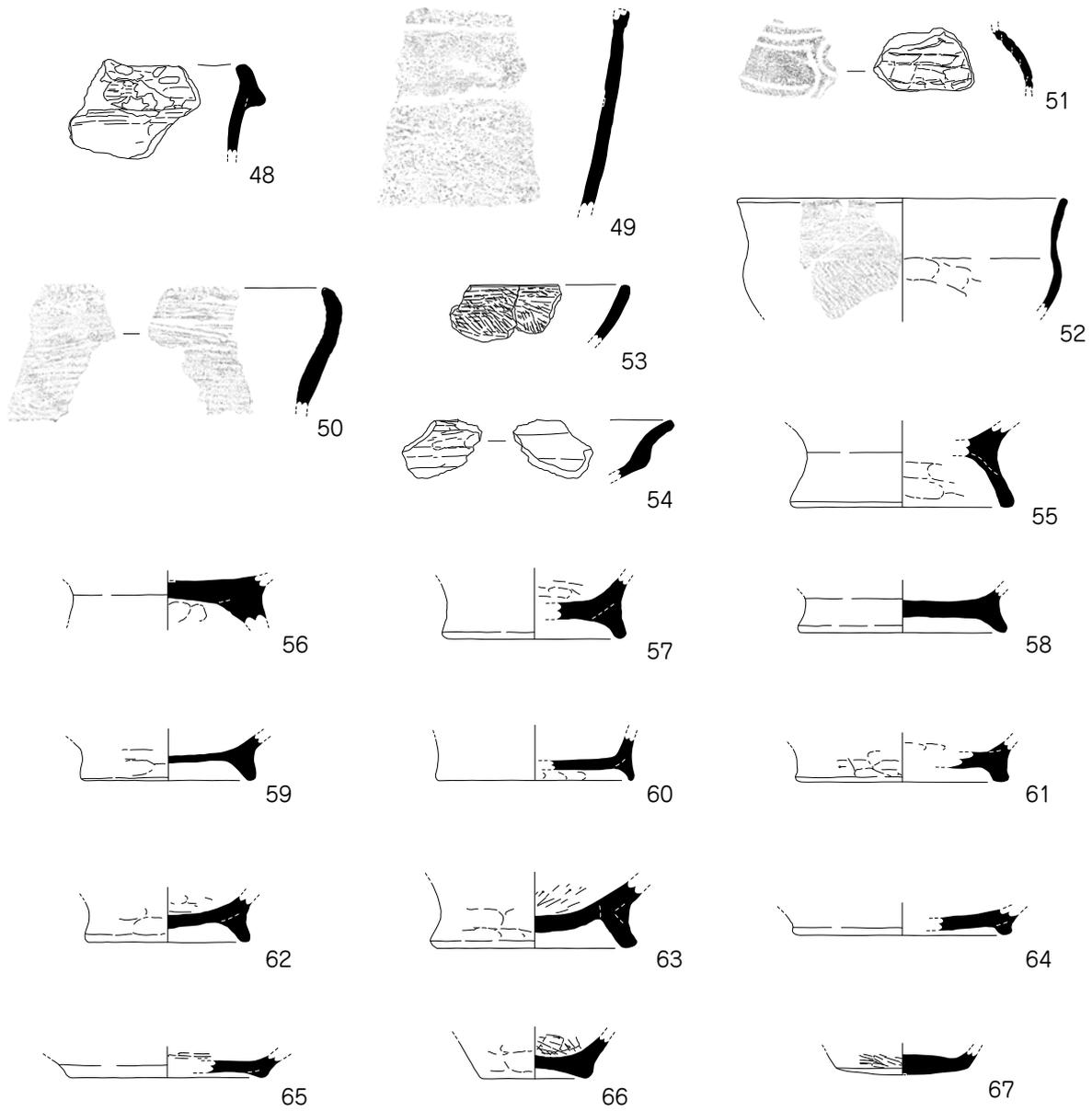
68～70は有文の深鉢口縁部である。68・69は波状口縁の波頂部で、口縁部内面が肥厚し、68の波頂部側面には沈線、口縁端部には刻目を施す。70は幅広く肥厚する縁帯部をもち、口縁端部に刻目、縁帯部に弧状の文様を施す。71～73は無文の深鉢口縁部である。71は口縁部が外反し、口縁端部がわずかに肥厚する。器面には、巻貝条痕を施す。72は口縁部が上下方に肥厚し、RL縄文を施す。73は口縁部がわずかに肥厚し、外面には条痕を残す。74は壺形土器で、対向する把手部をもつ。75～78は深鉢の底部で、75は上げ底気味となる。

5) 第10A層または第10B層出土遺物 (第11・12図、図版6)

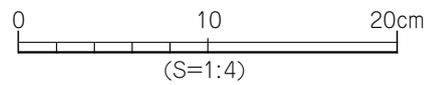
79～86は有文の深鉢口縁部である。79～82は波状口縁の波頂部で、口縁部内面が肥厚する。80の波頂部側面には沈線文を施す。79・80の外面には、条痕を残す。81～83は口唇部に1条の凹線をもつ。なお、81の口縁端部には刻目、84の口縁部内面には刻目をもつ。85・86の口縁部は「く」の字状に屈曲し、85の口縁部には2条の平行沈線、86は2条の平行沈線と斜線文を施す。87は胴部片で、渦巻き状の文様を描く。88は無文の深鉢口縁部で、口縁部外面は肥厚し、器面には条痕を残す。89・90は浅鉢で、89は外反、90は内湾する口縁部をもち、器面にはヨコ方向の丁寧なミガキ調整を施す。91はスクレイパー、92は素材剥片で、材質は結晶片岩である。



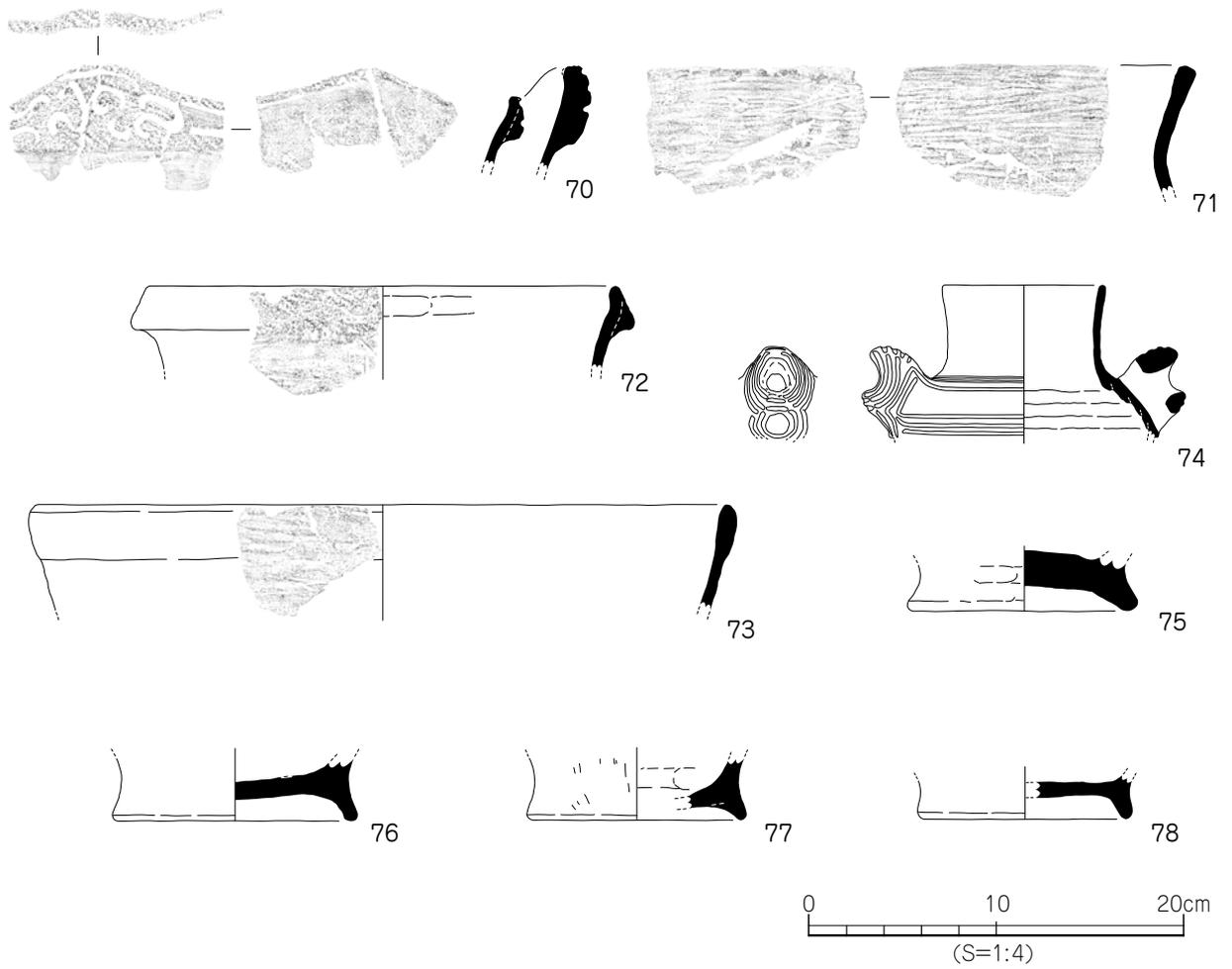
第8図 第10A層出土遺物実測図



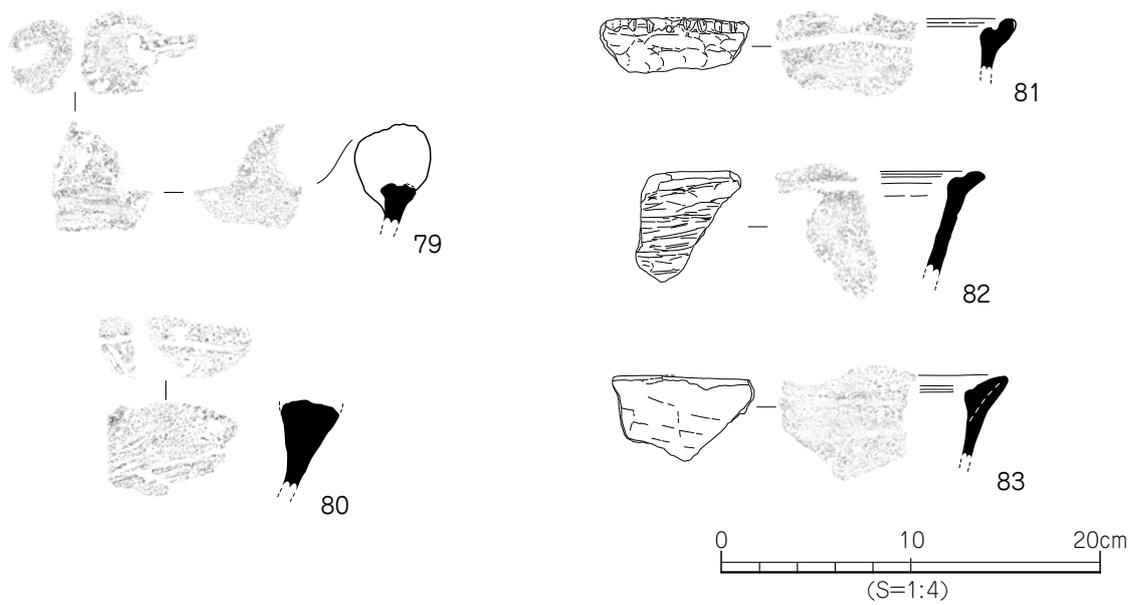
第 10A 層：48～67
 第 10B 層：68・69



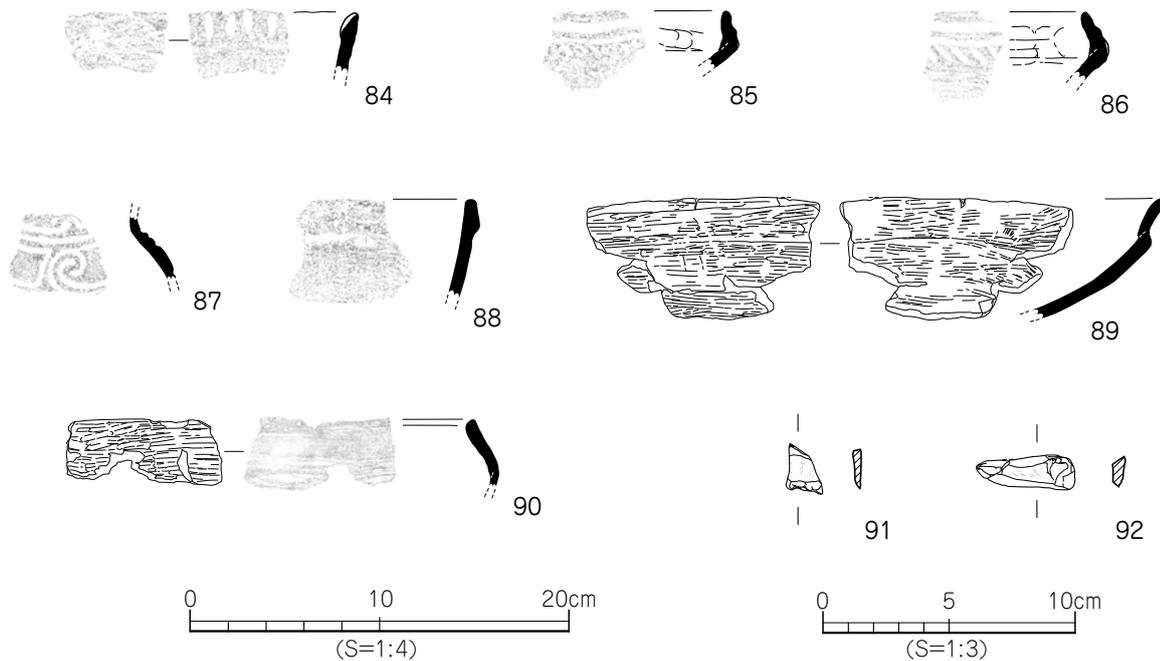
第 9 図 第 10 層出土遺物実測図



第10図 第10B層出土遺物実測図



第11図 第10A層または第10B層出土遺物実測図(1)



第12図 第10A層または第10B層出土遺物実測図(2)

第4節 小結

本調査では中世段階の溝や柱穴のほか、第9・10層中より縄文土器が数多く検出された。このうち、2条の溝は灰色砂で埋没しており、水路として機能していたものと思われる。建物址は未検出であるが、8基の柱穴は近隣地域に該期の建物が存在することを示唆するものといえよう。なお、調査時には平面調査が実施できなかったものの、調査地内には概ね弥生時代以降に自然流路が存在していたことも判明した。

一方で、第9層や第10層中からは縄文土器が多数出土した。第9層中から刻目凸帯文深鉢が数多く出土し、その形態は口縁端部を刻み、口端部よりやや下がった位置に断面方形状または円形状の隆帯を貼り付け、隆帯上に刻むものや、肩部に隆帯を貼り付け、隆帯上に「V」字状の刻目を施すものなどである。それらの特徴より、第9層出土品は北部九州編年の夜臼Ⅱa式に相当するものと考えられ、縄文時代晩期後葉期の資料である。一方、第10層出土品からは有文土器深鉢を中心に、無文の粗製土器とのセット関係が認められた。このうち、深鉢には波状口縁の波頂部をもち、口縁内面が肥厚するタイプ〔四ツ池式相当〕や縁帯部の肥厚や方形区画帯と文様を有するタイプ〔津雲A式相当〕、口縁部内面の肥厚や胴部に横方向の文様を有するタイプ〔彦崎K1式相当〕、「く」の字状に屈曲する口縁部と平行沈線を有するタイプ〔彦崎K2式相当〕などがあり、これらの特徴より、第10層出土品は縄文時代後期中葉期の資料と考えられる。これらの縄文土器が層位的に検出されたことは重要な成果であり、今後、松山平野における縄文土器研究に役立つ貴重な資料といえよう。

遺構一覧・遺物観察表 — 凡例 —

以下の表は、本調査地検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。記載内容は、以下のとおりである。

(1) 遺構一覧表

- 地区欄 グリッド名を記載。
 規模欄 () : 検出値
 出土遺物欄 土器名称を略記した。
 例) 土師→土師器、須恵→須恵器

(2) 遺物観察表

- 法量欄 () : 復元推定値
 胎土欄 胎土欄は混和剤を略記した。
 例) 石→石英、長→長石、金→金ウンモ
 () 中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。
 例) 石・長(1~4) → 「1~4mm大の石英・長石を含む」である。
 焼成欄 焼成欄の略記について
 ◎→良好、○→良

表2 溝一覧

溝 (SD)	地区	断面形	規模 長さ×幅×深さ (m)	埋土	出土遺物	時期	備考
1	A・B4	レンズ状	(5.35) × 1.30 × 0.07	灰色砂		中世	
2	A・B4	レンズ状	(4.40) × 0.25 × 0.05	灰色砂		中世	

表3 柱穴一覧

柱穴 (SP)	地区	平面形	規模 長径×短径×深さ (m)	埋土	出土遺物	備考
1	B2	楕円形	0.60 × 0.50 × 0.08	暗灰色土	土師	柱痕
2	B2	円形	0.32 × 0.31 × 0.06	暗灰色土		柱痕
3	B2	楕円形	0.36 × 0.27 × 0.04	暗灰色土		
4	B2	楕円形	0.44 × 0.27 × 0.06	暗灰色土		
5	B2	楕円形	0.52 × 0.42 × 0.06	暗灰色土		柱痕
6	C2	円形	0.27 × 0.26 × 0.05	暗灰色土		
7	B2	楕円形	0.39 × 0.29 × 0.08	暗灰色土		
8	C2	円形	0.24 × 0.23 × 0.14	暗灰色土	土師・須恵	

表4 第9A層出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
1	深鉢	残高 3.3	口縁部と凸帯上に刻目あり。	ナデ	ナデ	暗褐色 褐色	石・長(1~3) 金 ◎		3
2	深鉢	残高 4.2	口縁部と凸帯上に刻目あり。	ケズリ	ナデ	暗褐色 黒褐色	石・長(1~2) 金 ◎		3
3	深鉢	残高 5.6	口縁部を欠損。凸帯上に刻目あり。	ナデ	マメツ	灰褐色 灰褐色	密 ◎		3

第9A層出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
4	深鉢	残高 1.9	口縁部を欠損。凸帯上に刻目あり。	ケズリ	ナデ	褐色 褐色	石・長 (1~2) 金◎		
5	浅鉢	残高 2.2	口縁部に刻目、口縁部内面に1条の沈線あり。内外面に赤色顔料付着。	ミガキ	ミガキ	灰褐色 赤褐色	石・長 (1) 金◎ 角閃石		3
6	浅鉢	残高 2.5	口縁部内面に1条の沈線あり。内面に赤色顔料付着。	マメツ	マメツ	赤褐色 赤褐色	石・長 (1~2) 金◎		3
7	浅鉢	残高 6.5	胴部片。凸帯上に刻目あり。	ナデ	マメツ	褐色 褐色	石・長 (1~2) 金◎		3
8	深鉢	底径 8.4 残高 1.8	底部完形。高台の付く底部。	マメツ	ナデ	褐色 褐色	石・長 (1~3) 金◎		3
9	深鉢	底径 (7.8) 残高 2.1	2/3の残存。高台の付く底部。	ナデ	ナデ	灰褐色 灰褐色	石・長 (1~4) 金◎ 角閃石		
10	浅鉢	底径 3.9 残高 3.2	底部完形。突出部をもつ上げ底。	ミガキ	ミガキ	灰褐色 黒褐色	石・長 (1~2) 金◎		3

表5 第9A層出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
11	石匙	完形	サヌカイト	7.30	3.70	0.70	22.46	挟りあり。	3
12	石錐	ほぼ完形	サヌカイト	3.00	1.60	0.50	1.67	打製	3
13	スクレイパー	完形	サヌカイト	2.50	1.35	0.65	2.17		3

表6 第9B層出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
14	深鉢	残高 5.0	口縁部と凸帯上に刻目あり。	ナデ	ナデ	黄褐色 黄褐色	石・長 (1~2) 金◎		3
15	深鉢	残高 2.6	口縁部と凸帯上に刻目あり。	マメツ	ナデ	暗褐色 暗褐色	石・長 (1~2) 金◎		3
16	深鉢	残高 4.7	口縁部は面取りされ、凸帯上に刻目あり。	マメツ	ナデ	暗褐色 暗褐色	石・長 (1~3) 金◎		3
17	深鉢	残高 5.3	口縁部外面に方形区画文と RL 縄文あり。	ミガキ	ミガキ	褐色 暗褐色	石・長 (1~2) 金◎		3
18	深鉢	残高 6.0	口縁部は「く」の字状に屈曲し、口縁部外面に斜線文あり。	ナデ	マメツ	黄橙色 橙褐色	石・長 (1~2) 金◎		3
19	深鉢	残高 5.2	口縁部は肥厚する。	貝殻条痕	貝殻条痕	黄褐色 灰黄褐色	石・長 (1~2) 金◎		3
20	浅鉢	口径 (38.8) 残高 18.6	口縁部は外反し、胴部に沈線1条が巡る。外面に赤色顔料付着。	ミガキ	ミガキ	黒褐色 暗灰褐色	石・長 (1) 金◎		3
21	浅鉢	残高 4.0	内面に方形の沈線が巡る。	ケズリ	ミガキ	黄褐色 灰褐色	石・長 (1) 金◎		3
22	浅鉢	口径 (36.1) 残高 8.1	胴部最大径部に斜線文あり。	マメツ	ミガキ	暗灰色 暗灰色	石・長 (1~4) 金◎		3
23	浅鉢	残高 3.4	口縁下に刻目あり。	ミガキ	ミガキ	黄褐色 暗褐色	石・長 (1~2) 金◎		4
24	壺	残高 4.6	外面に赤色顔料付着。	ミガキ	ミガキ	褐色 黄褐色	石・長 (1) 金◎		4
25	深鉢	底径 (10.4) 残高 3.1	高台状の底部。1/6の残存。	マメツ	マメツ	灰褐色 灰黄褐色	石・長 (1~3) 金◎		

遺物観察表

表7 第9B層出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法 量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
26	石鏃	ほぼ完形	サヌカイト	2.05	1.20	0.20	0.69	打製	4
27	剥片	完形	サヌカイト	2.80	1.80	0.45	2.28		4
28	剥片	ほぼ完形	サヌカイト	2.80	2.20	0.90	4.76		4
29	剥片	ほぼ完形	サヌカイト	3.40	2.00	0.45	2.59		4
30	剥片	ほぼ完形	サヌカイト	2.80	1.20	0.45	0.89		4
31	剥片	ほぼ完形	サヌカイト	2.40	1.40	0.20	0.56		4

表8 第10A層出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
32	深鉢	残高 7.6	波状口縁。口縁部内面が肥厚。波頂部に穿孔あり。	マメツ	マメツ	黄褐色 黄褐色	石・長(1~3) ◎		4
33	深鉢	残高 8.8	口縁部外面が幅広く肥厚し、口縁部に刻目、波頂部に3条の平行沈線あり。	条痕	条痕	灰褐色 灰褐色	石・長(1~3) 金◎		4
34	深鉢	残高 4.6	口縁端に刻目、口縁部に文様あり。	条痕	条痕	黒色 暗褐色	石・長(1~3) ◎		4
35	深鉢	残高 2.9	口縁部に文様あり。	マメツ	マメツ	暗褐色 暗褐色	石・長(1~2) ◎		4
36	深鉢	残高 3.8	口縁部に刺突文あり。	ミガキ	ナデ	茶褐色 茶褐色	石・長(1~2) 金◎		4
37	深鉢	残高 5.9	口縁部に方形区画文を施し、RL縄文あり。	マメツ	条痕	灰黄色 黒色	石・長(1~3) ◎		4
38	深鉢	残高 6.1	口縁部に2条の平行沈線あり。	マメツ	ミガキ	灰褐色 灰褐色	石・長(1~2) 金◎		4
39	深鉢	残高 4.0	口縁部に平行沈線2条と斜線文あり。	ナデ	ナデ	茶褐色 暗灰褐色	石・長(1~2) 金◎		4
40	深鉢	残高 3.9	口縁部に平行沈線2条あり。	マメツ	ナデ	黄褐色 黄褐色	石・長(1~2) ◎		4
41	深鉢	残高 4.6	口縁部に平行沈線2条あり。	マメツ	ナデ	黄褐色 黄褐色	石・長(1~2) 金◎		4
42	深鉢	残高 3.9	口縁端部は面取り、刻目あり。	条痕?	ナデ	暗灰褐色 黒褐色	石・長(1~3) 金◎		5
43	深鉢	残高 4.6	口縁端部は面取り、刻目あり。	マメツ	ナデ	灰褐色 灰色	石・長(1~2) ◎		5
44	深鉢	口径 (46.2) 残高 7.7	外反口縁。	条痕	ナデ	茶褐色 灰色	石・長(1~4) ◎		5
45	深鉢	口径 (36.6) 残高 7.2	外反口縁。	ナデ	ナデ	暗灰色 灰褐色	石・長(1~4) ◎		5
46	深鉢	口径 (40.6) 残高 8.6	外反口縁。	条痕	条痕?	茶褐色 暗灰褐色	石・長(1~3) 金◎		5
47	深鉢	口径 (26.4) 残高 4.1	口縁部は三角形に肥厚。	ナデ	ナデ	灰褐色 灰褐色	石・長(1~3) 金◎		5
48	深鉢	残高 5.2	口縁部は上下方に肥厚。	ミガキ→ナデ	ミガキ→ナデ	灰褐色 灰褐色	石・長(1~2) 金◎		5
49	深鉢	残高 11.4	口縁端部はわずかに肥厚。	条痕→ナデ	条痕→ナデ	茶褐色 茶褐色	石・長(1~3) 金◎		5
50	深鉢	残高 6.9	内湾口縁。	巻貝条痕	巻貝条痕	茶褐色 黒色	石・長(1~3) ◎		5

第 10 A 層出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
51	深鉢	残高 3.5	胴部片。沈線と RL 縄文あり。	マメツ	ケズリ	灰黄褐色 黒褐色	石・長 (1~2) 金◎		5
52	鉢	口径 (18.4) 残高 6.6	胴部下半に RL 縄文あり。	条痕	ナデ	黄褐色 灰褐色	石・長 (1~2) 金◎		5
53	浅鉢	口径 (30.2) 残高 3.2	内湾口縁。	ミガキ	ミガキ	暗褐色 黒褐色	石・長 (1) 金◎		
54	浅鉢	残高 3.4	外反口縁。	マメツ	マメツ	暗灰褐色 暗灰褐色	石・長 (1~3) ◎		
55	深鉢	底径 (12.5) 残高 4.6	高台の付く上げ底。1/2 の残存。	ナデ	ナデ	茶褐色 茶褐色	石・長 (1~3) 金◎		5
56	深鉢	残高 2.8	高台の付く上げ底。1/2 の残存。	マメツ	ナデ	茶褐色 黄褐色	石・長 (1~3) ◎		
57	深鉢	底径 (9.8) 残高 3.6	高台の付く上げ底。1/2 の残存。	マメツ	ナデ	黒褐色 灰黄色	石・長 (1~4) 金◎		
58	深鉢	底径 (11.8) 残高 2.6	高台の付く底部。1/2 の残存。	ナデ	ナデ	灰褐色 暗灰褐色	石・長 (1~2) 金◎		
59	深鉢	底径 (9.5) 残高 2.7	高台の付く底部。1/2 の残存。	ナデ	ナデ	褐色 褐色	石・長 (1~3) 金◎		5
60	深鉢	底径 (11.0) 残高 2.6	直立気味な高台の付く底部。1/4 の残存。	ナデ	ナデ	褐色 灰黄褐色	石・長 (1~3) ◎		
61	深鉢	底径 (11.5) 残高 2.4	直立気味な高台の付く底部。	ナデ	ナデ	褐色 褐色	石・長 (1~2) 金◎		
62	深鉢	底径 9.2 残高 2.7	高台の付く底部。完形品。	ナデ	ナデ	茶褐色 灰褐色	石・長 (1~3) 金◎		
63	深鉢	底径 (10.7) 残高 3.9	太めの高台が付く底部。1/2 の残存。	ナデ	ケズリ	褐色 褐色	石・長 (1~4) 金◎		5
64	深鉢	底径 (11.9) 残高 1.5	短い高台の付く底部。	ナデ	ナデ	褐色 褐色	石・長 (1~2) ◎		
65	深鉢	底径 (10.7) 残高 1.3	凹み底。	ミガキ	ミガキ	褐色 暗灰褐色	石・長 (1~3) 金◎		
66	深鉢	底径 5.8 残高 2.5	凹み底。	ミガキ	板ナデ	茶褐色 茶褐色	石・長 (1~3) ◎		5
67	深鉢	底径 (7.6) 残高 1.4	平底。	ミガキ	ミガキ	茶褐色 灰褐色	石・長 (1~2) 金◎		

表 9 第 10 B 層出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
68	深鉢	残高 7.0	波状口縁。口縁部内面が肥厚。波頂部側面に沈線あり。	条痕	条痕	橙色 橙色	石・長 (1~5) 金◎		6
69	深鉢	残高 6.0	波状口縁。口縁部内面が肥厚。	条痕?	マメツ	黄褐色 灰黄色	石・長 (1~3) ◎		6
70	深鉢	残高 5.6	縁帯部が幅広く肥厚し、口縁端に刻目、波頂部に文様あり。	ミガキ	ミガキ→ナデ	灰褐色 灰黄色	石・長 (1) ◎		6
71	深鉢	残高 6.9	外反口縁。口縁端は、わずかに肥厚。	巻貝条痕	巻貝条痕	黄褐色 灰黄褐色	石・長 (1~2) 金◎		6
72	深鉢	口径 (24.8) 残高 4.4	口縁部は上下方に肥厚し、肥厚部に RL 縄文あり。	条痕?	ナデ	暗灰黄色 暗灰黄色	石・長 (1~2) 金◎		6
73	深鉢	口径 (37.0) 残高 5.6	口縁部はわずかに肥厚。	条痕→ナデ	マメツ	茶褐色 灰褐色	石・長 (1~2) 金◎		6

遺物観察表

第10B層出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
74	壺	口径 (8.6) 残高 8.2	対向する把手部をもち、把手部と肩部に文様あり。	ナデ	ナデ	暗灰褐色 黒褐色	石・長 (1~2) 金◎		6
75	深鉢	底径 11.3 残高 3.2	高台の付く上げ底。完形。	ナデ	ナデ	茶褐色 茶褐色	石・長 (1~2) 金◎		
76	深鉢	底径 (12.4) 残高 3.4	高台の付く底部。1/2の残存。	マメツ	ナデ	灰褐色 灰褐色	石・長 (1~3) 金◎		
77	深鉢	底径 (11.0) 残高 3.3	高台の付く底部。1/4の残存。	ナデ	ナデ	茶褐色 灰褐色	石・長 (1~3) 金◎		
78	深鉢	底径 (10.7) 残高 2.3	高台の付く底部。1/4の残存。	マメツ	マメツ	茶褐色 暗灰色	石・長 (1~2) 金◎		

表10 第10層出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
79	深鉢	残高 5.4	波状口縁。刻目と凹線あり。	条痕	ナデ	黄褐色 黄褐色	石・長 (1~3) ◎		6
80	深鉢	残高 4.0	波状口縁。波頂部側面に沈線あり。波頂部先端を欠損。	条痕→ナデ	ナデ	褐色 黄褐色	石・長 (1~3) ◎		
81	深鉢	残高 2.8	口縁部内面が肥厚し、口唇部に1条の凹線と刻目あり。	ナデ	ナデ	茶褐色 黄褐色	石・長 (1~3) 金◎		6
82	深鉢	残高 5.7	口縁部内面が肥厚し、口唇部に1条の凹線あり。	条痕?	マメツ	灰黄褐色 黄褐色	石・長 (1~5) ◎		
83	深鉢	残高 4.5	口縁部内面が肥厚し、口唇部に1条の凹線あり。	ナデ	ナデ	茶褐色 茶褐色	石・長 (1~3) 金◎		
84	深鉢	残高 3.3	口縁部内面は、わずかに肥厚し、刻目あり。	条痕→ナデ	マメツ	褐色 橙色	石・長 (1~2) ◎	トレンチ	
85	深鉢	残高 3.1	「く」の字状口縁。口縁部に2条の平行沈線あり。	ナデ	ナデ	黄褐色 暗灰色	石・長 (1~2) 金◎	ベルト	
86	深鉢	残高 3.7	「く」の字状口縁。口縁部に2条の平行沈線と斜線あり。	ナデ	ナデ	茶褐色 暗褐色	石・長 (1~2) 金◎	トレンチ	6
87	深鉢	残高 3.5	胴部片。外面に渦巻状の文様あり。	マメツ	ケズリ	黒色 黒色	石・長 (1) 金◎		6
88	深鉢	残高 5.3	口縁部外面が肥厚。	条痕→ナデ	条痕→ナデ	茶褐色 灰褐色	石・長 (1~2) 金◎	ベルト	
89	浅鉢	残高 6.4	外反口縁。	ミガキ	ミガキ	暗褐色 褐色	石・長 (1~5) 金◎		6
90	浅鉢	口径 (26.2) 残高 3.6	内湾口縁。	ミガキ	ミガキ	灰褐色 暗褐色	石・長 (1~2) 金◎	トレンチ	6

表11 第10層出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
91	スクレイパー	完形	結晶片岩	2.00	1.45	0.34	1.01	ベルト	6
92	剥片	ほぼ完形	結晶片岩	3.90	1.40	0.55	3.30	ベルト	6

第3章 文京遺跡 29次調査

第1節 調査の経緯

2005（平成17）年6月、濱商株式会社代表取締役 濱本道夫氏より松山市鉄砲町11番2地内における宅地開発にあたり、当該地の埋蔵文化財確認願が松山市教育委員会文化財課（以下、文化財課）に提出された。申請地は松山市が指定する埋蔵文化財包蔵地の『No.67 文京遺跡』内にあたり、周知の遺跡地帯として知られている。申請地西側には松山北高等学校遺跡（1～4次調査）があり、弥生時代末の竪穴住居や溝、自然流路が確認されている。また、調査地北側には松山大学構内遺跡（1～6次調査）、申請地東方には文京遺跡があり、縄文時代から中世までの集落関連遺構や遺物が数多く確認されている。申請地は2005（平成17）年1月に愛媛県教育委員会により試掘調査が実施され、遺構や包含層が確認されている。

これらのことから、宅地開発によって失われる遺跡に対して、記録保存のための発掘調査を実施することになった。調査は財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターが主体となり、文化財課の協力のもと、2006（平成18）年7月10日より開始した。

第2節 層位

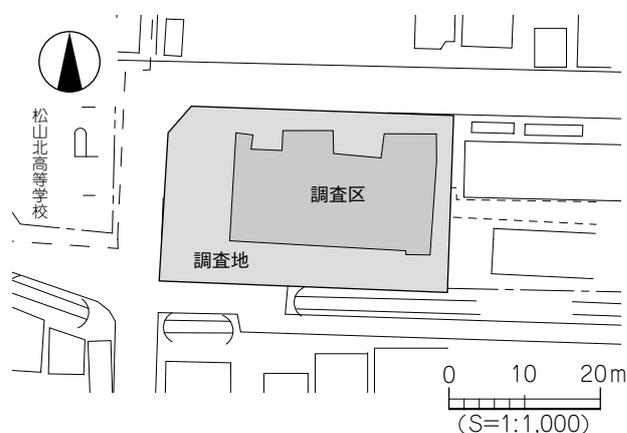
調査地は、調査以前は財務省四国財務局職員宿舎として利用されていた。そのため、調査地内には建物基礎をはじめ近現代の攪乱坑が広範囲に存在した。

調査地の基本層位は、以下の六層である。なお、第Ⅰ層から第Ⅲ層は近現代の造成及び農耕に伴う客土である（第14図）。

第Ⅰ層：近現代の造成土で、地表下70～120cmまで開発が行われている。

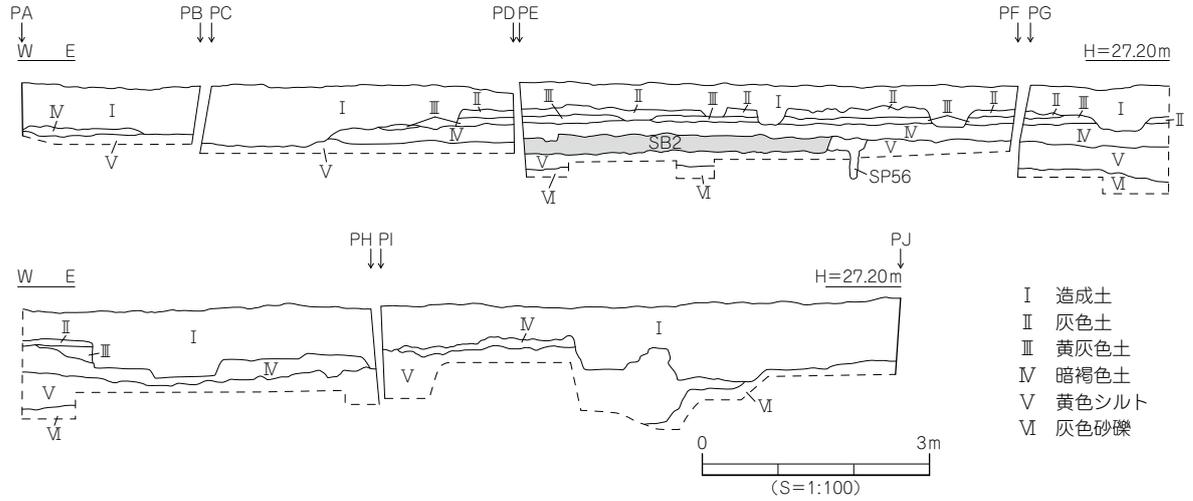
第Ⅱ層：水田耕作に伴う耕土（灰色土）で調査地北半部にみられ、層厚10～20cmを測る。

第Ⅲ層：水田耕作に伴う床土（黄灰色土）で調査地北半部にみられ、層厚10～15cmを測る。

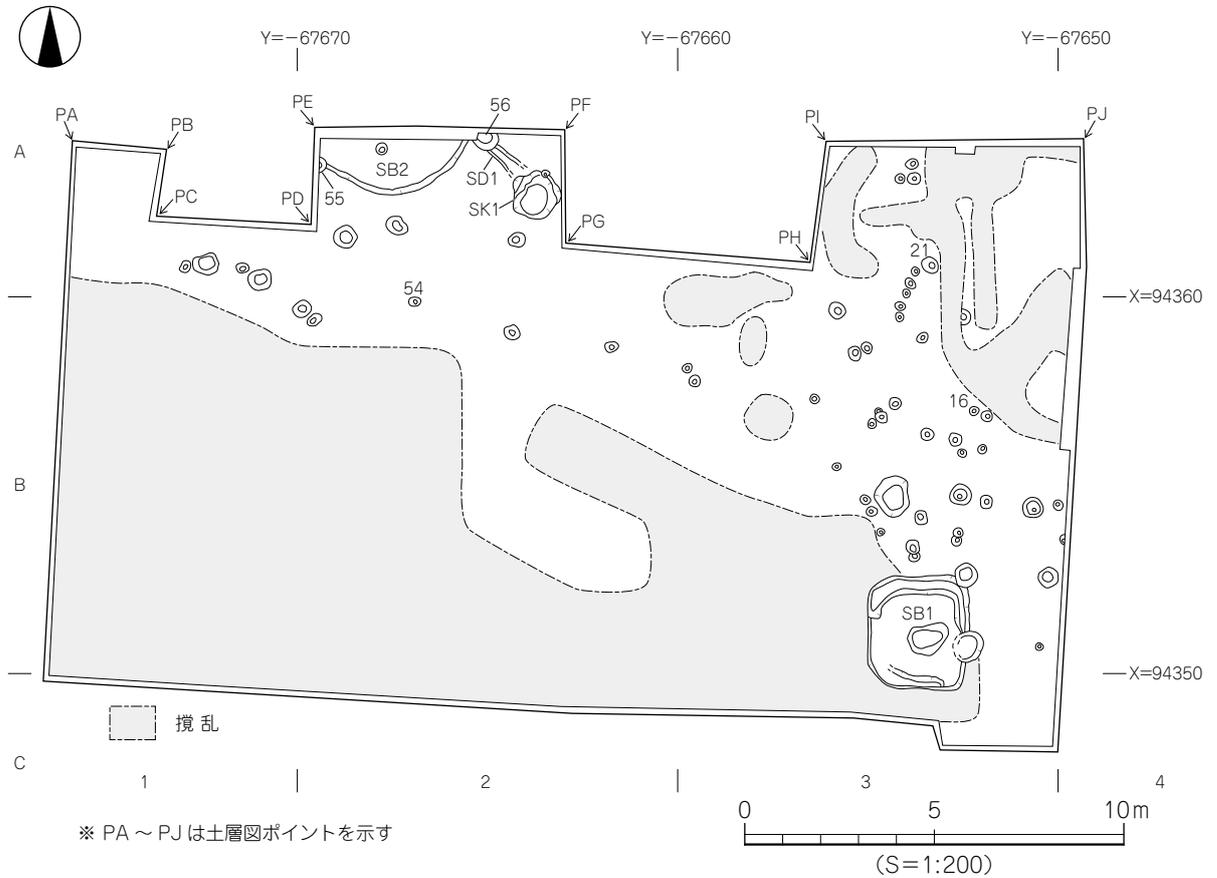


第13図 調査区測量図

層位



第14図 北壁土層図



第15図 遺構配置図

第Ⅳ層：暗褐色土で、調査地北半部にみられる。調査地北側から南側に向けて傾斜堆積をなし、層厚 20～30cmを測る。本層中からは、弥生土器片が少量出土した。なお、調査壁の土層観察により、本層上面より柱穴（埋土：灰褐色土・灰黄褐色土）数基が掘りこまれていることを確認した。

第Ⅴ層：黄色シルト層で、調査地北側が最も厚く、層厚 80cm以上を測る。なお、調査地中央部の堆積が最も薄く、層厚 5cm程度である。本層上面の標高を測量すると、北東部から南西部に向けて緩傾斜をなす（比高差 10cm）。

第Ⅵ層：径 3～5cm大の円礫を含む砂礫層で、旧石手川の氾濫に起因する河川氾濫堆積物と考えられる。調査地中央部や北東隅、南西部では第Ⅴ層上面にて本層が露出する箇所がみられた。

第 3 節 遺構と遺物

調査では、弥生時代の竪穴建物 2 棟、溝 1 条、土坑 1 基のほか 60 基の柱穴を検出した。また、遺構内や第Ⅳ層、及び攪乱坑内からは、弥生土器や土師器、須恵器のほか陶磁器や石器が出土している。

(1) 竪穴建物

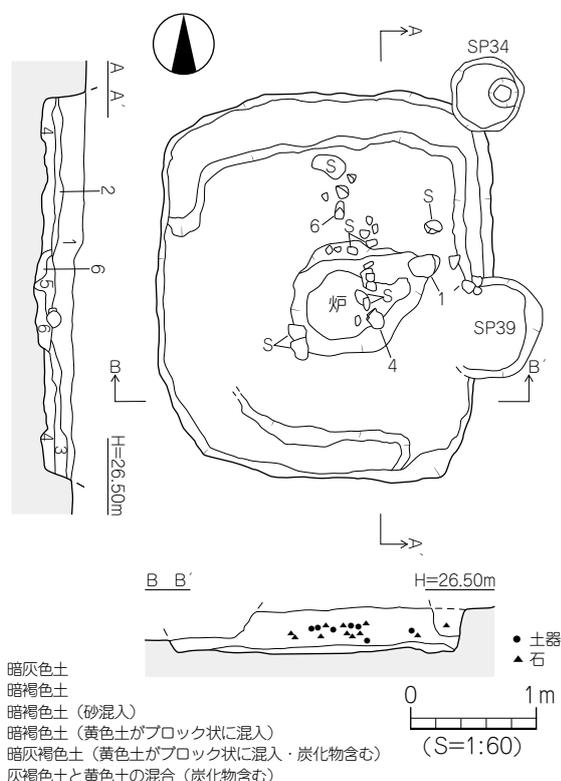
SB1（第 16・17 図、図版 7～9）

調査区南東部 B・C3 区で検出した建物址で、建物西側は攪乱坑に削平され、東側は SP34（埋土：灰褐色土）と SP39（埋土：灰黄色土）に切られている。平面形態は隅丸方形を呈し、規模は長さ 3.10 m、幅 2.56 m、壁高は 38cmを測る。建物埋土は四種類に分層され、1 層暗灰色土、2 層暗褐色土、3 層暗褐色土（砂混入）、4 層暗褐色土（黄色土がブロック状に混入）である。なお、4 層は検出状況から貼床土と考えられる。内部施設は、炉址と溝を検出した。炉址の平面形態は不整楕円形を呈し、規模は長径 1.14 m、短径 0.84 m、深さ 10cmを測り、埋土は暗灰褐色土や灰褐色土と黄色土の混合で炭化物が少量混入する。炉址は 4 層上面から掘削されていることから、建物の使用中に床面修築を行い、炉を作り替えたものと考えられる。なお、炉周辺にて炭化物層（80×110cm、厚さ 2～3mm）を検出した。

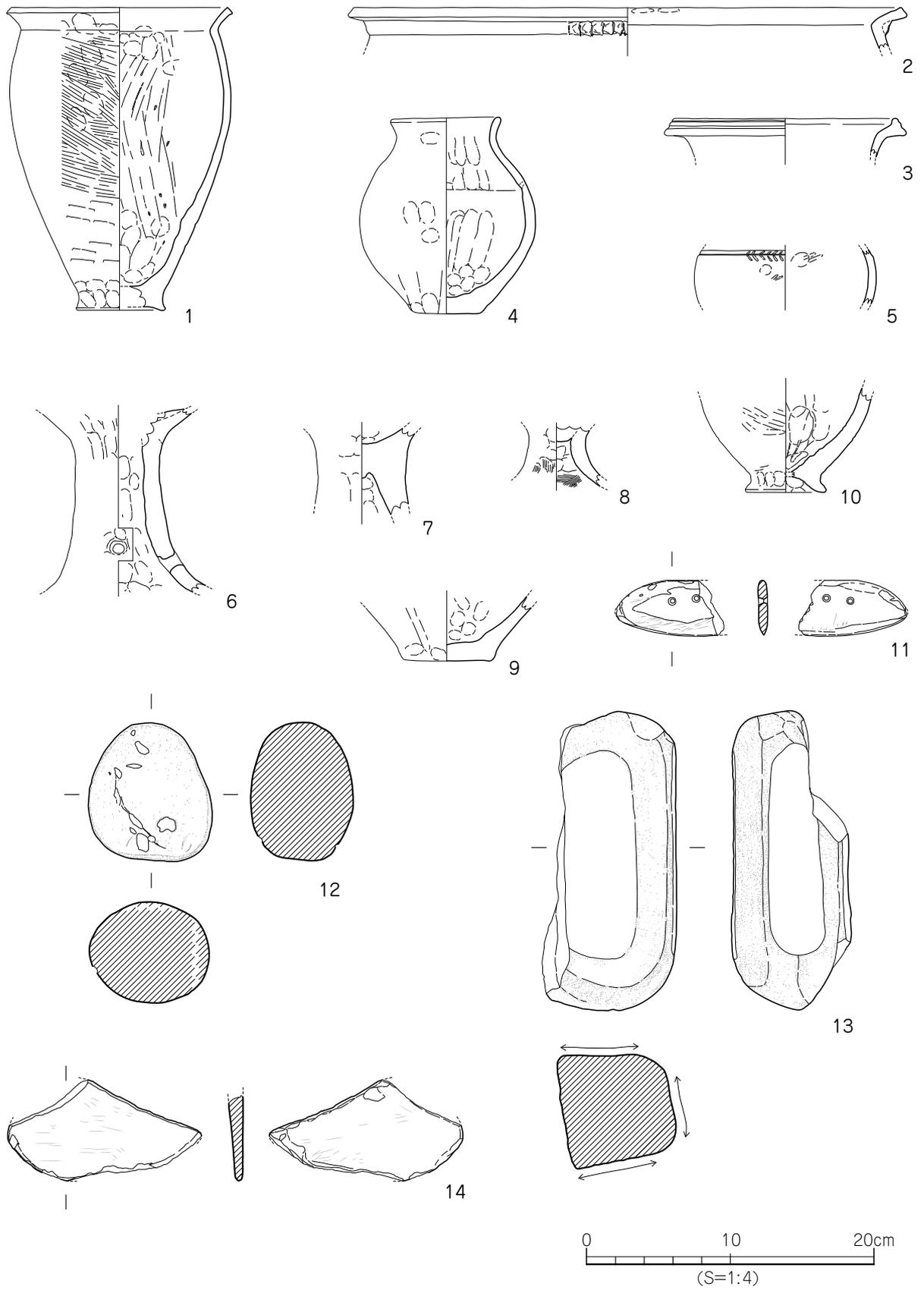
このほか、4 層除去後の床面にて建物北側と南側で溝状遺構を検出した。規模は幅 30～42cm、深さ 6～8cmを測り、埋土は建物 4 層と同様である。

遺物は建物中央部から北東部に集中しており、炉址を中心に甕形土器（1）や高坏形土器（6）、小型壺（4）、砥石（13）などが 1 層や 2 層中より出土した（表 16・17）。

時期：出土遺物の特徴より、SB1 の廃棄・埋没時期は弥生時代後期前葉とする。



第 16 図 SB1 測量図



第 17 図 SB 1 出土遺物実測図

SB 2 (第 18 図、図版 8)

調査区中央部北寄り A2 区で検出した建物址で、建物北側及び西側は調査区外に続き、西側は SP55 (埋土：灰黄色土) に切られている。第 V 層上面での検出であるが、調査壁の土層観察により本来は第 IV 層上面から掘削されていることを確認した。平面形態は円形を呈するものと考えられ、規模は東西検出長 4.00 m、南北検出長 1.66 m、壁高は検出面下 10cm を測る。壁体沿いに周壁溝を検出したことから、建物址と判断した。建物埋土は二種類あり、1 層暗褐色土、2 層暗褐色土 (黄色土がブロック状に混入) である。なお、検出状況から 2 層は床面修築のための貼床土と考えられる。周壁溝は建物埋土の 2 層上面にて検出した。ほぼ全周し、規模は幅 8 ~ 12cm、深さ 8 ~ 10cm を測り、埋土は暗褐色土である。このほか、建物中央部付近にて柱穴 1 基を検出した (SP ①)。平面形態は円形を呈し、規模は径 30cm、深さ 30cm を測り、埋土は粘性の強い暗褐色土である。柱穴内からは柱痕を検出したことから、建物の主柱穴の可能性がある。遺物は 1 層中より、弥生土器が少量出土した (表 18)。

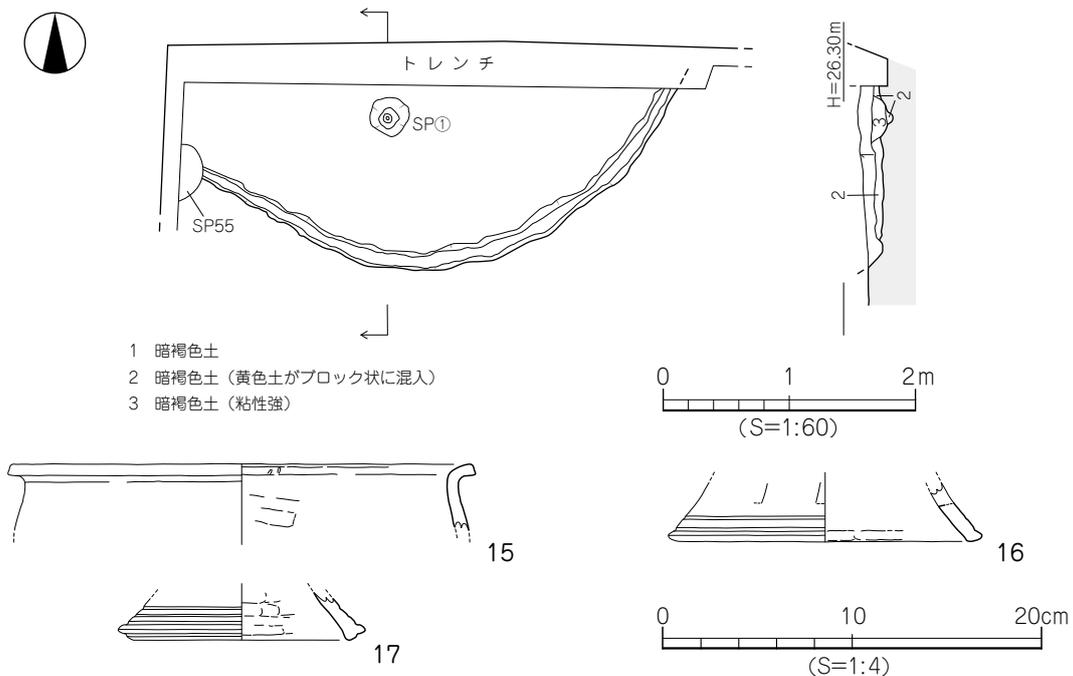
時期：出土遺物の特徴より、SB2 の廃棄・埋没時期は弥生時代中期後葉とする。

(2) 溝

SD 1 (第 15 図)

調査区北壁中央部 A2 区で検出した短い溝で、溝北側は SP56 (埋土：灰褐色土) に切られている。規模は検出長 1.00 m、幅 0.22 m、深さ 4cm を測る。断面形態は浅いレンズ状を呈し、埋土は暗褐色土単層である。溝内からは、遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、遺構埋土や検出状況から概ね弥生時代中期から後期の遺構とする。



第 18 図 SB 2 測量図・出土遺物実測図

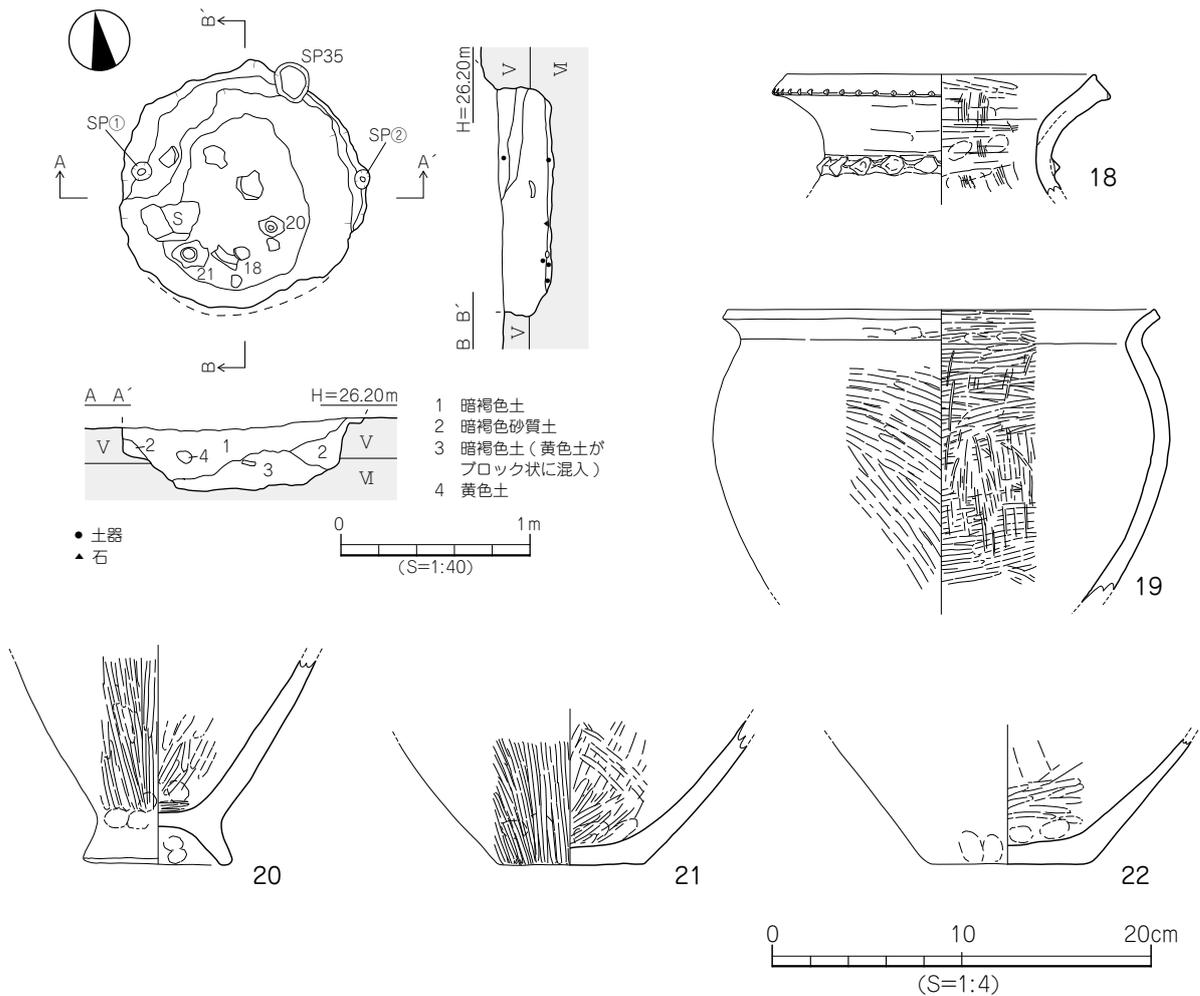
(3) 土 坑

SK 1 (第 19 図、図版 8・9)

調査区中央部東寄り A2 区で検出した土坑で、北側は SP35 (埋土：灰褐色土) に切られている。平面形態は円形を呈し、規模は径 1.26 ~ 1.32 m、深さ 38cm を測る。断面形態は袋状を呈し、埋土は三種類あり、1 層暗褐色土、2 層暗褐色砂質土、3 層暗褐色土 (黄色土がブロック状に混入) である。堆積状況をみると、3 層上部が盛り上がり、人為的に埋め戻されたものと推測される。なお、土坑壁面中位付近までは第 V 層、壁面下位から基底面は第 VI 層に及ぶ。土坑北東部及び西側にはテラス状の平坦部があり、この部分に径 10cm、深さ 5cm 程度の小ピット 2 基 (SP ①・②) を検出した。ピット埋土は、土坑埋土 1 層と同様である。

遺物は 1 層中より甕形土器の底部 (20) や壺形土器の口縁部 (18)、底部 (22) などが出土した。また、1 層下位より径 30cm、厚さ 10cm 大の円礫が 1 点出土した (表 19)。

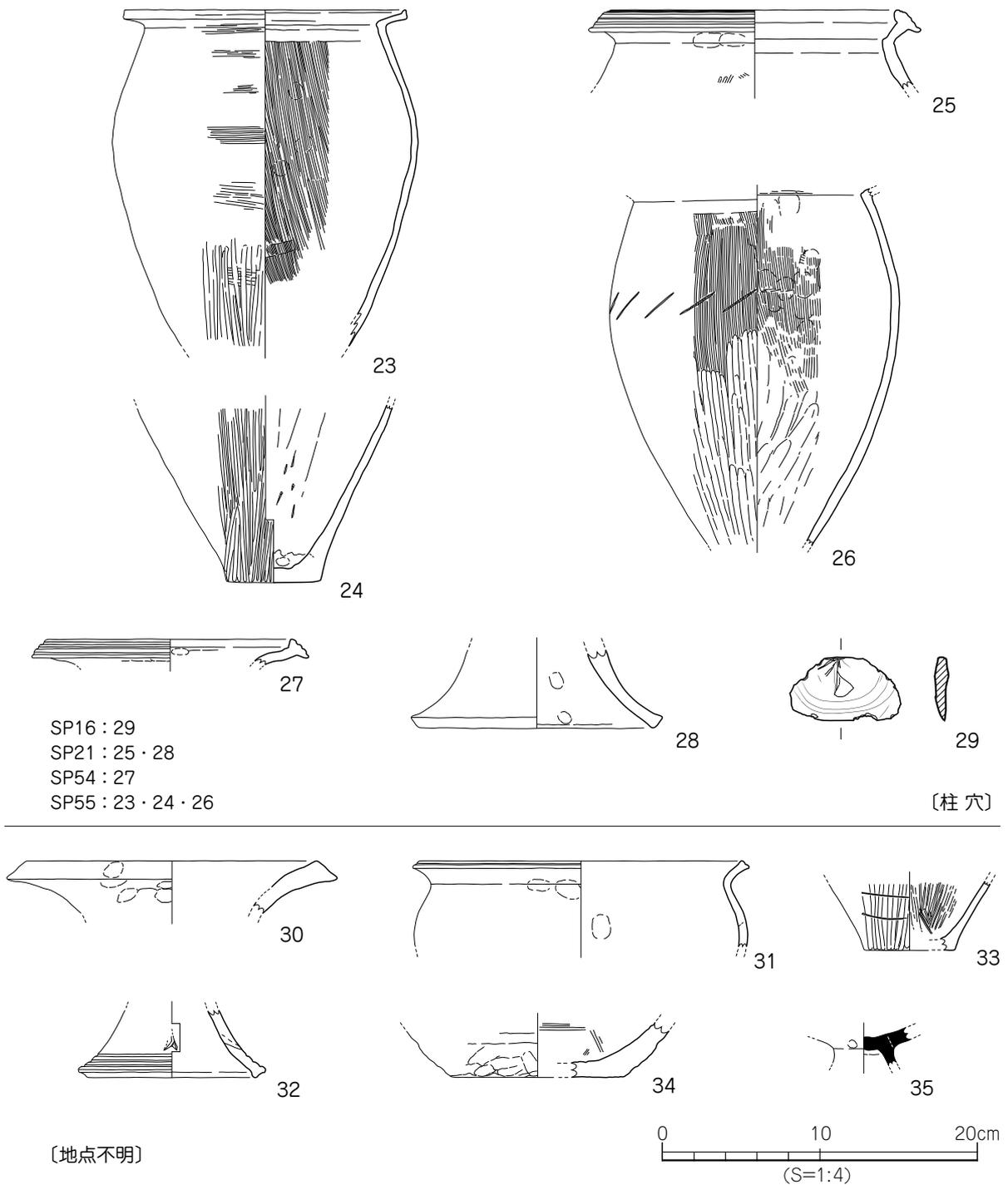
時 期：出土遺物の特徴より、SK1 は弥生時代中期後葉とする。



第 19 図 SK 1 測量図・出土遺物実測図

(4) 柱 穴 (第 20 図、図版 9)

調査では、60 基の柱穴を検出した。柱穴埋土は五種類あり、灰褐色土を埋土とする柱穴 28 基、灰褐色土に黄色土がブロック状に混入する柱穴 11 基、暗褐色土を埋土とする柱穴 14 基、暗褐色土に黄色土がブロック状に混入する柱穴 2 基、灰黄色土を埋土とする柱穴 5 基である。柱穴内からは弥生土器 (中期後葉～末)、土師器 (古墳時代～古代)、須恵器 (古墳時代) が出土した (表 15・20・21)。



第 20 図 柱穴・地点不明出土遺物実測図

(5) 地点不明出土遺物 (第20図、図版9)

調査では第IV層中や先行トレンチ、及び攪乱坑内より遺物が出土した。なお、トレンチや攪乱坑内からの出土品は層位や地点などが明確でないため、ここでは「地点不明出土遺物」として実測図を掲載している (表22)。

第4節 小 結

本調査では、弥生時代から中世までの遺構や遺物を確認した。検出した遺構は、弥生時代中期や後期に時期比定されるものである。調査で検出した遺構は堅穴建物2棟、溝1条、土坑1基、柱穴60基である。堅穴建物の平面形態は円形 (SB2) と方形 (SB1) とがあり、時期は前者が中期後葉、後者が後期前葉である。このうち、SB1は長さ3.10m、幅2.56mを測る比較的小規模な遺構であるが、炉址や貼床が検出されたことから堅穴建物と判断した。また、SK1は弥生時代中期後葉の土坑で、断面形態が袋状を呈することや、完形に近い土器が出土したことなどから貯蔵穴の可能性が高い遺構である。調査地東方にある文京遺跡からも同時期の土坑が多数検出されており、弥生時代中期後葉期には調査地や近隣地域にも集落が営まれていたものと考えられる。しかしながら、調査地南側は攪乱坑に削平されているものの、黄色シルトの堆積や第VI層灰色砂礫の検出状況などから、安定した土壌が存在した可能性は低く、流路や河川が存在していたものと推測される。

今回の調査成果は調査地を含む道後城北地区における弥生集落の広がりを知るうえで貴重なものであり、古地形を復元するうえでも重要な資料である。

遺構一覧・遺物観察表 — 凡例 —

以下の表は、本調査地検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。記載内容は、以下のとおりである。

(1) 遺構一覧表

地区欄	グリッド名を記載。
規模欄	() : 検出値
埋土欄	複数の土層がある場合には、「暗灰色土 他」と記載。
出土遺物欄	土器名称を略記した。 例) 弥生→弥生土器、土師→土師器、須恵→須恵器

(2) 遺物観察表

法量欄	() : 復元推定値
調整欄	土器の各部位名称を略記した。 例) 口→口縁部、頸→頸部、胴→胴部、胴上→胴上半部、胴下→胴下半部、底→底部
胎土欄	胎土欄は混和剤を略記した。 例) 石→石英、長→長石、金→金ウンモ () 中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。 例) 石・長 (1~4) → 「1~4mm大の石英・長石を含む」である。
焼成欄	焼成欄の略記について ◎→良好

表 12 竪穴建物一覧

竪穴 (SB)	地区	平面形	規模 長さ×幅×深さ (m)	内部施設	埋土	出土遺物	時期	備考
1	B・C 3	隅丸方形	3.10 × 2.56 × 0.38	炉・溝・貼床	暗灰色土 他	弥生・石	弥生後期前葉	
2	A 2	円形	(4.00) × (1.66) × 0.10	周壁溝・貼床	暗褐色土 他	弥生	弥生中期後葉	

表 13 溝一覧

溝 (SD)	地区	断面形	方向	規模 長さ×幅×深さ (m)	埋土	出土遺物	時期	備考
1	A 2	レンズ状	北西-南東	(1.00) × 0.22 × 0.04	暗褐色土		弥生中～後期	

表 14 土坑一覧

土坑 (SK)	地区	平面形	断面形	規模 長径×短径×深さ (m)	埋土	出土遺物	時期	備考
1	A 2	円形	袋状	1.32 × 1.26 × 0.38	暗褐色土 他	弥生・石	弥生中期後葉	

表 15 柱穴一覧

(1)

柱穴 (SP)	地区	平面形	規模 長径×短径×深さ (m)	埋土	出土遺物	備考
1	B 3・4	円形	0.26 × 0.25 × 0.24	灰褐色土		
2	B 3	円形	0.52 × 0.51 × 0.28	暗褐色土 (黄色土混入)		柱痕
3	B 3	円形	0.30 × 0.29 × 0.08	灰褐色土		
4	B 3	円形	0.55 × 0.54 × 0.29	暗褐色土 (黄色土混入)		柱痕
5	B 3	円形	0.26 × 0.25 × 0.21	灰褐色土 (黄色土混入)		
6	B 3	円形	0.27 × 0.25 × 0.26	灰褐色土		
7	B 3	円形	0.16 × 0.16 × 0.10	灰褐色土		
8	B 3	円形	0.22 × 0.22 × 0.17	灰褐色土 (黄色土混入)		
9	B 4	(円形)	0.21 × (0.17) × 0.15	灰黄色土		
10	B 3	円形	0.50 × 0.48 × 0.24	灰褐色土 (黄色土混入)		
11	B 3	円形	0.18 × 0.18 × 0.20	灰褐色土		
12	B 3	円形	0.31 × 0.30 × 0.12	灰褐色土 (黄色土混入)		
13	B 3	円形	0.25 × 0.25 × 0.37	灰褐色土		
14	B 3	円形	0.31 × 0.30 × 0.20	灰褐色土		
15	B 3	円形	0.32 × 0.32 × 0.21	灰褐色土 (黄色土混入)		
16	B 3	円形	0.17 × 0.17 × 0.27	灰褐色土	弥生・石	
17	B 3	円形	0.20 × 0.20 × 0.20	灰褐色土		
18	A・B 3	円形	0.13 × 0.12 × 0.09	灰褐色土 (黄色土混入)		
19	A 3	円形	0.22 × 0.21 × 0.05	灰褐色土 (黄色土混入)		
20	A 3	円形	0.17 × 0.17 × 0.10	灰褐色土 (黄色土混入)		
21	A 3	楕円形	0.48 × 0.42 × 0.22	灰褐色土	弥生	
22	A 3	円形	0.22 × 0.22 × 0.33	灰褐色土		
23	A 3	円形	0.35 × 0.34 × 0.26	灰褐色土		
24	A 3	円形	0.19 × 0.18 × 0.22	灰褐色土		
25	B 3	円形	0.17 × 0.17 × 0.05	灰黄色土		
26	B 3	円形	0.20 × 0.20 × 0.13	灰黄色土		

遺構一覽

柱穴一覽

(2)

柱穴 (S P)	地 区	平面形	規 模 長径×短径×深さ (m)	埋 土	出土遺物	備 考
27	B 3	橢円形	0.36 × 0.30 × 0.23	灰褐色土 (黄色土混入)		
28	B 3	橢円形	0.30 × 0.24 × 0.15	灰褐色土 (黄色土混入)		
29	B 3	円形	0.27 × 0.27 × 0.06	暗褐色土		
30	B 3	円形	0.24 × (0.19) × 0.10	暗褐色土		
31	B 3	円形	0.28 × 0.28 × 0.33	灰褐色土		
32	B 3	円形	0.24 × 0.23 × 0.11	灰褐色土 (黄色土混入)		
33	B 3	円形	0.22 × 0.22 × 0.10	灰褐色土		
34	B 3	円形	0.62 × 0.60 × 0.29	灰褐色土	土師・須恵	SB1 を切る
35	A 2	円形	0.17 × 0.16 × 0.10	灰褐色土		SK1 を切る
36	A 2	橢円形	0.40 × 0.33 × 0.20	暗褐色土		
37	A 2	橢円形	0.61 × 0.49 × 0.22	暗褐色土		
38	A 2	橢円形	0.58 × 0.57 × 0.26	暗褐色土		
39	B 3	(橢円形)	0.68 × (0.60) × 0.22	灰黄色土		SB1 を切る
40	A 1	橢円形	0.60 × 0.54 × 0.24	灰褐色土		
41	A 1	橢円形	0.57 × 0.50 × 0.22	灰褐色土		
42	A 2	橢円形	0.26 × 0.22 × 0.13	灰褐色土		
43	B 3	円形	0.20 × 0.20 × 0.10	暗褐色土		
44	A 1	橢円形	0.28 × 0.26 × 0.13	灰褐色土		
45	B 1・2	円形	0.45 × 0.44 × 0.22	暗褐色土		
46	B 2	円形	0.35 × 0.35 × 0.22	暗褐色土		
47	B 2	橢円形	0.30 × 0.25 × 0.10	暗褐色土		
48	B 3	円形	0.26 × 0.25 × 0.08	暗褐色土		
49	B 3	円形	0.26 × 0.26 × 0.09	暗褐色土		
50	B 2	橢円形	0.40 × 0.33 × 0.10	暗褐色土		
51	B 3	円形	0.20 × 0.20 × 0.06	灰褐色土		
52	B 3	円形	0.31 × 0.31 × 0.14	灰褐色土		
53	B 3	円形	0.26 × 0.25 × 0.10	灰褐色土		
54	B 2	橢円形	0.30 × 0.25 × 0.08	暗褐色土	弥生	
55	A 2	円形	0.30 × (0.16) × 0.14	灰黄色土	弥生	SB2 を切る
56	A 2	(橢円形)	0.55 × (0.39) × 0.26	灰褐色土		SD1 を切る
57	B 3	円形	0.30 × 0.29 × 0.12	灰褐色土		
58	B 3	円形	0.40 × 0.39 × 0.24	灰褐色土		
59	B 3	橢円形	0.33 × 0.26 × 0.11	灰褐色土		
60	B 3	不整橢円形	1.08 × 0.75 × 0.48	暗褐色土	弥生	

表 16 SB 1 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
1	甕	口径 (15.0) 底径 (6.0) 器高 21.2	「く」の字状口縁。底部やや上げ底。1/2の残存。	㊶ヨコナデ ㊷ハケ ㊸板ナデ	㊶ヨコナデ ㊷ヘラケズリ ㊸ナデ	暗褐色 黒色	石・長 (1~3) ◎	黒斑	8
2	甕	口径 (38.0) 残高 2.8	大型品。口縁下に押圧凸帯文1条あり。	㊶ヨコナデ ㊷ナデ	ヨコナデ	褐色 褐色	石・長 (1~2) ◎	黒斑	
3	壺	口径 (15.4) 残高 2.7	広口壺。口縁端部は上方に肥厚し、口縁端面に凹線文2条を施す。	ナデ	ナデ	橙色 褐色	石・長 (1~2) 金 ◎		
4	壺	口径 7.3 底径 4.7 器高 13.7	太頸壺。完存品。口縁部は短く外反し、底部は平底。	マメツ	ナデ	黄橙色 橙褐色	石・長 (1~2) ◎	黒斑	8
5	壺	残高 3.8	小片。胴上位に有軸羽状文あり。	マメツ	マメツ	褐色 褐色	石・長 (1~3) ◎		
6	高坏	残高 12.8	2/3の残存。円孔 (φ8mm) 4ヶあり。	マメツ	ナデ (指頭痕)	茶褐色 褐色	石・長 (1~3) ◎	黒斑	
7	高坏	残高 6.0	1/2の残存。	マメツ	ナデ	褐色 褐色	石・長 (1~3) ◎		
8	高坏	残高 4.0	脚柱部完存。坏脚部の接合は充填技法による。	ハケ (7本/cm)	ハケ (ナデ)	茶褐色 茶褐色	石・長 (1~3) ◎		
9	壺	底径 6.0 残高 4.5	底部3/4の残存。わずかに上げ底。	ヘラミガキ	ナデ	褐色 黒色	石・長 (1~3) ◎	黒斑	
10	鉢	底径 (5.4) 残高 7.3	くびれをもつ上げ底。	マメツ (ミガキ)	ナデ	褐色 乳褐色	石・長 (1~3) 金 ◎	黒斑	

表 17 SB 1 出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
11	石庖丁	2/3	緑色片岩	7.45	3.90	0.60	32.22	穿孔 (φ0.5cm) 二ヶ所	8
12	敲石	完存	砂岩	9.70	8.60	7.10	918.92		9
13	砥石	一部欠損	砂岩	20.80	9.20	7.19	2,210.00	砥面 : 3面	9
14	スクレイパー	一部欠損	サヌカイト	13.40	7.00	1.02	111.44		9

表 18 SB 2 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
15	甕	口径 (24.0) 残高 3.5	折曲口縁。口縁端面はナデ凹む。小片。	ナデ	ナデ	灰褐色 褐色	石・長 (1~2) 金 ◎	黒斑	
16	高坏	底径 (15.3) 残高 3.1	脚裾部に凹線文2条と透孔2ヶ所あり。小片。	マメツ	マメツ	灰褐色 褐色	石・長 (1~2) ◎	黒斑	
17	高坏	底径 (11.2) 残高 2.5	脚端部は上下方に肥厚し、脚端面に凹線文1条、脚裾部に凹線文3条を施す。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	茶褐色 茶褐色	石・長 (1~2) ◎		

表 19 SK 1 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
18	壺	口径 16.1 残高 6.4	広口壺。口縁下端面に刻目。頸部に押圧凸帯文1条あり。3/4の残存。	ヨコナデ	㊶ヘラミガキ ㊷ハケ	茶褐色 茶褐色	石・長 (1~3) 金 ◎	赤色酸化土	9
19	鉢	口径 (22.5) 残高 15.5	外反口縁。口縁端面はナデ凹む。1/4の残存。	㊶ヨコナデ ㊷ヘラミガキ	ヘラミガキ	茶褐色 橙褐色	石・長 (1~2) 金 ◎	赤色酸化土 黒斑	
20	甕	底径 7.8 残高 10.9	底部完形品。くびれをもつ上げ底。	㊸ナデ→ヘラミガキ ㊹ナデ	㊸ヘラミガキ ㊹ナデ	橙色 暗褐色	石・長 (1~5) 金 ◎	赤色酸化土	9
21	壺	底径 8.1 残高 6.6	底部完形品。平底。	マメツ	ヘラミガキ	褐色 黒色	石・長 (1~3) ◎	黒斑	
22	鉢	底径 7.7 残高 7.7	底部完形品。平底。	ヘラミガキ	ヘラミガキ →ナデ	茶褐色 暗褐色	石・長 (1~3) 金 ◎	赤色酸化土 黒斑	

遺物観察表

表 20 柱穴出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
23	甕	口径 (17.8) 残高 21.4	折曲口縁。口縁端部は上方に肥厚。 1/6の残存。	㊶ヨコナデ ㊷上ハケ ㊸下ハラミガキ	㊶ヨコナデ ㊷上ハケ(7~8本/cm)	橙色 橙色	石・長 (1~2) 金 ◎	赤色酸化土 煤附着 SP55	9
24	甕	底径 (6.0) 残高 11.3	平底。23と同一個体。底部完形品。	ハラミガキ	㊷上ハラケズリ ㊸底ナデ	橙色 橙色	石・長 (1~2) 金 ◎	赤色酸化土 黒斑 SP55	
25	甕	口径 (17.9) 残高 5.0	口縁端部は上下方に拡張し、口縁端 面に凹線文6条を施す。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	褐色 褐色	石・長 (1~3) 金 ◎	SP21	
26	甕	残高 22.2	胴中位に刻目あり。1/2の残存。	㊷上ハケ(7本/cm) ㊸上ハケ→ ハラミガキ	㊷上ハケ(7本/cm) ㊸下ハケ→ナデ	褐色 褐色	石・長 (1~3) 金 ◎	赤色酸化土 煤附着 SP55	9
27	壺	口径 (15.4) 残高 1.6	広口壺。口縁端部は上下方に拡張し、 口縁端面に凹線文3条を施す。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	褐色 褐色	石・長 (1) 金 ◎	SP54	
28	高坏	底径 (14.6) 残高 4.9	脚端部は「コ」字状に仕上げる。 小片。	ナデ	ナデ	乳褐色 乳褐色	石・長 (1~2) 金 ◎	赤色酸化土 SP21	

表 21 柱穴出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
29	剥片	一部欠損	サマカイト	7.00	4.00	0.85	23.24	自然面あり。SP16	9

表 22 地点不明出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
30	壺	口径 (18.3) 残高 3.3	広口壺。口縁端部は「コ」字状に仕 上げる。小片。	ヨコナデ	マメツ	茶褐色 褐色	石・長 (1~5) ◎	トレンチ	
31	鉢	口径 (20.3) 残高 5.4	折曲口縁。口縁端面に凹線文1条あ り。小片。	マメツ	マメツ	褐色 褐色	石・長 (1~4) ◎	黒斑 攪乱	
32	高坏	底径 (10.8) 残高 5.3	脚裾部に凹線文3条、脚柱部に矢羽 根状透かしを看取する。1/4の残存。	マメツ	ヨコナデ	茶褐色 茶褐色	石・長 (1~2) 金 ◎	表採	9
33	甕	底径 (5.8) 残高 4.4	平底。1/4の残存。	ハラミガキ	ハラミガキ	褐色 褐色	石・長 (1~2) ◎	赤色酸化土 黒斑 攪乱	
34	播鉢	底径 (11.0) 残高 3.5	備前焼。内面に条線あり。小片。	㊷上ナデ ㊸上ハラケズリ	ナデ	灰色 灰色	密 ◎	攪乱	
35	高坏	残高 2.4	須恵器。坏脚部接合部の完形品。	ナデ	ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎	攪乱	

第4章 土居窪Ⅲ遺跡

第1節 調査の経緯

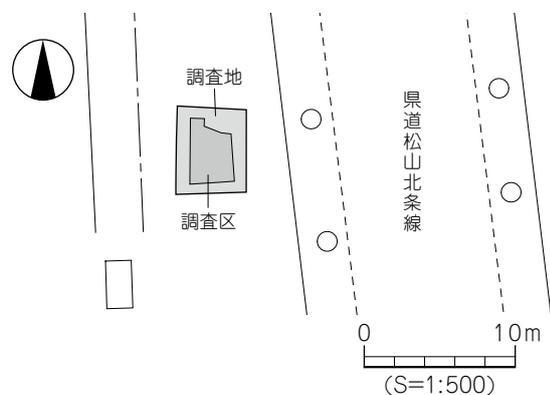
2001（平成13）年2月7日、菊池 厚氏より松山市道後緑台196-6地内における宅地開発にあたり埋蔵文化財の確認願が松山市教育委員会文化財課（以下、文化財課）に提出された。確認願が提出された申請地は、松山市が指定する埋蔵文化財包蔵地の『No.55・56・57 北代・緑台・土居窪遺物包含地』内に所在する。周辺では、申請地東側に隣接する県道道後祝谷線建設工事の際に実施した土居窪Ⅱ遺跡や祝谷畑中遺跡などから、弥生時代前期末から中期にいたる遺構や遺物が多数確認されている。このうち、祝谷畑中遺跡からは弥生時代中期中頃に廃絶された大溝や、土偶の頭部が出土した竪穴住居などが発見されている。

これらのことから、申請地内における埋蔵文化財の有無を確認するため、財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター（以下、埋文センター）は試掘調査を実施した。その結果、弥生時代中期の土器を含む遺物包含層を検出した。この結果を受け、申請者と文化財課との間で協議が行われ、開発によって失われる遺跡に対して記録保存のための発掘調査を実施することになった。発掘調査は埋文センターが主体となり、2001（平成13）年9月3日より開始した。

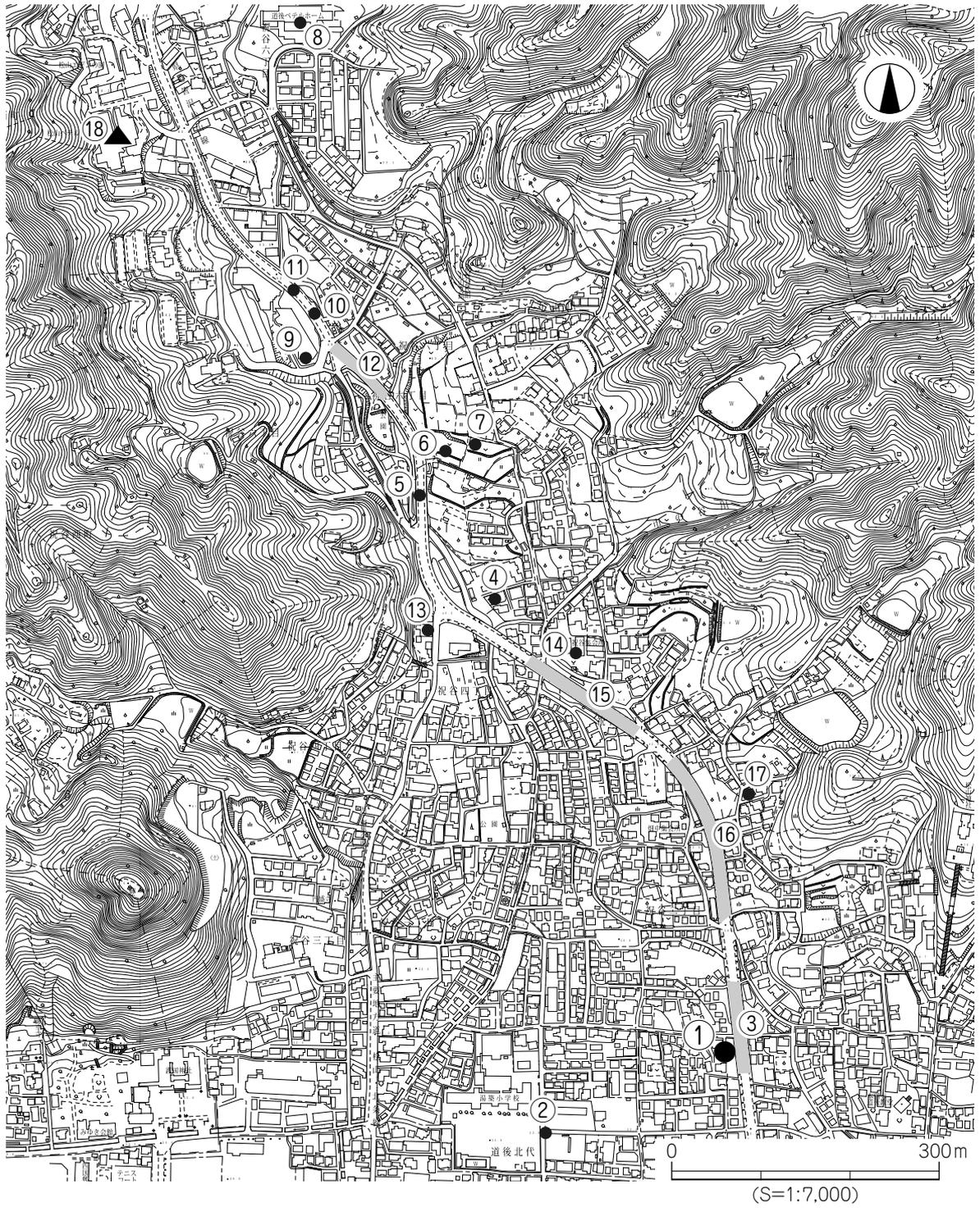
第2節 層位

調査地の基本層位は、以下の9層である。なお、第3層及び第4層は近現代の水田層、第6層から第8層は弥生時代の遺物を含む包含層である（第23図、図版10）。遺構は第7層及び第8層上面にて、溝2条を検出した。

- 第1層：造成土①（真砂土）
- 第2層：造成土②（暗緑灰色土・真砂土）
- 第3層：灰色粘質土（褐色土と砂が混入）
- 第4層：青緑灰色粘土
- 第5層：暗灰色粘土（暗褐色土と粗砂が混入）
- 第6層：黒灰色粘土（暗褐色土と粗砂が混入）
- 第7層：暗灰色粘質土
（褐色土や黒灰色土、粗砂が混入）
- 第8層：暗灰色粘土
- 第9層：暗青灰色細砂



第21図 調査区測量図



- | | | |
|-----------------|-----------------|---------------|
| ① 土居窪Ⅲ遺跡 | ⑦ 祝谷大地ヶ田遺跡 (4次) | ⑬ 祝谷西山遺跡 |
| ② 土居窪遺跡 | ⑧ 祝谷アイリ遺跡 | ⑭ 祝谷本村遺跡 (1次) |
| ③ 土居窪Ⅱ遺跡 | ⑨ 祝谷六丁場遺跡 (1次) | ⑮ 祝谷本村遺跡 (2次) |
| ④ 祝谷大地ヶ田遺跡 (1次) | ⑩ 祝谷六丁場遺跡 (2次) | ⑯ 祝谷畑中遺跡 (1次) |
| ⑤ 祝谷大地ヶ田遺跡 (2次) | ⑪ 祝谷丸山遺跡 (1次) | ⑰ 祝谷畑中遺跡 (2次) |
| ⑥ 祝谷大地ヶ田遺跡 (3次) | ⑫ 祝谷丸山遺跡 (2次) | ⑱ 祝谷1号墳～5号墳 |

第22図 周辺遺跡分布図

第3節 遺構と遺物

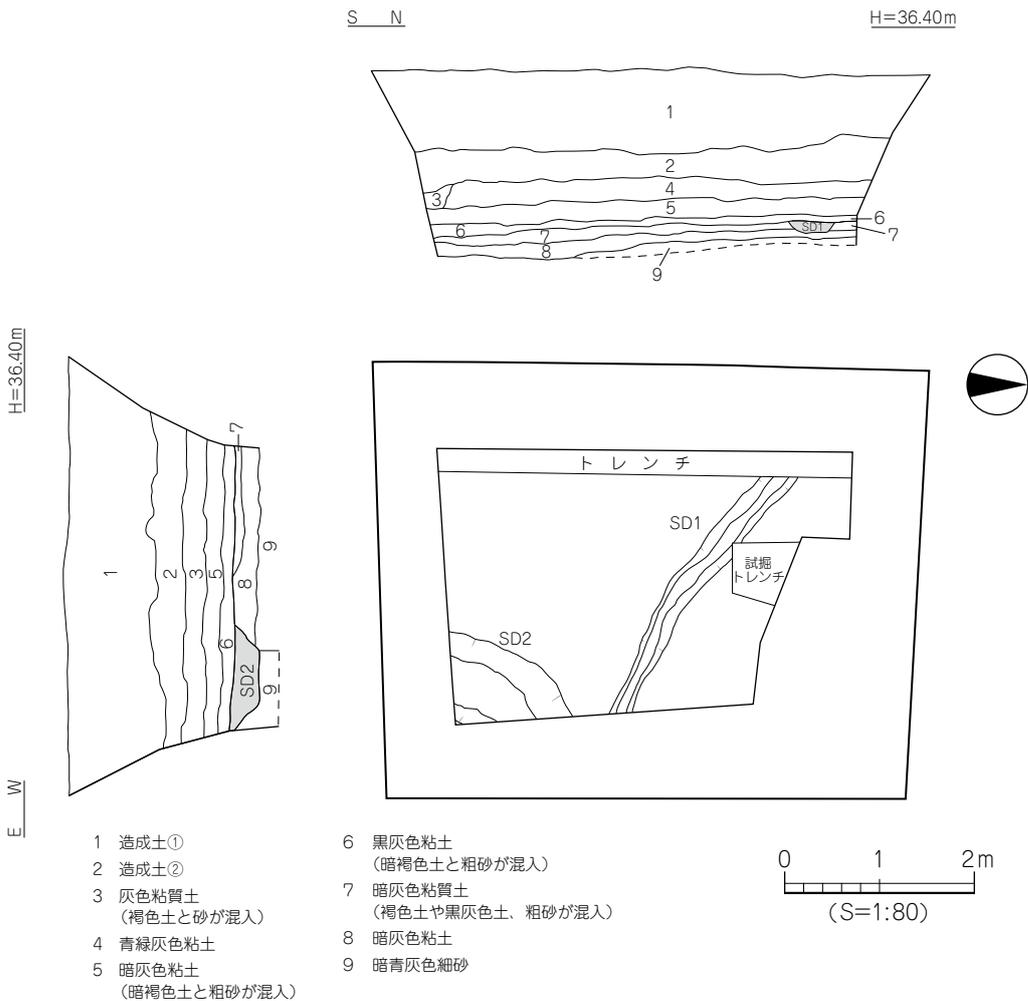
本調査では溝2条を検出したほか、第7層中からは弥生時代前期や中期に時期比定される土器や石器が出土した。なお、調査地は地下水位が高く、そのため出土した土器の遺存状況は決して良好ではない。

(1) 溝

SD1 (第23・24図、図版10・11)

調査区北側で検出した溝で、わずかに弧を描きながら南東から北西方向にのびている。第7層上面での検出であり、溝上面は第6層が覆う。規模は検出長3.36m、幅0.16～0.34m、深さ3～14cmを測る。断面形態はレンズ状を呈し、埋土は黒色粘土に暗褐色土や粗砂が混入するものである。溝基底面は平坦で、溝内からは高坏形土器(1)の坏部片が出土した(表24)。

時期：出土遺物の特徴より、SD1は弥生時代後期前葉の溝とする。



第23図 遺構配置図・土層図

SD2 (第23・24図、図版10・11)

調査区南東隅で検出した溝で、北東から南西に向けて湾曲している。第8層上面での検出であり、第6層が覆う。規模は検出長1.60m、幅0.80m、深さ17～30cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土はSD1と同様、黒色粘土に暗褐色土や粗砂が混入するものである。遺物は、甕形土器や壺形土器の破片が出土した(表25)。

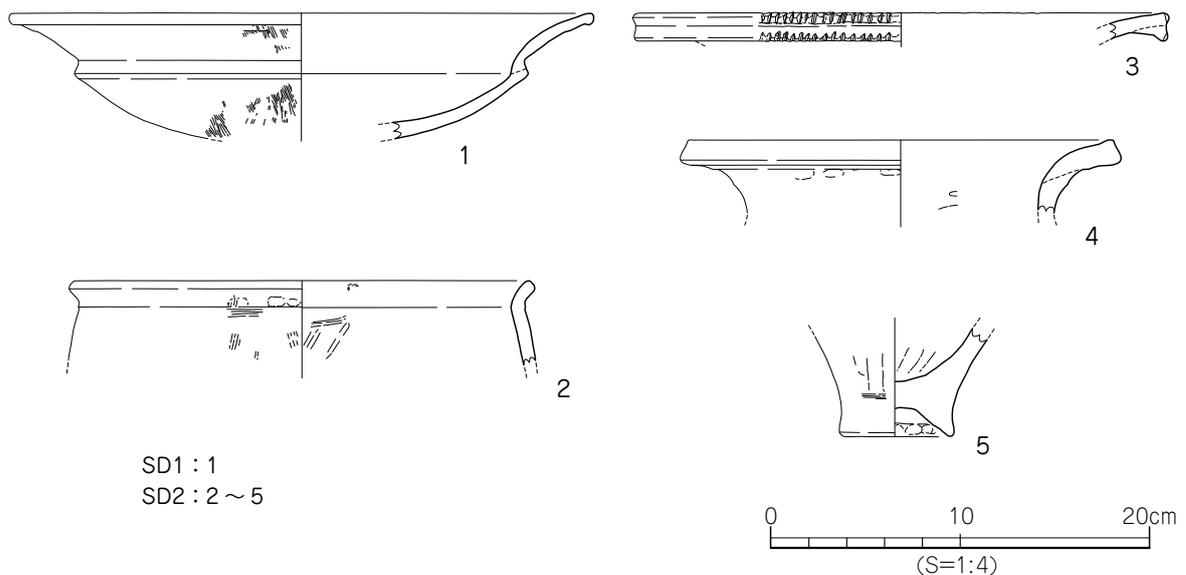
時 期：出土遺物の特徴より、SD2は弥生時代中期後葉の溝とする。

(2) 包含層出土遺物 (第25図、図版11)

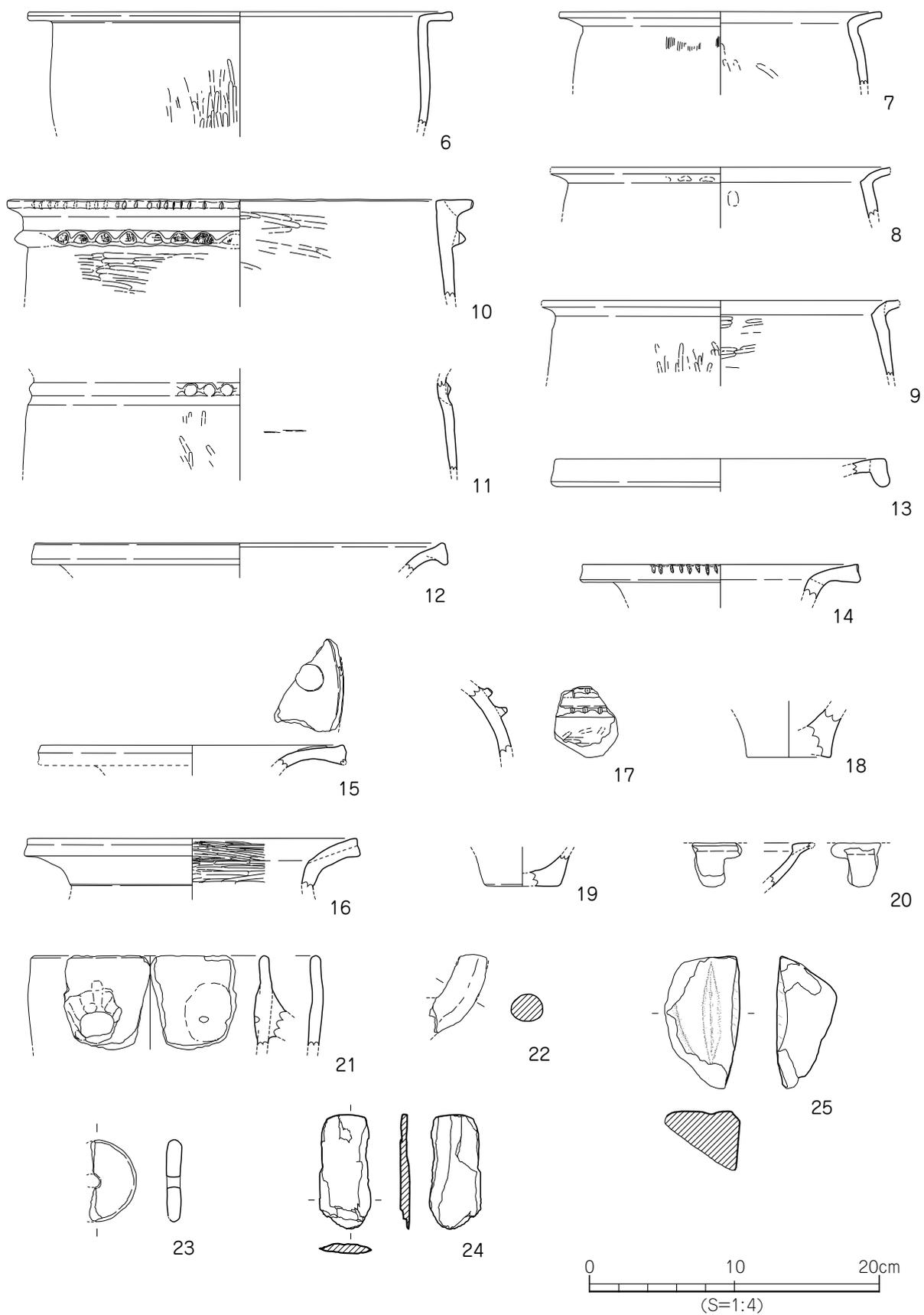
本調査では、第7層中より弥生時代前期や中期の土器(甕形土器・壺形土器・高坏形土器・ジョッキ形土器・紡錘車)のほか石器(加工斧・砥石)が出土した(表26・27)。

第4節 小 結

本調査では、弥生時代中期の遺物が混入する包含層(第7層)や、その包含層を掘りこんで掘削された溝2条を検出した。出土遺物より2条の溝は弥生時代中期以降、後期前葉までに存在した遺構であり、短期間で機能を失い埋没したものと推測される。調査地周辺では、同時期の遺跡が数多く発見されており、今後はそれらの遺跡を視野に含めたうえで、遺物や遺構の検討及び土層の検証等が必要となる。とりわけ、公益財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センターが平成11年度に実施した土居窪Ⅱ遺跡からも弥生時代中期の土器が多数出土しており、調査地周辺地域には該期の集落が広範囲に展開しているものといえよう。



第24図 SD1・SD2出土遺物実測図



第25図 第7層出土遺物実測図

遺構一覧・遺物観察表 — 凡例 —

以下の表は、本調査地検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。記載内容は、以下のとおりである。

(1) 遺構一覧表

出土遺物欄 土器名称を略記した。
例) 弥生→弥生土器

(2) 遺物観察表

法量欄 () : 復元推定値

調整欄 土器の各部位名称を略記した。
例) 口→口縁部、胴→胴部、底→底部

胎土欄 胎土欄は混和剤を略記した。
例) 石→石英、長→長石、金→金ウンモ
() 中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

焼成欄 焼成欄の略記について
◎→良好、○→良

表 23 溝一覧

溝 (SD)	方向	断面形	規模 長さ×幅×深さ (m)	埋土	出土遺物	時期	備考
1	南東-北西	レンズ状	3.36 × 0.34 × 0.14	黒色粘土 (暗褐色土・粗砂混入)	弥生	弥生後期前葉	
2	北東-南西	皿状	1.60 × 0.80 × 0.30	黒色粘土 (暗褐色土・粗砂混入)	弥生	弥生中期後葉	

表 24 SD 1 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
1	高坏	口径 (30.6) 残高 6.6	坏部中位に断面三角形の稜をもち、口縁部は外反する。	ハケ(5本/cm) →ナデ	マメツ	橙色 橙色	石・長(1~4) ◎		11

表 25 SD 2 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
2	甕	口径 (24.0) 残高 4.5	外反口縁。口縁端部は「コ」字状をなす。小片。	◎ヨコナデ ㊦ハケ	ハケ→ミガキ	褐色 黄褐色	石(3) ◎		
3	壺	口径 (27.8) 残高 1.5	広口壺。口縁端部は下方に肥厚し、上端面と下端面に刻目を施す。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	褐色 褐色	石・長(1~2) ◎		11
4	壺	口径 (22.2) 残高 3.9	広口壺。口縁端部は「コ」字状をなす。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ (ミガキ)	褐色 褐色	石・長(1) ◎		
5	甕	底径 5.6 残高 5.7	小さなくびれをもつ上げ底。	㊦ハケ ㊧ヨコナデ	ナデ	褐色 黒色	石・長(1~2) ◎		11

表 26 第7層出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
6	甕	口径 (29.0) 残高 8.0	折曲口縁。口縁端面はナデ凹む。	◎ヨコナデ ㊦ナデ→ヘラミガキ	マメツ	茶褐色 茶褐色	石・長(1~3) 金 ◎		11

土居窪Ⅲ遺跡

第7層出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
7	甕	口径 (22.0) 残高 5.1	折曲口縁。口縁端部は「コ」字状をなす。	㊦ヨコナデ ㊧ハケ	㊦ヨコナデ ㊧ミガキ	茶褐色 茶褐色	石・長 (1~4) ◎		
8	甕	口径 (23.2) 残高 3.6	折曲口縁。口縁端部は欠損。小片。	㊦ヨコナデ ㊧ミガキ	㊦ヨコナデ ㊧ミガキ	黒褐色 褐色	石・長 (1~2) ◎		
9	甕	口径 (24.6) 残高 5.3	貼付口縁。口縁端部は欠損。小片。	㊦ヨコナデ ㊧ヘラミガキ	㊦ヨコナデ ㊧ヘラミガキ	黄褐色 褐色	石・長 (1~3) ◎		
10	甕	口径 (31.0) 残高 6.8	貼付口縁。胴部に押圧凸帯を貼付け、凸帯上に布目痕あり。口縁端面に刻目を施す。	㊦ヨコナデ ㊧ヘラミガキ	㊦ヨコナデ ㊧ヘラミガキ	褐色 褐色	石・長 (1~4) ◎		11
11	甕	残高 6.5	貼付凸帯1条、凸帯上に押圧を加える。小片。	ヘラミガキ	ナデ	褐色 茶褐色	石 (2) ◎		
12	壺	口径 (28.0) 残高 1.9	広口壺。口縁端部は下方に肥厚する。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	褐色 黒色	石・長 (1~4) ◎		
13	壺	口径 (22.6) 残高 2.0	広口壺。口縁端部は下方に垂下する。小片。	マメツ	マメツ	褐色 褐色	石・長 (1~2) ◎		
14	壺	口径 (19.0) 残高 2.4	広口壺。口縁上端面に刻目を施す。小片。	マメツ	ヨコナデ	茶褐色 褐色	石・長 (1) ◎		黒斑
15	壺	口径 (20.8) 残高 1.6	広口壺。口縁部内面に円形浮文を貼付ける。	ヨコナデ	ヨコナデ	暗褐色 暗褐色	石・長 (1) 金 ◎		11
16	壺	口径 (22.6) 残高 3.6	広口壺。口頸部に段をもつ。1/3の残存。	ヨコナデ	ヘラミガキ	茶褐色 褐色	石・長 (1~3) 金 ◎		11
17	壺	残高 4.9	貼付凸帯2条。凸帯上に刻目あり。	ヘラミガキ	ナデ	褐色 褐色	石・長 (1) ◎		
18	甕	底径 (5.6) 残高 3.4	わずかに上げ底。1/5の残存。	ナデ	マメツ	灰褐色 褐色	石・長 (1) ◎		
19	甕	底径 (5.0) 残高 2.2	平底。	マメツ	ナデ	褐色 暗褐色	石・長 (1~3) ◎		
20	高坏	残高 3.0	口縁部は内方に肥厚する。	ナデ	マメツ	褐色 褐色	石・長 (1~2) ○		
21	ジョッキ	口径 (15.8) 残高 6.2	把手部は欠損。小片。	ナデ	マメツ	黄褐色 灰褐色	石・長 (1~2) ○		11
22	ジョッキ	残高 4.5	把手部。断面円形を呈する。	ナデ	—	褐色	石・長 (1~3) ◎		11
23	紡錘車	長さ 5.7 幅 (3.1) 厚さ 1.0	1/2の残存。	マメツ	—	茶褐色	石・長 (1~2) ◎		11

表 27 第7層出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
24	加工斧	一部欠損	サヌカイト	7.94	3.67	0.64	30.37	磨製、破損品	11
25	砥石	一部欠損	石英粗面岩	9.20	5.15	4.00	162.98	砥面：2面	11

第5章 道後北代遺跡

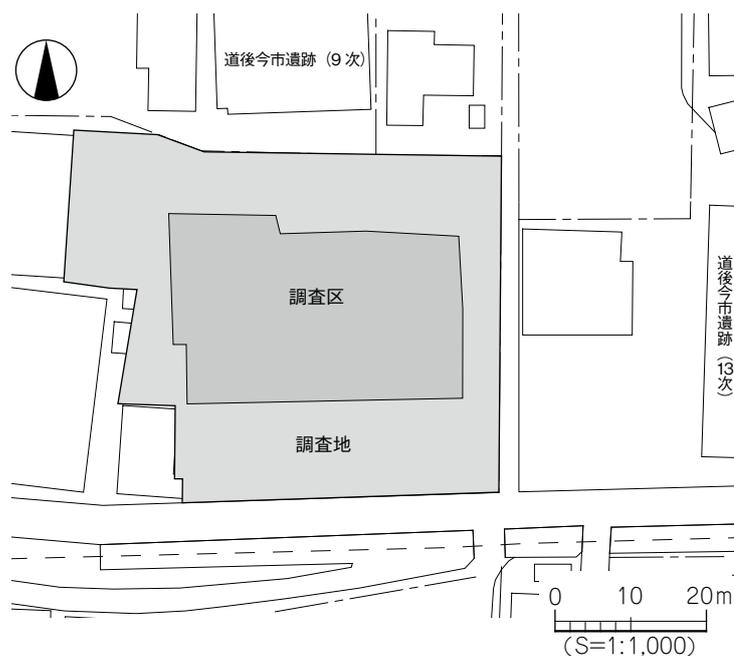
第1節 調査の経緯

2008（平成20）年7月、穴吹興産株式会社代表取締役 穴吹忠嗣氏より、松山市道後北代1266番1地内における共同住宅建設に伴う埋蔵文化財の確認願が松山市教育委員会文化財課（以下、文化財課）に提出された。申請地は、松山市が指定する埋蔵文化財包蔵地『No.68 今市遺物包含地』内に所在する。申請地周辺では、北側に隣接した地点にて道後今市遺跡9次調査（平成4年度調査）が実施され、中世の水田跡や畑跡が確認されている。また、東側では道後今市遺跡13次調査（平成13年度調査）が実施され、中世、13世紀から16世紀代の掘立柱建物跡や土坑のほか、水田跡や畑跡が検出されている。

これらのことから、財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター（以下、埋文センター）は申請地内における埋蔵文化財の有無を確認するため、2008（平成20）年9月に試掘調査を実施した。その結果、数基の柱穴を検出したほか土師器や須恵器の破片が出土した。なお、調査では少なくとも二面の遺構面が存在することも確認した。

この結果を受け、文化財課と申請者の二者は遺跡の取り扱いについて協議を行い、共同住宅建設によって消失する遺跡に対して、記録保存のための発掘調査を実施することになった。

発掘調査は、申請者と埋文センターとが委託契約を結び、申請地内における弥生時代から中世までの集落構造解明を主目的とし、文化財課の指導のもと埋文センターが主体となり、2008（平成20）年11月17日より開始した。



第26図 調査区測量図

第2節 層位 (第27図)

調査地は石手川扇状地の扇央付近、標高31.60～32.00mに立地する。調査以前は、NPO支援センターとして土地利用されていた。調査地の基本層位は、以下の11層である。

第Ⅰ層：真砂土や建物基礎等で構成され、地表下150cmまで開発が行われている。

第Ⅱ層：水田耕作に伴う耕作土〔灰色土(N6/)〕で、層厚25cmを測る。

第Ⅲ層：水田耕作に伴う床土〔明黄褐色土(2.5Y7/6)〕で、層厚4～25cmを測る。

第Ⅳ層：黄灰色土(2.5Y6/1)で、層厚4～24cmを測る。

第Ⅴ層：灰黄褐色土(10YR6/2)で、層厚2～22cmを測る。

第Ⅵ層：土色の違いにより、二層に分層される。

第Ⅵ①層-にぶい黄橙色土(10YR7/2)で、層厚2～24cmを測る。

第Ⅵ②層-にぶい黄橙色土(10YR6/3)で、層厚6～14cmを測る。

第Ⅶ層：浅黄橙色土(10YR8/3)で、層厚4～38cmを測る。本層上面が調査当初における遺構検出面であり、掘立柱建物跡や溝、土坑、柱穴を確認した。また、本層中からは、中世段階の土師器片や須恵器片、陶磁器片が少量出土した。

第Ⅷ層：灰色砂質土(7.5YR6/1)で、調査区北東部で検出した。層厚2～36cmを測る。本層上面では、溝と水田耕作に伴う足跡を検出した。また、本層中からは中世段階の土師器片や須恵器片が少量出土した。

第Ⅸ層：暗褐色土(7.5YR3/4)で、調査区北東部を除く地域で検出した。層厚2～22cmを測る。

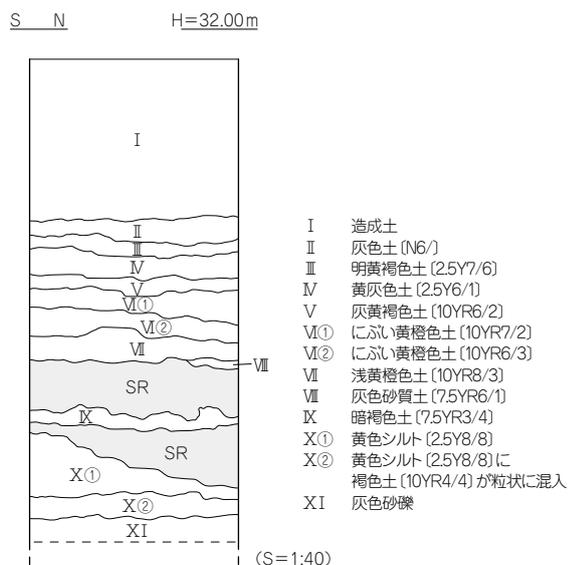
第Ⅹ層：土質の違いにより、二層に分層される。

第Ⅹ①層-黄色シルト(2.5Y8/8)で、調査区南西部で検出した。層厚4～52cmを測る。本層上面にて自然流路や土坑を検出し、本層中からは縄文土器片が数点出土した。

第Ⅹ②層-黄色シルト(2.5Y8/8)に褐色土(10YR4/4)が粒状に混入するもので、調査区南西部で検出した。層厚8～46cmを測る。本層中からは、遺物の出土は見られなかった。

第Ⅺ層：灰色や灰黄色を呈する砂礫層(径3～15cm)で、旧石手川の氾濫に起因する堆積物と考えられる。調査区北東部を除く地域で検出されたが、本層中からの遺物の出土はない。

検出遺構や出土遺物より、第Ⅶ層・第Ⅷ層は中世、第Ⅸ層は古墳時代までに堆積したものと推測される。なお、第Ⅹ層は道後城北地区で散見される縄文時代後・晩期の包含層に相当する。



第27図 西壁柱状土層図

第3節 遺構と遺物

本調査では、縄文時代から中世までの遺構や遺物を確認した。検出した遺構は、掘立柱建物跡4棟（中世）、溝8条（中世）、土坑9基（古墳・中世）、自然流路3条（弥生～古墳）、柱穴251基、足跡（中世）である。ここでは、遺構検出面（第Ⅶ層、第Ⅷ層、第Ⅹ層）ごとに遺構の概要を説明する。

1. 第Ⅹ層上面検出遺構（第28図、図版12）

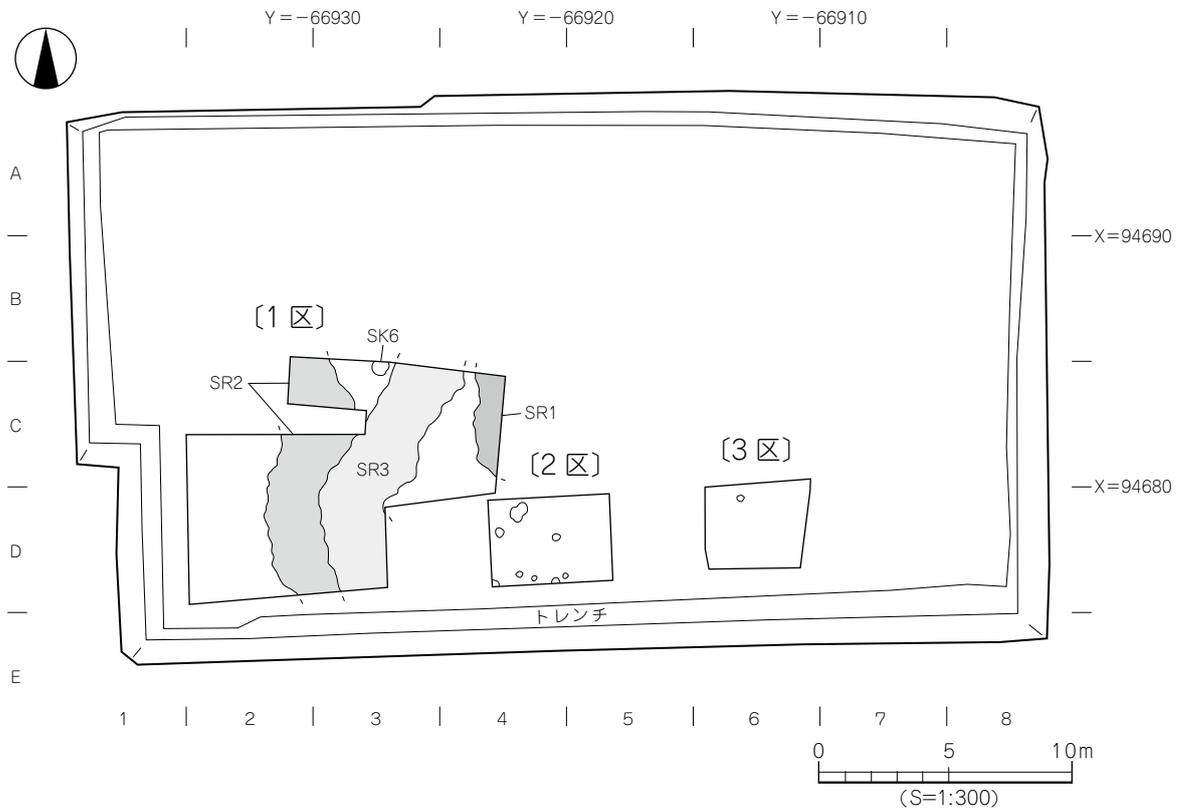
第Ⅹ層上面では調査期間の都合上、調査区全面での調査は実施せず、調査区南半部に三箇所の調査区（1区・2区・3区と呼称）を設定して行った。第Ⅹ層上面では、自然流路3条、土坑1基、柱穴9基を検出した。

（1）自然流路

SR3

1区中央部C3～D4区で検出した南北方向の流路で、流路上面は一部、流路SR2が覆う。規模は検出長10.50m、幅3.00m、深さ9～16cmを測る。断面形態はレンズ状を呈し、埋土は灰白色砂(5Y8/1)に径1～2cm大の小礫を含む。遺物は、流路内より弥生土器片が数点出土したが、図化するものはない。

時期：時期特定しうる遺物の出土はないが、概ね弥生時代の流路とする。



第28図 第Ⅹ層上面遺構配置図

SR2 (図版 12)

1区中央部 B2～D3区で検出した南北方向の流路で、流路上面は第Ⅷ層が覆う。規模は検出長 9.50 m、幅 2.30 m、深さ 12～50cmを測る。断面形態はレンズ状を呈し、埋土は灰白色砂 (5Y7/1) を基調とし、部分的に灰オリーブ色シルト (5Y6/2) が堆積する。遺物は遺存状態の良好なものが多く、土師器甕や壺、高坏などが流路上位より出土した。

出土遺物 (第 29 図、図版 14)

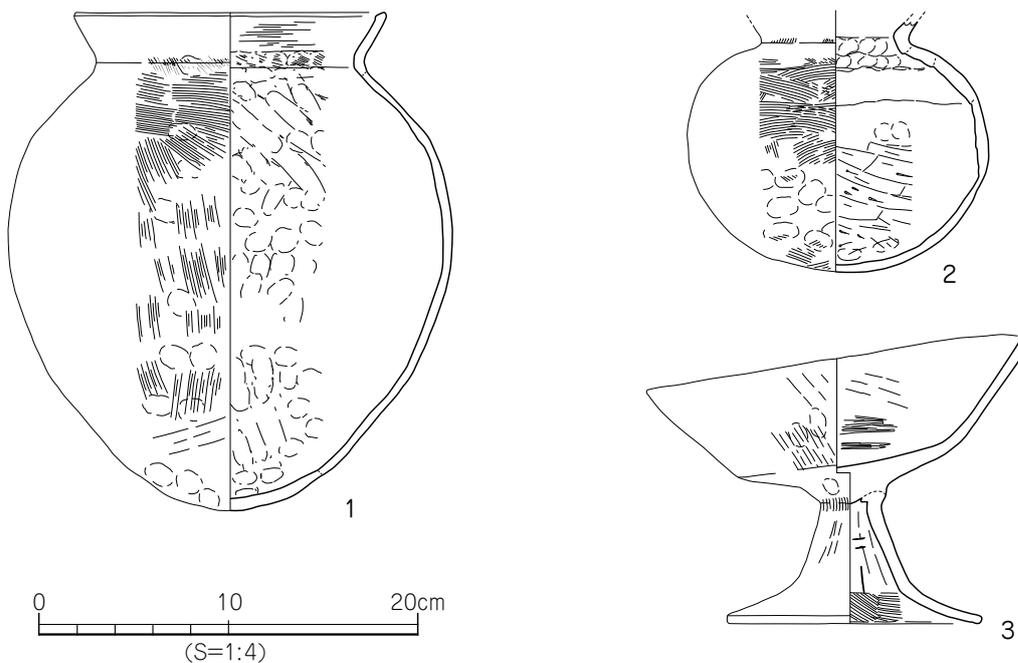
1は土師器の甕である。口径 16.2cm、推定器高 26.4cmを測り、1/2の残存である。口縁部は内湾し、口縁端部は内傾する面をもつ。口頸部境界から底部内面には指頭痕が顕著に残る。2は土師器壺の頸胴部である。外面にはハケメ調整、胴部内面中位から底部にかけてはヘラケズリ調整を施す。3は土師器の高坏である。口径 20.1cm、器高 15.3cmを測る。脚部は緩やかに外反し、口縁部は直立気味に立ち上がる。胎土中には、赤色酸化土粒が少量含まれる。

時期：出土遺物の特徴より古墳時代中期、5世紀前半とする。

SR1

1区東側 C4～D4区で検出した南北方向の流路で、流路上面は第Ⅷ層が覆う。規模は検出長 4.00 m、幅 1.20 m、深さ 16～26cmを測る。断面形態はレンズ状を呈し、埋土は灰色粗砂 (N5/) を基調とし、オリーブ灰色シルト (10Y6/2) がブロック状に混入する。遺物は流路内より、須恵器片や土師器片が数点出土したが、図化するものはない。

時期：時期特定しうる遺物の出土はないが、概ね古墳時代の溝とする。



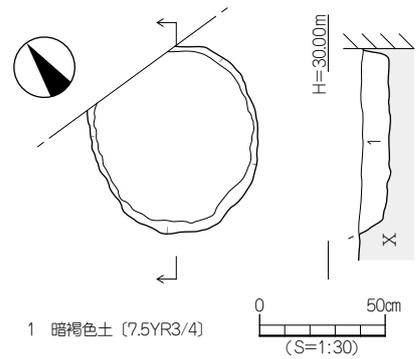
第 29 図 SR2 出土遺物実測図

(2) 土 坑

SK 6 (第 30 図)

1区北壁中央部C3区で検出した土坑で、土坑北側は調査区外に続く。平面形態は楕円形を呈するものと考えられ、規模は長径0.66m、短径0.63m、深さ12cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は暗褐色土(7.5YR3/4)単層である。土坑壁体は緩やかに立ち上がり、基底面は平坦である。遺物は埋土内より土師器片が出土したが、図化しうるものはない。

時 期：時期特定しうる遺物の出土はないが、概ね古墳時代の遺構とする。



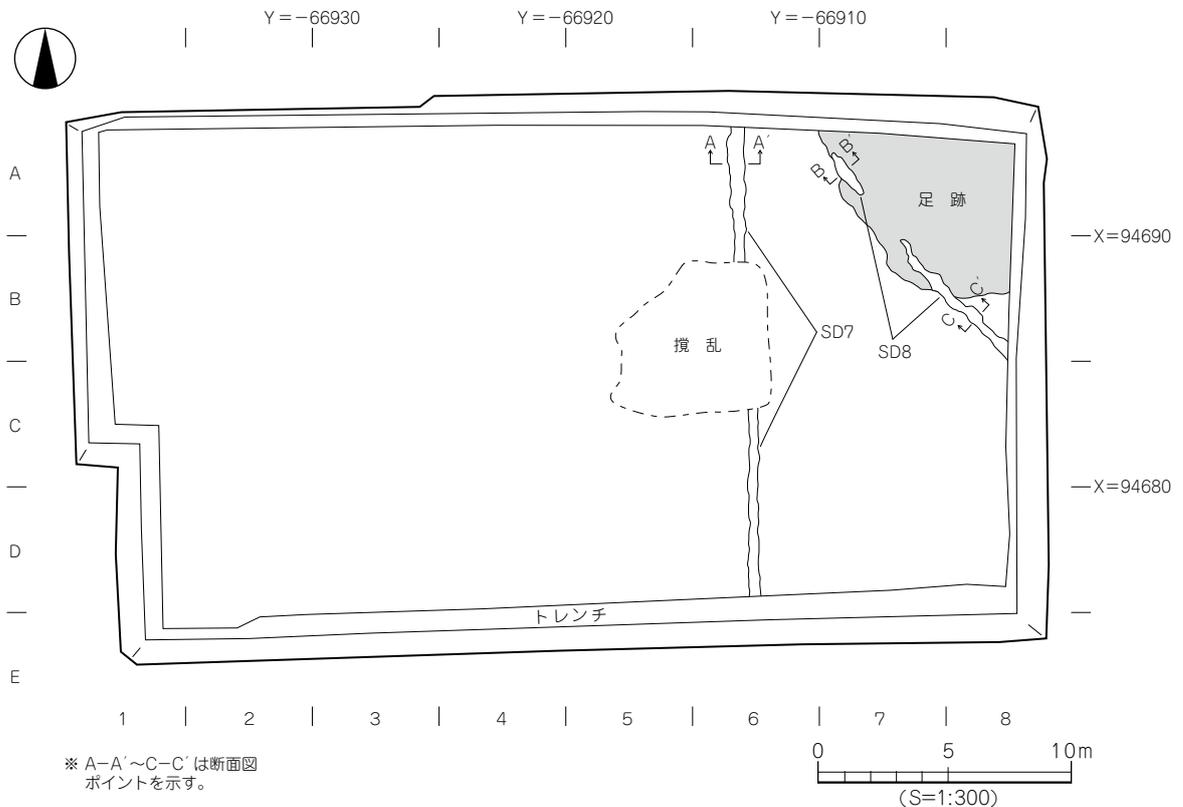
第 30 図 SK 6 測量図

(3) 柱 穴

2区と3区からは、9基の柱穴を検出した。平面形態は円形または楕円形を呈し、規模は径25～70cm、深さ8～26cmを測る。柱穴掘り方埋土は、すべて暗褐色土である。柱穴内からは、遺物の出土はない。

2. 第Ⅷ層上面検出遺構 (第 31 図、図版 12)

第Ⅷ層上面では、溝2条と足跡を検出した。



第 31 図 第Ⅷ層上面遺構配置図

(1) 溝

SD7 (第32図)

調査区中央部東寄り A6～D6 区で検出した南北方向の溝で、溝中央部は攪乱坑により消失し、溝上面は第Ⅶ層が覆う。規模は検出長 19.00 m、幅 0.18～0.50 m、深さ 8～23cm を測る。断面形態は浅い「U」字状を呈し、埋土は二種類あり、上位は灰褐色砂 (7.5YR5/2)、下位は褐灰色砂 (7.5YR6/1) である。溝基底面は凹凸が著しく、北側から南側に向けて傾斜をなす。遺物は埋土内より、土師器や須恵器の小破片が数点出土したが、図化しうるものはない。

時期：第Ⅶ層は検出した遺構や出土遺物より、13 世紀頃までに堆積したものと考えられる。SD7 は、この第Ⅶ層が覆うことから、概ね 13 世紀以前の溝とする。

SD8 (第32図、図版 12)

調査区北東部 A7～B8 区で検出した北西－南東方向の溝で、溝中間部は一部消失している。規模は検出長 6.50 m、幅 0.18～0.60 m、深さ 8～27cm を測る。断面形態は浅い「U」字状を呈し、埋土は灰褐色砂 (7.5YR5/2) である。溝基底面は平坦であるが、北西部から南東部に向けて傾斜をなす。溝内からは、遺物の出土はない。

時期：遺物の出土はないが、検出状況や埋土が SD7 と酷似することから、概ね 13 世紀以前とする。

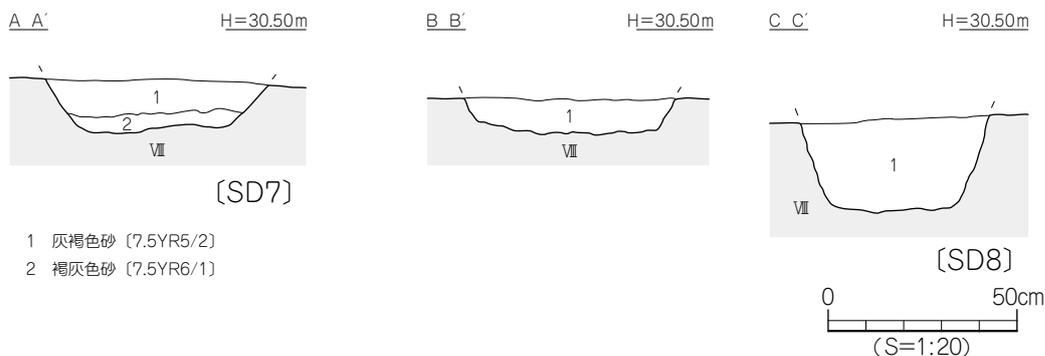
(2) 足跡 (図版 12)

調査区北東部 A7～B8 区で検出した足跡群で、足跡上面は第Ⅶ層が覆う。東西 8.00m、南北 6.80 m の範囲に 86 個の足跡を確認した。足跡は径 5～10cm、深さ 3～6cm を測り、灰褐色砂 (7.5YR5/2) で埋没している。その形状から、人間ではなく牛の足跡と考えられる。なお、足跡内からは遺物の出土はない。

時期：遺物の出土はないが、検出状況や溝 SD7、SD8 と埋土が酷似することから、概ね 13 世紀以前の遺構とする。

3. 第Ⅶ層上面検出遺構 (第33図、図版 13)

第Ⅶ層上面では、掘立柱建物跡 4 棟、溝 6 条、土坑 8 基、柱穴 242 基を検出した。



第32図 SD7・SD8 断面図

(1) 掘立柱建物

掘立1 (第34図、図版13)

調査区北西部 B3・4 区で検出した東西3間、南北2間規模の東西棟で、9基の柱穴で構成される。建物規模は東西長5.60m、南北長3.10mを測る。柱穴掘り方は円形または楕円形を呈し、規模は径20～50cm、深さ3～20cmを測る。掘り方埋土は、にぶい黄橙色土(10YR7/4)である。柱痕は2基の柱穴(SP56・185)で検出され、径6～10cmを測る。柱痕埋土は、灰褐色土(7.5YR4/2)である。遺物は掘り方埋土中より、土師器や須恵器、石器が数点出土した。

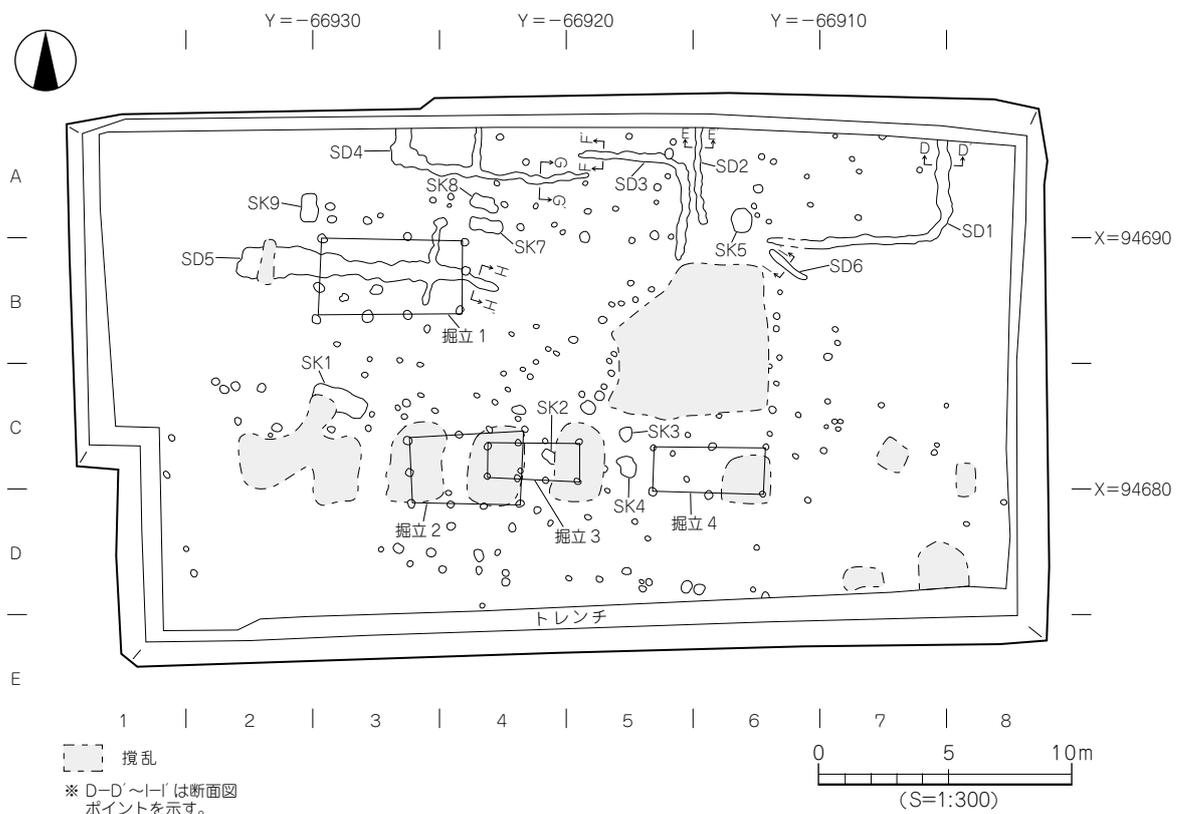
出土遺物 (第34図)

4はSP169、6はSP56出土品。4は土師器坏で、口縁部1/3、底部1/6の残存である。推定口径12.0cm、底径7.2cm、器高3.5cmを測る。口縁部はやや内湾し、底部の切り離しは回転糸切り技法による。6は東播系須恵器のコネ鉢で、推定口径29.7cmを測る。

時期：出土遺物の特徴より、掘立1は14世紀前半の建物とする。

掘立2 (第34図)

調査区南西部 C3～D4 区で検出した東西3間、南北2間規模の東西棟で、10基の柱穴で構成される。建物規模は東西長4.20m、南北長2.70mを測る。柱穴掘り方は円形または楕円形を呈し、規模は径16～40cm、深さ14～49cmを測る。掘り方埋土は、にぶい黄橙色土(10YR7/4)である。なお、SP39からは炭化物と焼土が検出された。柱痕はSP39で検出され、柱痕径6cm、埋土は灰褐色土(7.5YR4/2)である。遺物は掘り方埋土中より、土師器や瓦器片のほか青磁の破片や石器が出土した。



第33図 第七層上面遺構配置図

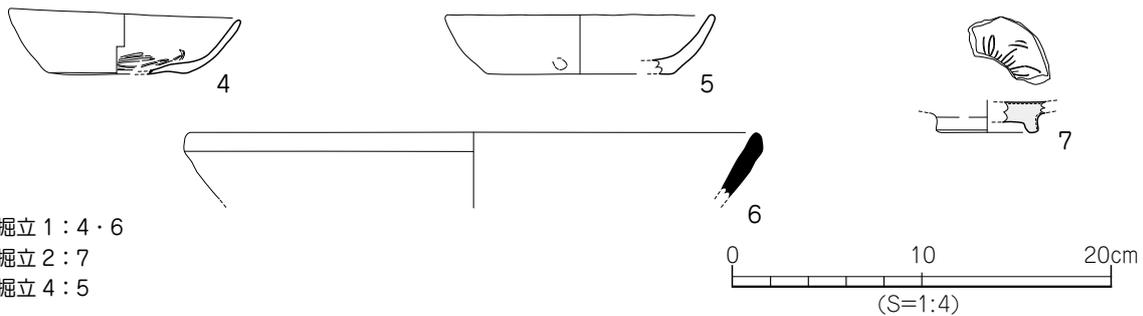
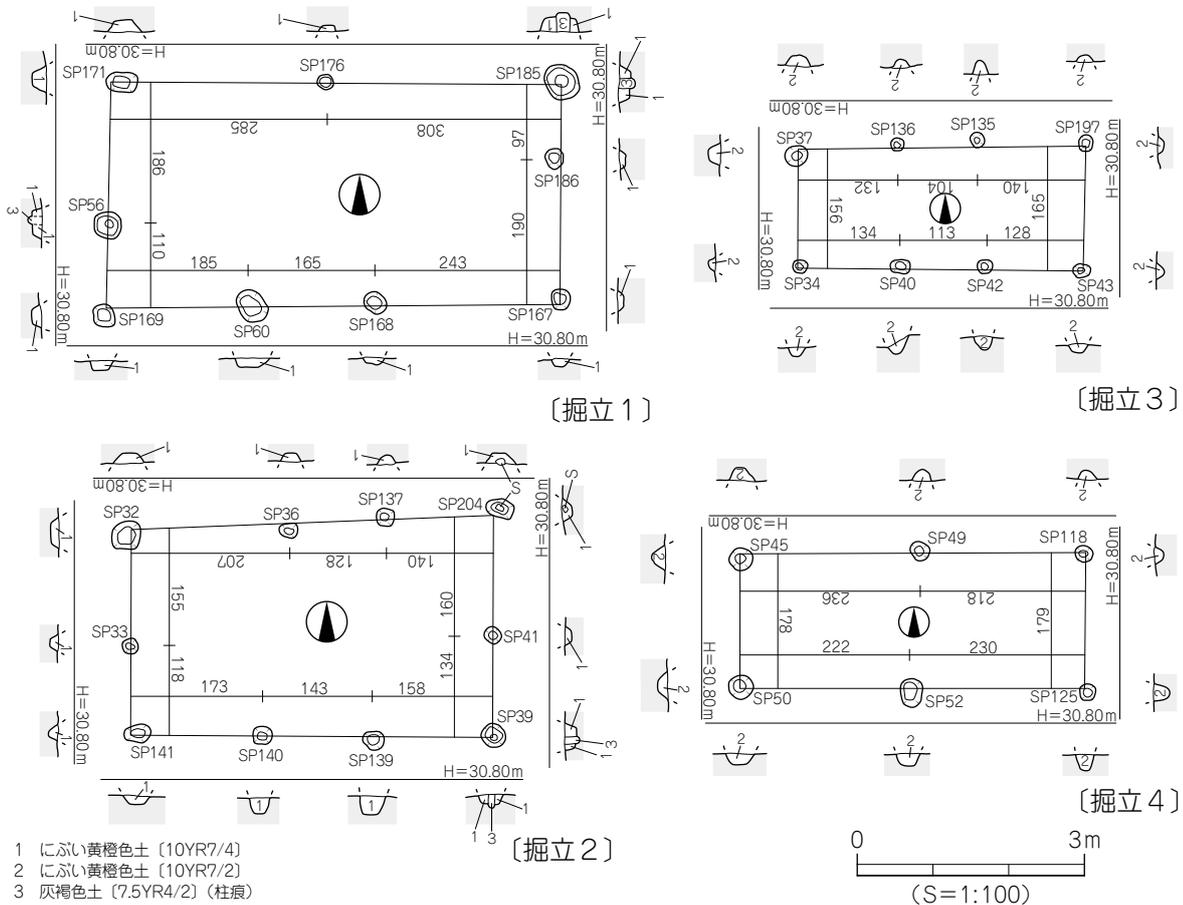
出土遺物 (第 34 図)

7 は SP39 出土品。青磁碗で底部 1/4 の残存であり、推定底径 5.4cm を測る。胎土は灰色を呈し、内外面には淡緑色の釉薬が施されているが、底部外面には施されていない。

時 期：出土遺物の特徴より、掘立 2 は 14 世紀前半の建物とする。

掘立 4 (第 34 図)

調査区南東部 C5 ~ D6 区で検出した東西 2 間、南北 1 間の東西棟で、6 基の柱穴で構成される。建物規模は東西長 4.45 m、南北長 2.00 m を測る。柱穴掘り方埋土は、にぶい黄橙色土 (10YR7/2) であるが、SP45 と SP50 からは炭化物と焼土を検出した。遺物は掘り方埋土中より、土師器片と瓦器片が出土した。



掘立 1 : 4・6
掘立 2 : 7
掘立 4 : 5

第 34 図 掘立柱建物測量図・出土遺物実測図

出土遺物（第 34 図）

5 は SP50 出土品。土師器坏で、推定口径 14.0cm、底径 10.0cm、器高 3.1cm を測る。口縁部は内傾し、体部外面はヨコナデ、内面はナデ調整を施す。

時期：出土遺物の特徴より、掘立 4 は 13 世紀後半の建物とする。

掘立 3（第 34 図）

調査区南西部 C4・5 区で検出した東西 3 間、南北 1 間の東西棟で、8 基の柱穴で構成される。建物規模は東西長 3.80 m、南北長 1.70 m を測る。柱穴掘り方は円形または楕円形を呈し、規模は径 12～34cm、深さ 10～34cm を測る。掘り方埋土は、にぶい黄橙色土（10YR7/2）であるが、SP40 と SP43 からは炭化物と焼土が検出された。遺物は掘り方埋土中より、土師器片や須恵器片が数点出土したが図化しうるものはない。

時期：時期特定しうる遺物はないが、掘り方埋土が掘立 4 と酷似することなどから、概ね 13 世紀後半の建物とする。

（2）溝

SD5（第 35 図、図版 13）

調査区北西部 A3～B4 区で検出した東西方向の溝で、東側は南北方向に延びている。溝上面は、第 VI①層が覆う。規模は検出長 9.84 m、幅 0.15～1.40 m、深さは 1.5～10cm を測る。断面形態は「U」字状を呈する。埋土は三種類あり、上位は灰色土（7.5Y5/1）に褐色砂が混入、下位は明黄褐色土（10YR6/6）と褐灰色砂（10YR5/1）である。溝基底面は平坦であるが、西側から東側に向けて緩やかな傾斜をなす。遺物は溝西側より土師器土鍋や皿の破片のほか、須恵器や瓦器、鉄が出土した。

出土遺物（第 36 図）

8 は土師器土鍋の口縁部片で、推定口径 42.6cm を測る。口縁部はやや内湾し、口頸部内面には明瞭な稜をもつ。外面はナデ調整、内面は粗いハケメ調整を施す。9 は土師器皿で、推定口径 8.8cm、底径 7.0 cm、器高 1.6cm を測る。底部は平底で、底部切り離しは回転糸切り技法による。10 は東播系のコネ鉢で、推定口径 28cm を測る。口縁部は内傾し、口縁端部は尖り気味に丸く仕上げる。

時期：出土遺物の特徴より、SD5 は 13～14 世紀代の溝とする。

SD1（第 35 図）

調査区北東部 A6～B8 区で検出した東西方向の溝で、溝東側は「L」字状に折れ曲がる。溝上面は、第 VI①層が覆う。規模は検出長 10.30 m、幅 0.24～0.46 m、深さは 2～15cm を測る。断面形態は、浅い「U」字状を呈する。埋土は三種類あり、上位より 1 層灰色土（7.5Y5/1）に褐色砂（10YR4/4）が混入、2 層灰色土（7.5Y5/1）、3 層明黄褐色土（10YR6/6）である。溝基底面はほぼ平坦であるが、東側から西側に向けて傾斜をなす。遺物は埋土中より、土師器片や須恵器片、石が少量出土したが図化しうるものはない。

時期：時期特定しうる遺物はないが、埋土が SD1 と酷似することから、概ね 13～14 世紀代の溝とする。

SD 2 (第 35 図)

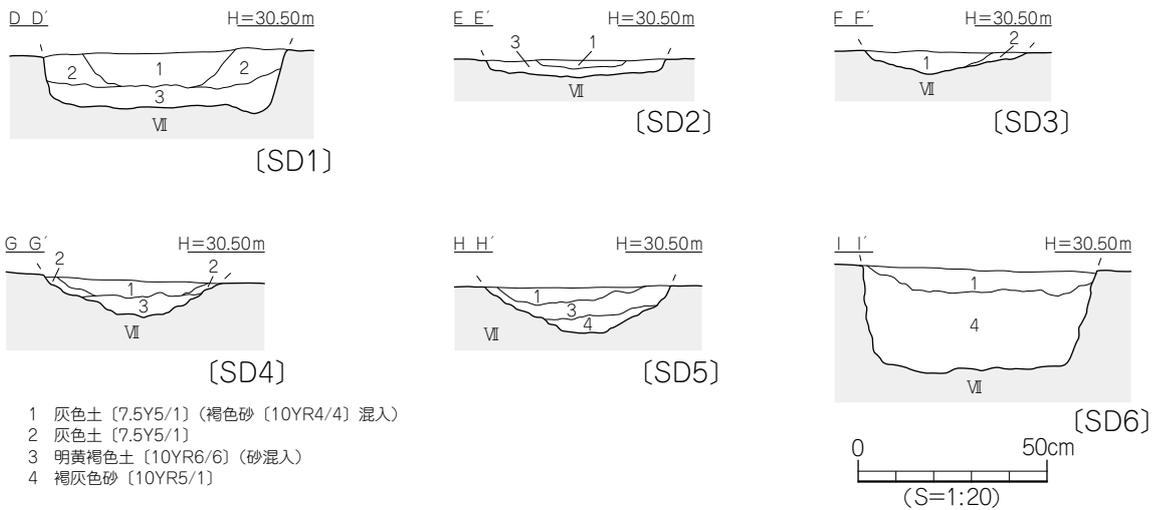
調査区北東部 A6 区で検出した南北方向の溝で、溝北側は調査区外に続く。溝上面は、第VI①層が覆う。規模は検出長 4.06 m、幅 0.15 ~ 0.28 m、深さ 2 ~ 5cmを測る。断面形態は、皿状を呈する。埋土は二種類あり、上層は灰色土 (7.5Y5/1) に褐色砂 (10YR4/4) が混入、下層は明黄褐色土 (10YR6/6) である。溝基底面は、ほぼ平坦である。遺物は埋土中より、土師器片が数点出土したが図化しうるものはない。

時期：時期特定しうる遺物はないが、埋土がSD1 と酷似することから、概ね 13 ~ 14 世紀代の溝とする。

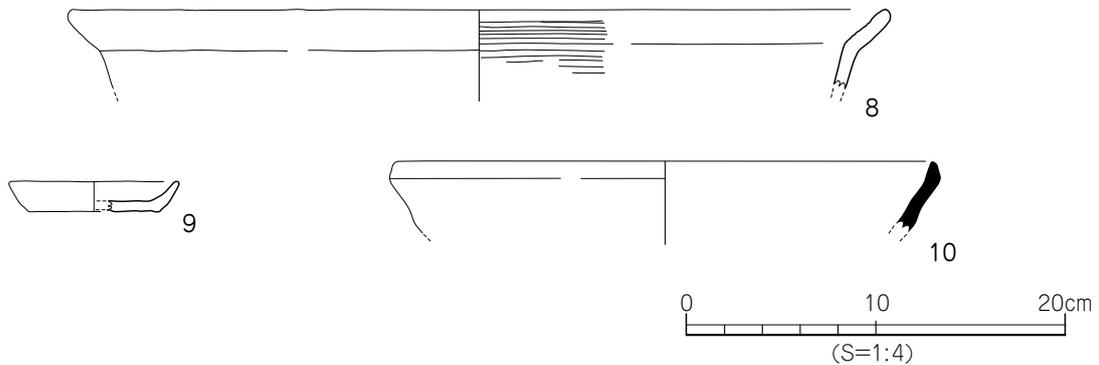
SD 3 (第 35 図)

調査区北部 A5 ~ B5 区で検出した「L」字状に折れ曲がる溝で、溝上面は第VI①層が覆う。規模は検出長 7.64 m、幅 0.20 ~ 0.50 m、深さ 3 ~ 7cmを測る。断面形態は、皿状を呈する。埋土は灰色土 (7.5Y5/1) を基調とするが、部分的に褐色砂 (10YR4/4) が混入する。溝基底面は、ほぼ平坦である。遺物は埋土中より土師器片が数点出土したが、図化しうるものはない。

時期：時期特定しうる遺物はないが、埋土がSD1 と酷似することから、概ね 13 ~ 14 世紀代の溝とする。



第 35 図 SD 1 ~ SD 6 断面図



第 36 図 SD 5 出土遺物実測図

SD4 (第35図)

調査区北部 A3～5 区で検出した南北方向の溝で、途中、「L」字状に折れ曲がる。溝上面は、第VI①層が覆う。規模は検出長 8.54 m、幅 0.14～0.72 m、深さ 2～11cmを測る。断面形態は、レンズ状を呈する。埋土は三種類あり、上位は灰色土(7.5Y5/1)に褐色砂(10YR4/4)が混入するものと灰色土、下位は明黄褐色土(10YR6/6)である。溝基底面は、中央部付近で緩やかな段差をもつ。遺物は埋土中より、土師器片や須恵器片が数点出土したが図化しうるものはない。

時期：時期特定しうる遺物はないが、埋土がSD2と酷似することから、概ね13～14世紀代の溝とする。

SD6 (第35図)

調査区北東部 B6 区で検出した北西－南東方向の短い溝で、溝上面は、第VI①層が覆う。規模は検出長 1.85 m、幅 0.14～0.62 m、深さは 27cmを測る。断面形態は、皿状を呈する。埋土は二種類あり、上位は灰色土(7.5Y5/1)に褐色砂(10YR4/4)が混入するもの、下位は褐灰色砂(10YR5/1)である。溝基底面は、ほぼ平坦である。溝内から、遺物の出土は無い。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、埋土がSD1やSD2と類似することや検出層位などから、13～14世紀代の溝とする。

(3) 土 坑

SK1 (第37図、図版13)

調査区西部 C3 区で検出した土坑で、平面形態は楕円形を呈し、規模は長径 2.30 m、短径 1.00 m、深さ 6cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土はにぶい褐色土(7.5YR5/4)を基調とし、基底面付近には部分的に褐灰色土(5YR6/1)が堆積する。土坑壁体は緩やかに立ち上がり基底面は東側から西側に向けて緩やかな傾斜をなす。遺物は埋土中より、土師器杯や皿のほか須恵器片や石器が出土した。

出土遺物 (第38図、図版14)

11は土師器杯で、推定口径 11.3cm、底径 7.5cm、器高 3.3cmを測る。口縁部はやや内湾し、底部切り離しは回転糸切り技法による。13は土師器皿で、口径 7.2cm、底径 6.0cm、器高 1.7cmを測る。口縁部は内傾し、底部切り離しは回転糸切り技法による。

時期：出土遺物の特徴より、SK1は13世紀後半の土坑とする。

SK9 (第37図)

調査区北西部 A2・3 区で検出した土坑で、平面形態は長方形を呈し、規模は長さ 1.05 m、幅 0.56 m、深さ 6cmを測る。断面形態は浅い皿状を呈し、埋土は灰色土(5Y5/1)に褐色砂が混入するものである。なお、埋土中には少量の炭化物が含まれている。土坑基底面は、ほぼ平坦である。遺物は埋土中より土師器片が数点出土した。

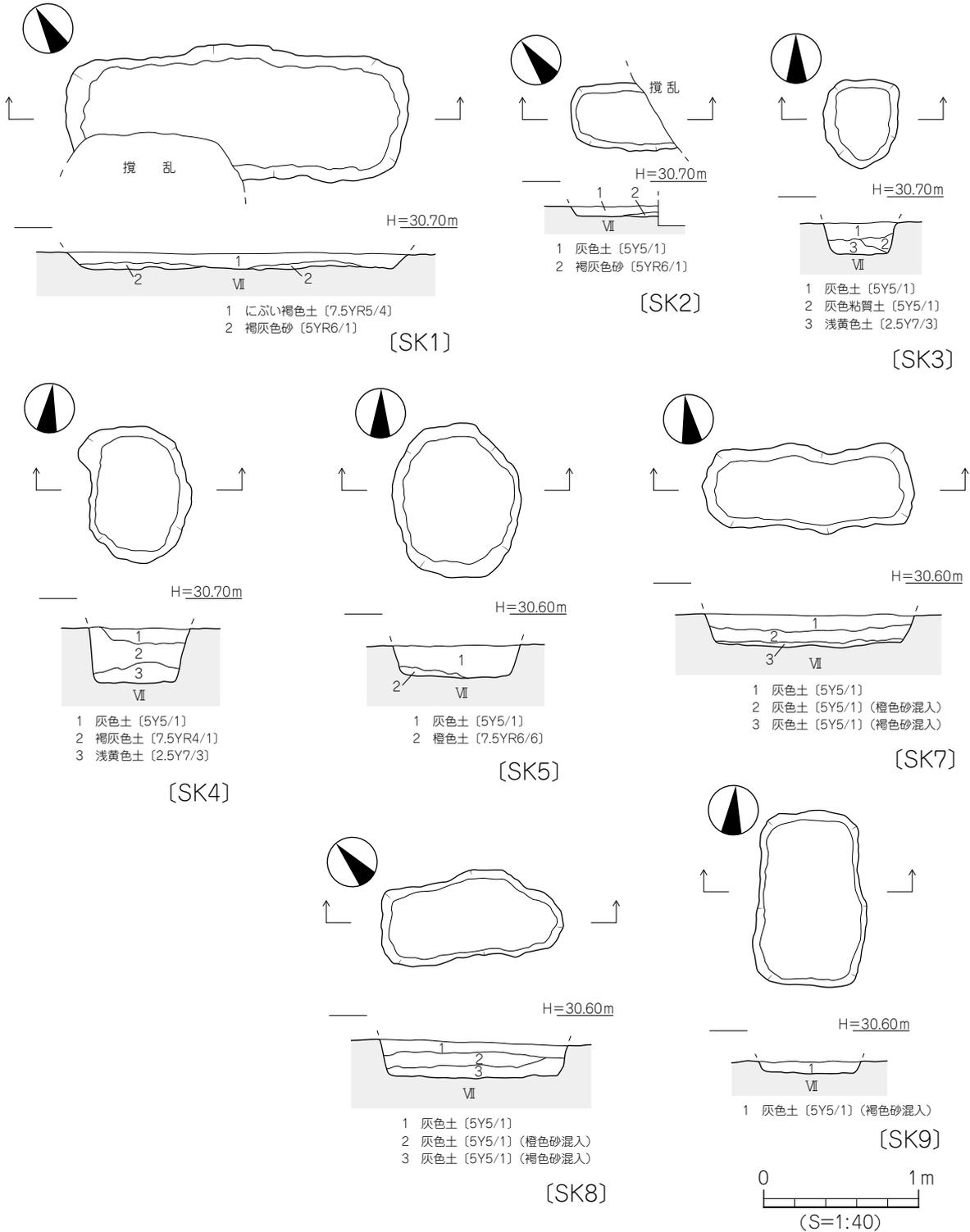
出土遺物 (第38図、図版14)

12は土師器杯で、口径 13.3cm、底径 8.0cm、器高 3.6cmを測る。口縁部は内傾し、口縁端部は尖り気味に仕上げる。底部切り離しは、回転糸切り技法による。

時期：出土遺物の特徴より、SK9は13世紀後半の土坑とする。

SK 4 (第 37 図)

調査区南東部 C5 区で検出した土坑で、平面形態は楕円形を呈し、規模は長径 0.85 m、短径 0.75 m、深さ 33cm を測る。断面形態は逆台形状を呈し、土坑壁体は直立気味に立ち上がる。埋土は三種類あり、上位から灰色土 (5Y5/1)、褐灰色土 (7.5YR4/1)、浅黄色土 (2.5Y7/3) となる。遺物は埋土中より、土師器皿や陶磁器片が出土した。



第 37 図 SK 1 ~ 5 · 7 ~ 9 測量図

出土遺物（第 38 図）

14は土師器皿で、推定口径8.0cm、底径6.2cm、器高1.5cmを測る。底部は1/2の残存で、口縁部は内傾し、底部切り離しは回転糸切り技法による。

時期：出土遺物の特徴より、SK4は13世紀後半の土坑とする。

SK3（第37図）

調査区南東部C5区で検出した土坑で、平面形態は楕円形を呈し、規模は長径0.70m、短径0.60m、深さ18cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、土坑壁体は直立気味に立ち上がる。埋土は三種類あり、上位から灰色土（5Y5/1）、灰色粘質土（5Y5/1）、浅黄色土（2.5Y7/3）となる。遺物は埋土中より、土師器小片が数点出土したが、図化しうるものはない。

時期：時期特定しうる遺物はないが、埋土がSK4と類似することや検出状況から、概ね13～14世紀代の土坑とする。

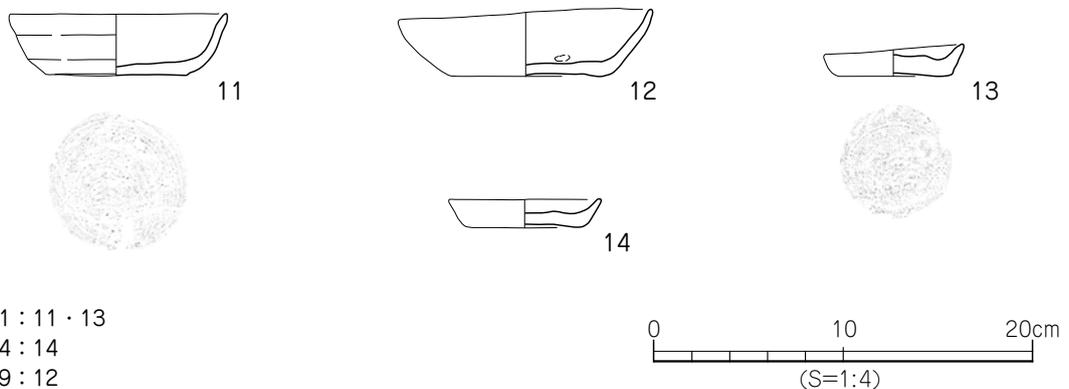
SK2（第37図）

調査区南部C4区で検出した土坑で、平面形態は楕円形を呈し、規模は長径0.80m、短径0.58m、深さ4cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は灰色土（5Y5/1）を基調とし、基底面付近には部分的に褐灰色砂（5YR6/1）が堆積する。なお、埋土中には、少量の炭化物が含まれている。遺物は埋土中より土師器小片や石器が出土したが、図化しうるものはない。

時期：時期特定しうる遺物はないが、埋土がSK3と類似することや検出状況から、13～14世紀代の土坑とする。

SK5（第37図）

調査区北東部A6区で検出した土坑で、平面形態は長方形を呈し、規模は長さ1.00m、幅0.85m、深さ21cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、土坑壁体は直立気味に立ち上がる。埋土は灰色土（5Y5/1）を基調とし、基底面付近には部分的に橙色土（7.5YR6/6）が堆積する。遺物は埋土中より、土師器や須恵器、陶磁器の小片が数点出土したが、図化しうるものはない。



SK1：11・13
SK4：14
SK9：12

第 38 図 SK 出土遺物実測図

時期：時期特定しうる遺物はないが、埋土がSK2と類似することや検出状況から、概ね13～14世紀代の土坑とする。

SK7（第37図、図版13）

調査区北部A4区で検出した土坑で、平面形態は長方形を呈し、規模は長さ1.30m、幅0.52m、深さ24cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、土坑壁体は直立気味に立ち上がる。埋土は三種類あり、上位より灰色土（5Y5/1）、灰色土に橙色砂が混入、灰色土に褐色砂が混入するものである。遺物は埋土中より土師器小片が数点出土したが、図化しうるものはない。

時期：時期特定しうる遺物はないが、検出状況から概ね13～14世紀代の土坑とする。

SK8（第37図、図版13）

調査区北部A4区で検出した土坑で、平面形態は長方形を呈し、規模は長さ1.35m、幅0.68m、深さ25cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、土坑壁体は直立気味に立ち上がる。埋土は三種類あり、上位より灰色土（5Y5/1）、灰色土に橙色砂が混入、灰色土に褐色砂が混入するものである。遺物は埋土中より土師器小片が数点出土したが、図化しうるものはない。

時期：時期特定しうる遺物はないが、検出状況から概ね13～14世紀代の土坑とする。

（4）柱 穴

第Ⅶ層上面では、柱穴242基（掘立柱建物柱穴33基を含む）を検出した。平面形態は円形または楕円形を呈し、規模は径12～68cm、深さ3～32cmを測る。柱穴掘り方埋土は、以下の四種類である。

灰褐色土：70基、灰色土：67基、にぶい褐色土：63基、にぶい黄橙色土：42基

なお、柱穴内からは中世の土師器や須恵器の破片のほか輸入陶磁器片が少量出土した。

（5）包含層・地点不明出土遺物

1）包含層出土遺物（第39図、図版14）

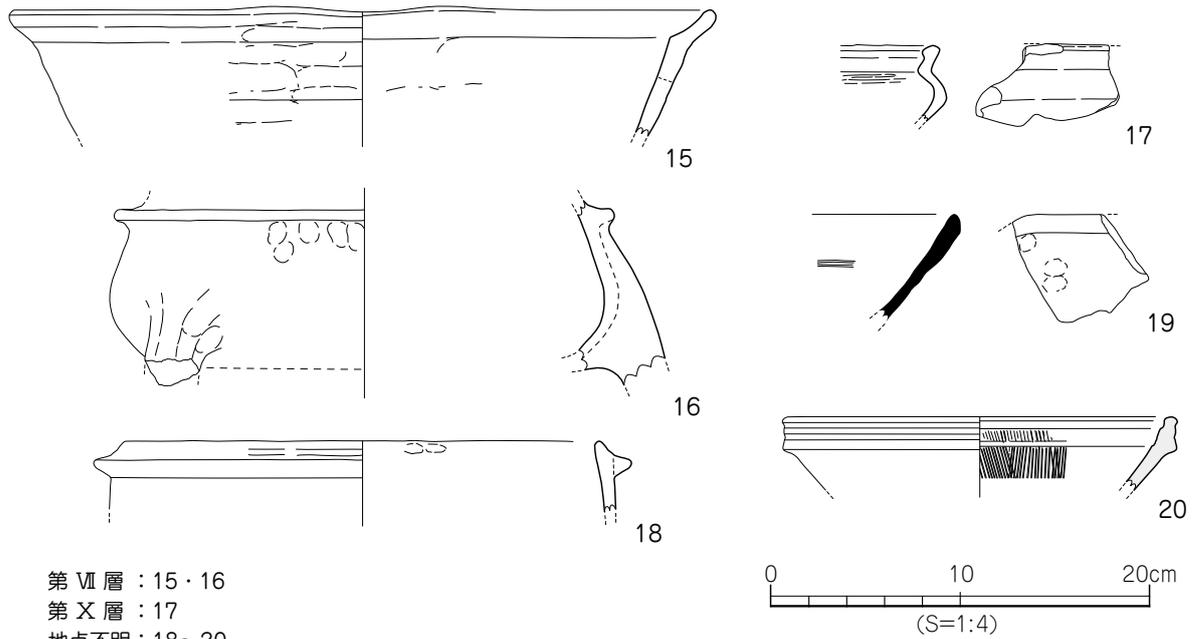
15・16は第Ⅶ層、17は第Ⅹ層出土品。15は土師器土鍋の口縁部片で、推定口径37.2cmを測る。口縁部は内湾し、口頸部内面には明瞭な稜をもつ。16は土師器の三足付土釜である。体部は丸みを帯び、比較的厚みのある脚部をもつ。17は縄文時代晩期の浅鉢片で、体部内面にはヨコ方向の丁寧なミガキ調整を施す。

2）地点不明出土遺物（第39図、図版14）

18は土師器土釜の口縁部片で、丸みのある断面三角形の凸帯が貼り付けられている。19は東播系コネ鉢の口縁部片、20は備前焼播鉢の口縁部片である。20の口縁部外面には2条の凹線、体部内面には条線が残る。

第4節 小 結

本調査では、縄文時代から中世までの遺構・遺物を確認した。以下、時代別にまとめを行う。



第 39 図 包含層・地点不明出土遺物実測図

(1) 縄文時代

遺構は未検出であるが、第Ⅹ層中より縄文時代晩期の浅鉢片が出土した。調査地を含む道後城北地区一帯には弥生時代の遺構検出面である黄色シルト層より、縄文時代後・晩期の土器が出土しており、今回の調査で検出した第Ⅹ層は、この黄色シルト層に相当するものといえよう。

(2) 弥生時代～古墳時代

弥生時代では、自然流路SR3より後期の土器片が少量出土したが、明確な遺構は検出されなかった。古墳時代では、土坑SK6と自然流路2条(SR1・2)を検出した。このうち、SR2からは完形に近い土器が流路上位に点在しており、意図的な土器の廃棄が行われたものと考えられる。

(3) 中世

中世では、主に13世紀から14世紀代の遺構や遺物を確認した。調査では、検出面や遺構の切り合いから、少なくとも三時期の変遷が認められる。

まず、13世紀以前では調査区北東部にて水田跡や溝(SD7・8)を検出した。調査地北側に隣接する道後今市遺跡9次調査においても13世紀代の水田跡が検出されていることから、本調査地北側から北東部一体には該期の水田が営まれていたものと推測される。一方、13世紀後半には、小規模な建物址2棟(掘立3・4)や溝2条(SD5・6)と土坑3基(SK1・4・9)を検出した。さらに、14世紀前半にはやや大型の建物址2棟(掘立1・2)を検出した。これら以外の溝や土坑については時期を判断しうる遺物が少なく明確な時期特定は難しいが、検出状況や遺構埋土などから、概ね13～14世紀代の遺構と考えられる。

以上のことから、中世段階では調査地や周辺地域が集落域や生産域として土地利用されたことが判明した。このことは、道後城北地区における中世集落を解明するうえで貴重な調査成果となる。

遺構一覧・遺物観察表 — 凡例 —

以下の表は、本調査地検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。

(1) 遺構一覧表

- 地区欄 グリッド名を記載。
 埋土欄 複数の土層がある場合には、「灰色土 他」と記載。
 出土遺物欄 土器名称を略記した。
 例) 弥生→弥生土器、土師→土師器、須恵→須恵器

(2) 遺物観察表

- 法量欄 () : 復元推定値
 調整欄 土器の各部位名称を略記した。
 例) 口→口縁部、坏→坏部、胴→胴部、胴上→胴上半部、胴下→胴下半部、
 体→体部、柱→柱部、脚→脚部、底→底部
 胎土欄 胎土欄は混和剤を略記した。
 例) 石→石英、長→長石、金→金ウンモ
 () 中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。
 例) 石・長 (1~4) → 「1~4mm大の石英・長石を含む」である。
 焼成欄 焼成欄の略記について
 ◎→良好、○→良

表 28 溝一覧

溝 (SD)	地区	断面形	規模 長さ×幅×深さ (m)	埋土	出土遺物	時期	備考
1	A6~B8	「U」字状	10.30 × 0.46 × 0.15	灰色土 (褐色砂混入) 他	土師・須恵・石	13~14世紀	
2	A6	皿状	4.06 × 0.28 × 0.05	灰色土 (褐色砂混入) 他	土師	13~14世紀	
3	A5~B5	皿状	7.64 × 0.50 × 0.07	灰色土 (褐色砂混入)	土師	13~14世紀	
4	A3~5	レンズ状	8.54 × 0.72 × 0.11	灰色土 (褐色砂混入) 他	土師・須恵	13~14世紀	
5	A3~B4	「U」字状	9.84 × 1.40 × 0.10	灰色土 (褐色砂混入) 他	土師・須恵・瓦器・鉄	13~14世紀	
6	B6	皿状	1.85 × 0.62 × 0.27	灰色土 (褐色砂混入) 他		13~14世紀	
7	A6~D6	「U」字状	19.00 × 0.50 × 0.23	灰褐色砂 他	土師・須恵	13世紀以前	
8	A7~B8	「U」字状	6.50 × 0.60 × 0.27	灰褐色砂		13世紀以前	

表 29 自然流路一覧

流路 (SR)	地区	断面形	規模 長さ×幅×深さ (m)	埋土	出土遺物	時期	備考
1	C4~D4	レンズ状	4.00 × 1.20 × 0.26	灰色粗砂 他	土師・須恵	古墳時代	
2	B2~D3	レンズ状	9.50 × 2.30 × 0.50	灰白色砂 他	土師	5世紀前半	
3	C3~D4	レンズ状	10.50 × 3.00 × 0.16	灰白色砂 (小礫含む)	弥生	弥生時代	

表 30 土坑一覧

土坑 (SK)	地区	平面形	断面形	規模 長径×短径×深さ (m)	埋土	出土遺物	時期	備考
1	C3	楕円形	皿状	2.30 × 1.00 × 0.06	にぶい褐色土 他	土師・須恵・石	13世紀後半	
2	C4	楕円形	皿状	0.80 × 0.58 × 0.04	灰色土 他	土師・石	13~14世紀	炭化物
3	C5	楕円形	逆台形状	0.70 × 0.60 × 0.18	灰色土 他	土師	13~14世紀	
4	C5	楕円形	逆台形状	0.85 × 0.75 × 0.33	灰色土 他	土師・陶磁器	13世紀後半	
5	A6	長方形	逆台形状	1.00 × 0.85 × 0.21	灰色土 他	土師・須恵・陶磁器	13~14世紀	
6	C3	楕円形	逆台形状	0.66 × 0.63 × 0.12	暗褐色土	土師	古墳時代	
7	A4	長方形	逆台形状	1.30 × 0.52 × 0.24	灰色土 他	土師	13~14世紀	
8	A4	長方形	逆台形状	1.35 × 0.68 × 0.25	灰色土 他	土師	13~14世紀	
9	A2・3	長方形	皿状	1.05 × 0.56 × 0.06	灰色土 (褐色砂混入)	土師	13世紀後半	炭化物

遺構一覽

表 31 掘立柱建物一覽

掘立	柱穴 (S P)	平面形	規 模 長径×短径×深さ (m)	埋 土	出土遺物	備 考	時 期
1	56	円形	0.36 × 0.36 × 0.20	にぶい黄橙色土	土師・須恵・石	柱痕	14世紀前半
	60	楕円形	0.50 × 0.40 × 0.14	にぶい黄橙色土	土師		
	167	円形	0.32 × 0.31 × 0.03	にぶい黄橙色土	土師		
	168	円形	0.30 × 0.30 × 0.06	にぶい黄橙色土			
	169	円形	0.34 × 0.34 × 0.13	にぶい黄橙色土	土師		
	171	楕円形	0.42 × 0.26 × 0.06	にぶい黄橙色土			
	176	円形	0.20 × 0.20 × 0.10	にぶい黄橙色土	土師		
	185	円形	0.20 × 0.20 × 0.14	にぶい黄橙色土		柱痕	
	186	楕円形	0.30 × 0.26 × 0.08	にぶい黄橙色土			
2	32	円形	0.38 × 0.38 × 0.33	にぶい黄橙色土			14世紀前半
	33	円形	0.16 × 0.16 × 0.22	にぶい黄橙色土			
	36	円形	0.22 × 0.22 × 0.25	にぶい黄橙色土	土師・瓦器		
	39	楕円形	0.40 × 0.30 × 0.14	にぶい黄橙色土	土師・陶磁器	柱痕・焼土・炭化物	
	41	楕円形	0.28 × 0.24 × 0.26	にぶい黄橙色土	土師		
	137	円形	0.24 × 0.24 × 0.28	にぶい黄橙色土			
	139	楕円形	0.26 × 0.22 × 0.16	にぶい黄橙色土	土師		
	140	円形	0.20 × 0.20 × 0.22	にぶい黄橙色土	瓦器		
	141	楕円形	0.32 × 0.16 × 0.23	にぶい黄橙色土	陶磁器		
3	204	円形	0.24 × 0.24 × 0.49	にぶい黄橙色土	土師		13世紀後半
	34	円形	0.12 × 0.12 × 0.14	にぶい黄橙色土	土師		
	37	円形	0.30 × 0.30 × 0.34	にぶい黄橙色土	土師		
	40	楕円形	0.34 × 0.20 × 0.26	にぶい黄橙色土	土師	炭化物・焼土	
	42	円形	0.18 × 0.18 × 0.19	にぶい黄橙色土	土師		
	43	円形	0.20 × 0.20 × 0.26	にぶい黄橙色土	土師・須恵	炭化物・焼土	
	135	楕円形	0.20 × 0.16 × 0.15	にぶい黄橙色土			
4	136	円形	0.16 × 0.16 × 0.33	にぶい黄橙色土			13世紀後半
	197	円形	0.20 × 0.20 × 0.10	にぶい黄橙色土			
	45	円形	0.32 × 0.31 × 0.17	にぶい黄橙色土	土師・瓦器	炭化物・焼土	
	49	楕円形	0.32 × 0.26 × 0.35	にぶい黄橙色土	土師		
	50	円形	0.32 × 0.32 × 0.42	にぶい黄橙色土	土師	炭化物・焼土	
	52	楕円形	0.58 × 0.32 × 0.14	にぶい黄橙色土			
118	円形	0.20 × 0.19 × 0.10	にぶい黄橙色土				
125	円形	0.22 × 0.21 × 0.29	にぶい黄橙色土				

表 32 S R 2 出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
1	甕	口径 (16.2) 器高 26.4	内湾口縁。口縁端部は内傾し、やや内側に肥厚する。底部は丸底。1/2の残存。	㊶ヨコナデ ㊷ハケ(9~11本/cm) ㊸ナデ	㊶ヨコナデ ㊷ナデ(指頭痕) ㊸ナデ	黄褐色 黄褐色	石・長(1~3) ◎	黒斑 煤付着	14

SR2出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
2	壺	残高 13.2	扁球形の胴部。丸底。3/4の残存。	㊦上ハケ(7本/cm) ㊦下ハケ→ナデ ㊦ハケ→ナデ	㊦上ナデ ㊦下ヘラケズリ ㊦ヘラケズリ	褐色 褐色	石・長 (1~4) 金 ◎	黒斑	14
3	高坏	口径 20.1 底径 13.2 器高 15.3	坏脚部の接合は充填技法による。2/3の残存。	㊦ハケ ㊦ハケ	㊦ナデ(ミガキ) ㊦ヘラケズリ ㊦ハケ(7本/cm)	橙色 橙色	石・長 (1~3) 金 ◎	黒斑 赤酸化土	14

表 33 掘立柱建物出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
4	坏	口径 (12.0) 底径 (7.2) 器高 3.5	体部は内湾気味に立ち上がり、口縁端部は尖り気味に丸い。1/6の残存。	㊦マメツ ㊦マメツ ㊦回転糸切り	㊦マメツ ㊦マメツ ㊦ヘラミガキ	灰褐色 灰褐色	石密 (1) ◎	赤酸化土 掘立 1 SP169	
5	坏	口径 (14.0) 底径 (10.0) 器高 3.1	体部は内湾気味に立ち上がり、口縁端部は丸い。小片。	㊦ヨコナデ ㊦ナデ ㊦ナデ	ナデ	褐色 褐色	密金 ◎	赤酸化土 黒斑 掘立 4 SP50	
6	コネ鉢	口径 (29.7) 残高 3.5	東播系須恵器。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎	掘立 1 SP56	
7	碗	底径 (5.4) 残高 1.6	青磁。胎土は灰色を呈し、内外面に淡緑色の釉薬が施されている。底部内面に唐草文あり。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎	掘立 2 SP39	

表 34 SD5出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
8	鍋	口径 (42.6) 残高 4.1	口縁部はわずかに内湾し、口縁端部は丸い。小片。	ナデ	ハケ(4本/cm)	黒褐色 暗褐色	石・長 (1~3) 金 ◎		
9	皿	口径 (8.8) 底径 (7.0) 器高 1.6	体部は内湾気味に立ち上がり、口縁端部は尖り気味。1/6の残存。	㊦ヨコナデ ㊦回転糸切り	㊦ヨコナデ ㊦ナデ	乳褐色 乳褐色	密金 ◎		
10	コネ鉢	口径 (28.0) 残高 3.8	東播系須恵器。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		

表 35 土坑出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
11	坏	口径 (11.3) 底径 7.5 器高 3.3	体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部はやや外反する。1/2の残存。	㊦マメツ ㊦マメツ ㊦回転糸切り	マメツ	褐色 褐色	密 ◎	SK1	14
12	坏	口径 13.3 底径 8.0 器高 3.6	体部は内湾し、口縁端部は尖り気味に丸い。1/2の残存。	㊦ヨコナデ ㊦ヨコナデ ㊦回転糸切り	㊦ヨコナデ ㊦ヨコナデ ㊦ナデ	乳褐色 乳褐色	石・長 (1~2) 金 ◎	SK9	14
13	皿	口径 7.2 底径 6.0 器高 1.7	体部は内湾気味に立ち上がり、口縁端部は尖り気味。1/2の残存。	㊦ヨコナデ ㊦回転糸切り	ヨコナデ	乳褐色 乳褐色	石・長 (1~2) 金 ◎	SK1	14
14	皿	口径 (8.0) 底径 6.2 器高 1.5	体部は直線的に立ち上がり、口縁端部は丸い。1/2の残存。	㊦ヨコナデ ㊦回転糸切り	ヨコナデ	乳褐色 乳黄褐色	石・長 (1~3) 金 ◎	SK4	

表 36 包含層・地点不明出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
15	鍋	口径 (37.2) 残高 6.7	片口鍋。内湾口縁。口縁端部は丸い。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	暗褐色 褐色	石・長 (1~3) ◎	第Ⅶ層	
16	土釜	残高 9.7	三足付土釜。体部は丸味をもつ。1/3の残存。	マメツ	マメツ	灰褐色 橙色	石・長 (1~3) ◎	第Ⅶ層	14
17	浅鉢	残高 4.0	小片。	マメツ	㊦マメツ ㊦ヘラミガキ	褐色 茶褐色	石・長 (1) 金 ◎	第Ⅹ層	14
18	土釜	口径 (24.8) 残高 3.8	口縁下に断面三角形の凸帯を貼付。小片。	ヨコナデ	ナデ	黒褐色 暗褐色	石・長 (1~3) 金 ◎	表採	14
19	コネ鉢	残高 5.7	東播系須恵器。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎	表採	
20	播鉢	口径 (20.2) 残高 3.9	備前焼。口縁部外面に凹線2条、口縁部内面に凹線1条と条線あり。小片。	回転ナデ	回転ナデ	茶褐色 褐色	密 ◎	表採	

第6章 松山城北郭遺跡

第1節 調査の経緯

松山城関係の調査は、調査時点では昭和59年7月に実施した松山城本丸内での土蔵遺構の確認や、同年9月から昭和62年3月までの間に実施した二之丸邸関連遺構の調査のほか、平成元年度から実施した若草町家臣屋敷地の調査などがある。

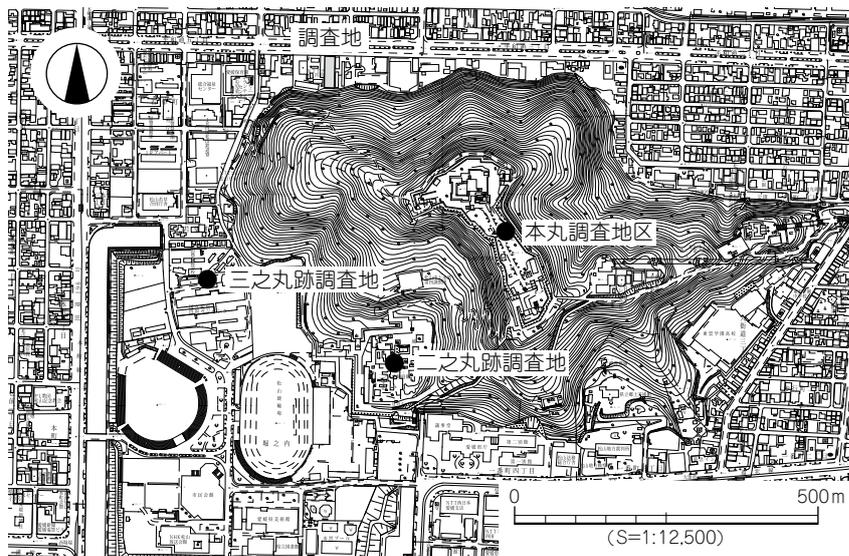
本調査地は松山市平和通四丁目1-6地内にあり、加藤嘉明によって築造された松山城北郭跡地にあたるもので、東西79間1尺(143.39m)、南北18間~32間半(32.70~58.00m)の地に高さ4間(7.27m)の高石垣があり、終戦時まで存在した場所である。

発掘調査は、昭和62年10月21日から同年10月30日までの間に実施した。

第2節 調査の概要

調査地は松山城北西部、調査地北側は平和通りに接し、南側は城山丘陵斜面に面しており、東側及び西側には既存の建物が存在する。現況の標高は、約25mを測る。なお、調査地の西側部分、幅4m、長さ25mが調査対象地である。

調査地は北郭跡の西端部にあたり、石垣基底石の14.10m分と裏込めを検出した。石垣基底石は25個分を検出し、このうち13個の基底石が原位置を留めている。基底石は御影石を使用しており、径36~94cm、厚さ42~55cmを測る。裏込めは、基底石東側部分で検出され、掘り方規模は検出長1.80m、深さ90cmを測る。埋土は三種類あり、上位より暗灰色土、黒褐色土、茶褐色土となる。なお、裏込め土内には径5~25cm、厚さ3~12cm程度の円礫が密集した状態で詰められている。



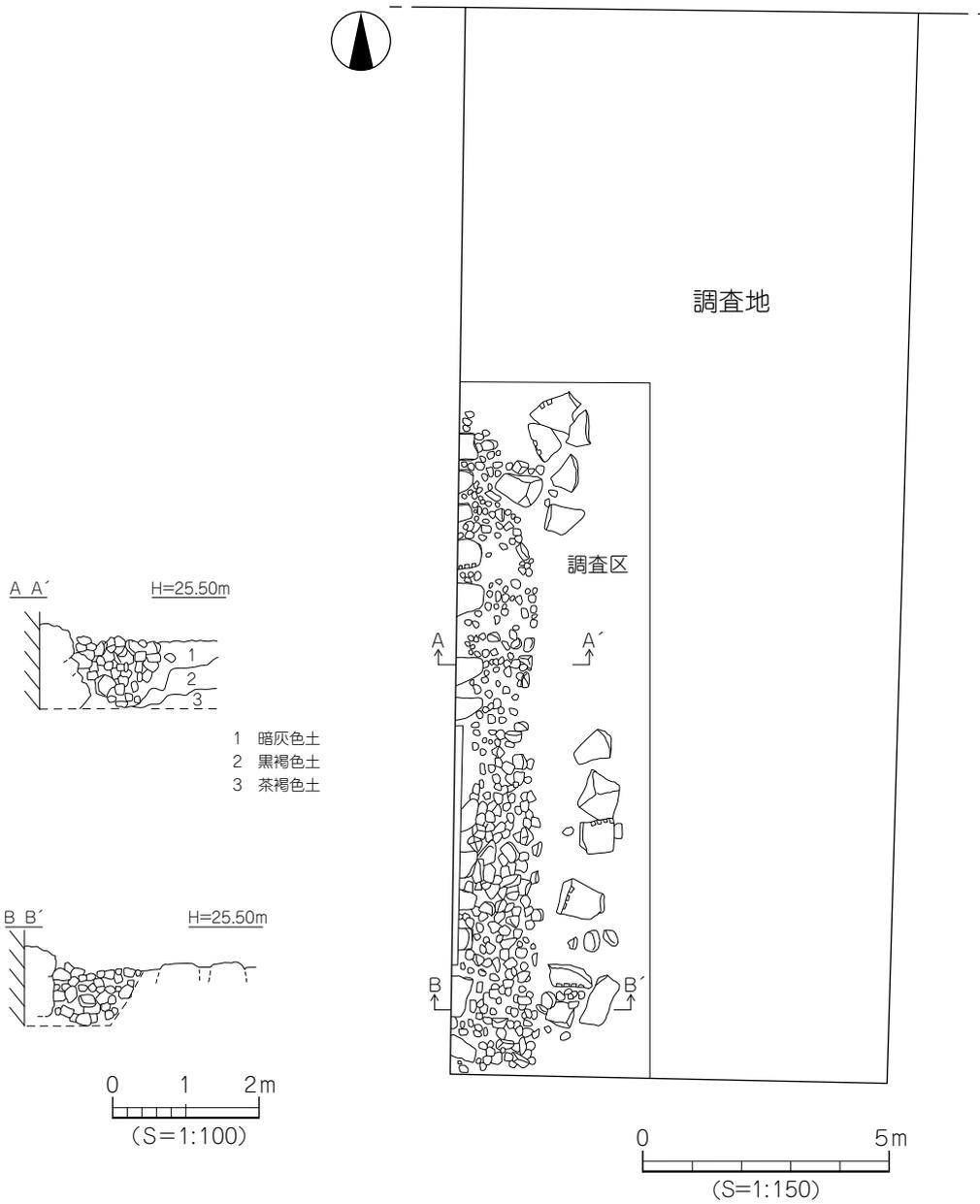
第40図 調査地位置図



第 41 図 調査区全景 (北より)



第 42 図 掘り方断面 (北より)



第 43 図 石垣測量図

第7章 松山城東郭跡

第1節 調査の経緯

1. 調査に至る経緯

平成17年12月22日、学校法人松山東雲学園（以下、学園という。）より、松山東雲学園中学高等学校本館の建て替え工事に際して埋蔵文化財確認願が提出された。当該地は、松山市指定の包蔵地「No.74 城ノ内古墳群」に位置することに加えて、松山城東郭に立地することから、試掘確認調査の実施が決定された。試掘調査は、平成18年1月16日から同23日の間に行われ、複数の礎石や廃棄土坑等を検出したことから、本格調査の必要性が認識されるに至った。その後、市教委と学園は協議を重ね、本発掘調査は財団の埋文センターによって同年3月13日より実施することとなった。

2. 調査の経過

平成18年3月13日から3日間、重機を用いて掘削作業を実施。同月20日までに、校庭から流れ込む雨水対策と土層観察のためのトレンチを掘り終え、厚い整地土層の存在を確認。基準点は業者に委託して25日に打設を終え、メッシュ杭の設置は31日までに完了した。遺構の掘削は検出作業を終えた後の28日に開始。遺構の掘削と平面図の作成を優先して行い、トレンチの土層図や個別遺構の断面図の作成は4月14日に着手した。20日に報道発表。22日（土）13:30から現地説明会を開催し、雨の中、約60名の参加を得た。埋め戻しは24・25日に行い、現場作業は26日に終了した。

その後、同年7月31日まで屋内整理作業を実施し、概要報告及び年報の原稿作成等を継続した。

3. 調査の概要

1. 遺跡名：松山城東郭跡
2. 調査期間：（屋外調査）平成18年3月9日～4月28日
（屋内整理）平成18年5月1日～7月31日
3. 所在地：松山市大街道三丁目2-24
4. 調査面積：263㎡
5. 調査目的：松山東雲学園中学高等学校本館建て替え工事に伴う本発掘調査
6. 調査主体：財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター（当時）
7. 調査担当：埋蔵文化財センター 橋本雄一

第2節 遺跡の概要

1. 遺跡の立地と歴史的環境

本調査地は道後平野の北部に立地する勝山と呼ばれる独立丘陵の東端に位置している。標高100mほどのこの丘陵は、江戸時代に松山城が築かれ、現在はそのほぼ全域が国の史跡に指定されている。

調査地が所在する学校法人松山東雲学園中学高等学校の敷地の大半は、江戸時代を通じて松山藩の家老の屋敷が置かれた東郭（ひがしのくるわ）と呼ばれていた場所に当たっている。現在も学校の正門周辺の石垣が当時のまま良好な状態で遺存しており、往時の情景を偲ぶことができる。

東郭は、勝山の尾根筋が東へ延びて形成される南東方向を正面とする幅広の谷状地形を造成して設けられている。したがって、当調査地の遺跡は、江戸時代の整地土層そのものと、これを掘り込んだ江戸時代以降の遺構と遺物によって構成される。

近世城郭の郭として設けられた敷地であったが、明治維新の後には県立病院が置かれることとなる。その後、大正年間に一時、松山赤十字病院に移管された後に、現在の学園の前身である松山女学校がこの場所に移転し、現在に至っている。この間、昭和20年7月26日の松山空襲の際には、校舎の大半が焼失する被害を被っている。再建後の木造校舎は、昭和43年竣工の本館をはじめ、順次、鉄筋コンクリート造に建て替えが進んでいくが、今回の調査はこの本館の建て替え工事に伴うものである。

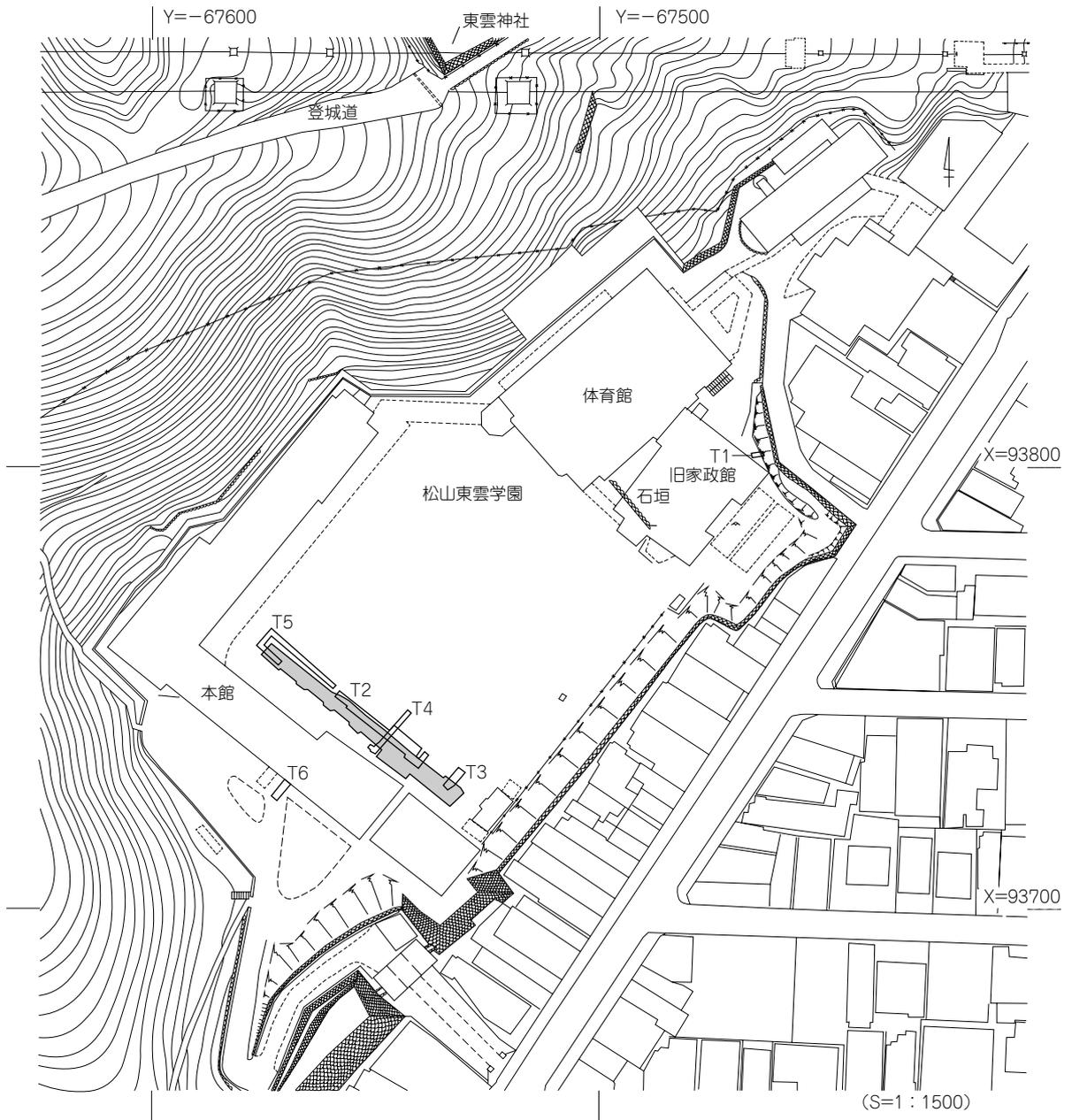
2. 成果の概要

調査区の中央部付近において、江戸時代後半の遺構が密に検出されている。長方形や円形の廃棄土坑を16基、江戸時代の石組溝2条、溝2条に加えて、明治から昭和にかけての石組溝2条のほか、試掘調査時のトレンチ（T2～T5）も含めて計10基の礎石を検出した（第45図）。

江戸時代後期の土坑のうち、SK001を除くすべては円形である。SK005、006、008、009、011、012からは、瓦の破片を主体とする遺物が出土している。少量ではあるが、18世紀後半以降の京焼系の磁器なども含まれている。SK010は明治以降の埋甕である。これらの土坑の多くが密集する中央部の北端に位置するSK004は、明治以降のガラス製薬瓶の蓋やレンガ、温度計などが出土しているが、土坑上面を掘り上げた整地土で蓋をするように埋め戻している。このように土坑については、出土遺物からおおよその時期を特定可能なものもある。

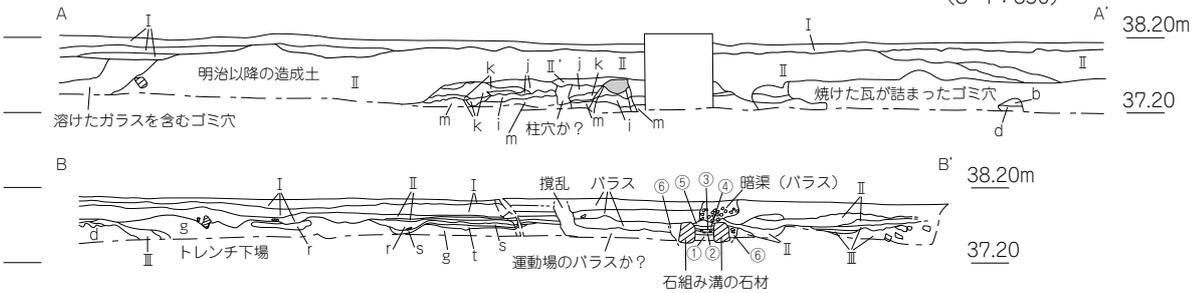
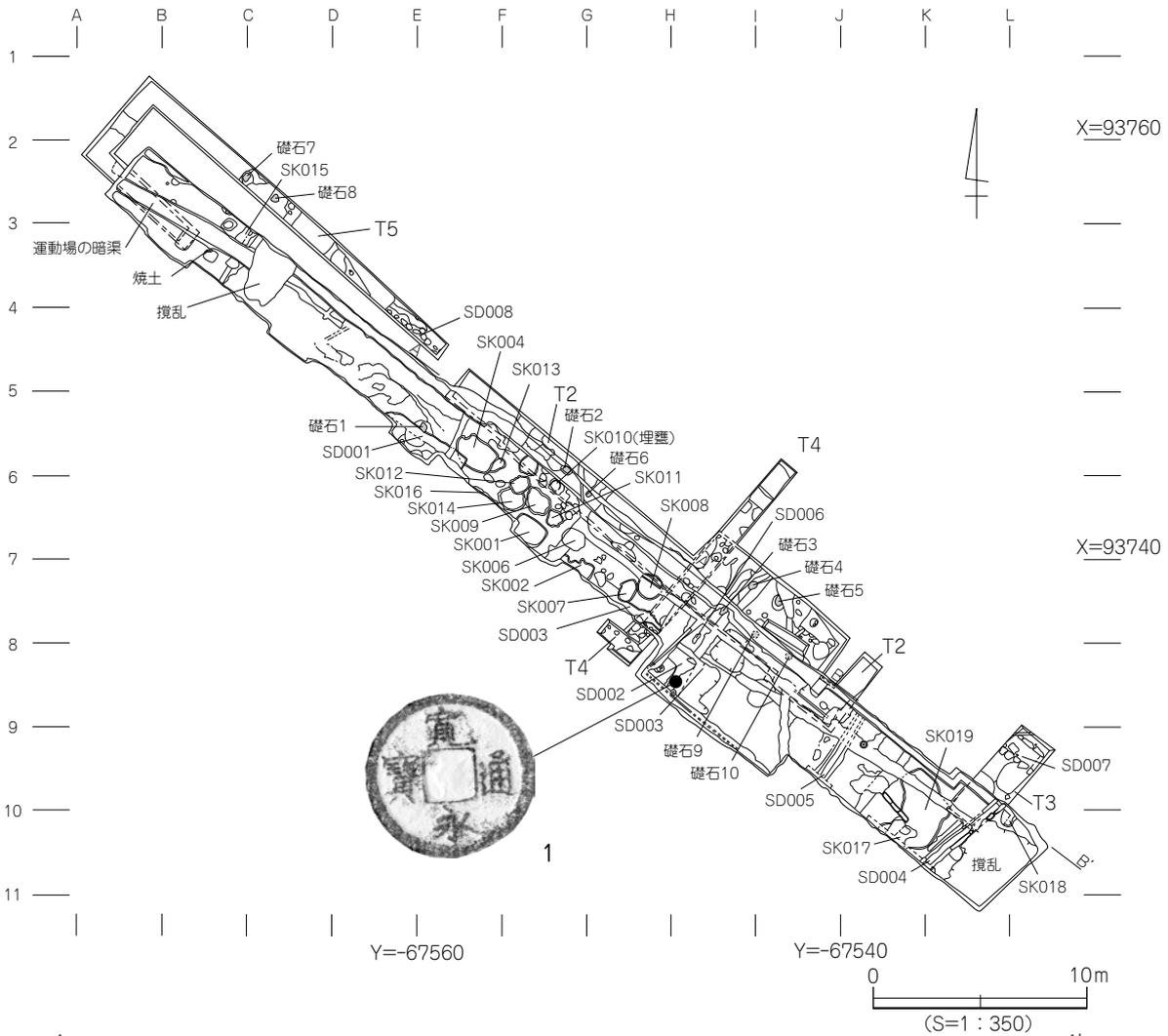
SD001と003は江戸時代後期以降幕末にかけての素掘溝SD002は同様の時期の石組溝と考えられる。石材が1石だけ遺存していた。SD004とSD005は、ともに調査区東南部に位置する石組溝である。角柱状に加工された細長い花崗岩の石材を2条平行にならべて、その間に漆喰を貼って溝としたものである。これら2条の溝については、明治20年に新築された県立松山病院の図面のほか、大正15年の図面に記載されている松山女学校の校舎や廊下の配置とよく一致している。SD004においては、昭和20年7月26日の松山空襲で被災し、廃絶した状況を読み取ることができたことから、この溝は明治20年から終戦時にかけて機能していたもので、おそらくSD005についても同様であろうと推測している。

当該調査の期間中、工事用車両の進入口として取り壊し作業が行われていた敷地東北部の家政館(第44図)跡地において、江戸時代の石垣の一部が発見された(図版18)。当初の計画では、石垣上部が進入口の掘削によって破壊される可能性があったため、市教委の文化財課が緊急に対応し、埋文センターがこれを支援した。破壊が及ぶ可能性が考えられる範囲の石垣を露出させ、業者委託による写真測量にて記録をとった。これは、伊予史談会所蔵の文久年間の絵図に描かれている石垣の一部である。上端部は既に破壊されていたが、西北端のすりつけ部(図版18-2)と現況東南端に別の石垣が接続する部分(図版18-1)、一部石材に矢穴が認められる状況や裏込めの礫の様子(図版18-3)などが明らかにされている。



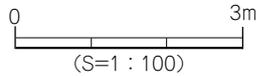
第44図 松山城東郭位置図

松山城東郭跡



- | | | |
|------|--------------------|---|
| I | 灰褐色砂質土(7.5YR 6/2) | 運動場の真砂。ところにより2層以上に区分けされる。 |
| II | 褐色砂質土(10YR 6/2) | 明治時代以降の整地土層。江戸時代の礎石の直上、遺構面をおおう土層。径5~30mmの風化礫と地山の塊を30~40%含む。 |
| II' | 褐色粘質土(10YR 6/2) | 明治以降の整地土。礎石2の上面をおおう。IIと比べるとゴミが少ない。 |
| II-b | 褐色粘質土(10YR 5/1) | 整地土層。調査地の中央部に分布。風化砂岩片を1~5%含む。 |
| II-d | 灰黄褐色粘質土(10YR 5/2) | 整地土層。bより明るい。径5~50mmの風化礫を30%含む |
| II-j | 灰黄褐色粘質土(10YR 5/2) | 江戸時代の整地土層。 |
| II-k | 明黄褐色粘質土(10YR 7/6) | 整地土層。褐色土30%。 |
| II-l | 灰黄褐色粘質土(10YR 5/2) | 整地土層。地山5%。 |
| II-m | 明黄褐色粘質土(10YR 7/6) | 整地土層。褐色土40%。 |
| II-q | 暗灰黄色粘質土(2.5YR 5/2) | 地山5%。 |
| II-r | 暗灰黄色粘質土(2.5YR 5/2) | 地山30%。 |
| II-s | 黄灰色粘質土(2.5YR 5/1) | 地山5%。 |
| II-t | 暗灰黄色粘質土(2.5YR 5/2) | 地山80%。 |

- | | | |
|---|-------------------|----------------------|
| ① | 灰黄褐色粘質土(10YR 5/2) | 漆喰の下の土。漆喰面の高さ調整か? |
| ② | にぶい黄橙色土(10YR 7/4) | 石組溝の底の漆喰の層。上面にガラス破片。 |
| ③ | 黒色炭化物(10YR 2/1) | 炭等の炭化物の層。 |
| ④ | 明赤褐色土(2.5YR 5/8) | 焼土。 |
| ⑤ | 褐色土(7.5YR 4/1) | 炭化物混入。石組溝内における最上層。 |
| ⑥ | 灰黄褐色粘質土(10YR 5/2) | 瓦、礫混入。石組溝の裏込めの土か? |



第 45 図 遺構配置図・土層図

3. 層 位

敷地東南の縁辺に石垣を構築しながら造成されたこの敷地においては、深掘りを行った箇所においても基盤層には到達していない。厚く盛り付けられた江戸時代の整地土層に対してすべての遺構が掘り込まれている。整地土は概ね水平に積まれているが、調査区の東南端、つまり敷地の正面の石垣に近い箇所は、南東方向に落ち込む状況が確認されている。元の地形が低い敷地東南部において、より大量の客土が必要とされたものとみられる。

江戸時代の整地土（Ⅲ層）は大きく2種類に区分される。おそらく城郭全体の構築にあわせて削られた勝山そのものの土砂と考えられる砂岩混じりの黄色土と、地表面付近の腐食土である。

検出された礎石は、江戸時代の整地土上面から僅かに頭を出す程度に埋められており、この上に厚さ0.3～0.4m程度のごみ混じりの汚れた整地土（Ⅱ層・Ⅱ層）が置かれている。この土層は、明治以降に病院を建設もしくは改築した際などに盛り付けられたものと考えている。

明治以降の整地層のさらに上位に真砂による運動場の土層が存在する。空襲で生じたごみを埋めた穴には真砂は入っていないことから、戦後、学校施設の復興が成る昭和26年頃よりも後に運動場の本格的な整備が行われたものとみられる。運動場の水捌けを良くするために重機で掘られた暗渠状の溝も複数確認されている。

基本土層の観察結果は、第45図に調査区東北壁中央部付近の概略を示した（Ⅰ～Ⅲ層）。

第3節 遺構と遺物

1. 江戸時代の遺構と遺物

(1) 廃棄土坑

江戸時代後期から幕末にかけての廃棄土坑は、SK001～003、005～009、011～014、016、017、の計14基である。これらを代表してSK001の報告を行う。

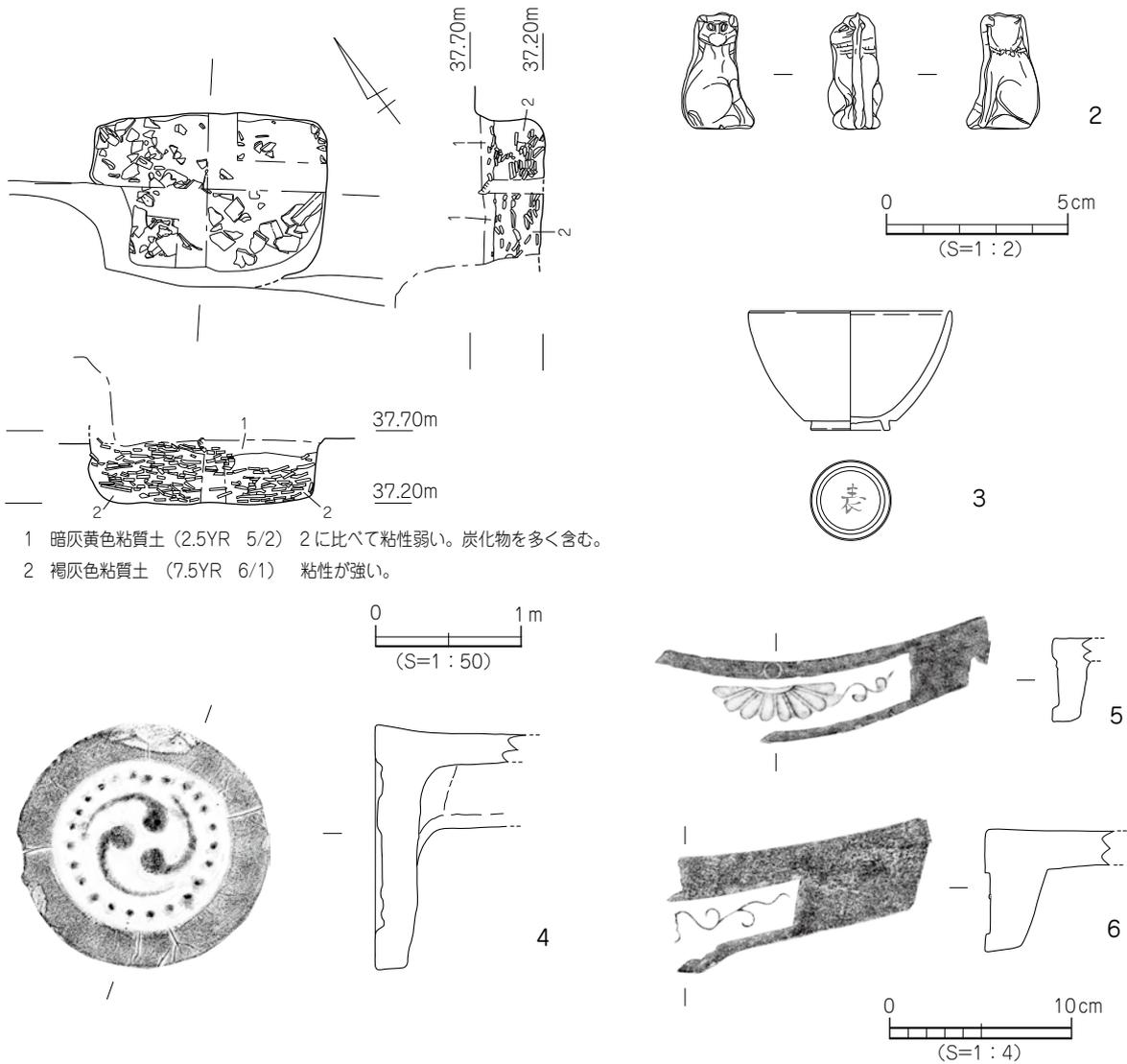
SK001（第46図、図版17-4）

調査区中央部に位置する隅丸長方形の土坑。一辺約1.6m×1.2m、深さ約0.4m。江戸時代の整地土層であるⅢ層の上面で検出された。大量の瓦片と瓦を葺く際に用いられた可能性が高い粘土が投棄されていた。瓦が密集している下部の埋土は褐灰色粘質土（7.5YR6/1）、密度が低い上部は暗灰黄色粘質土（2.5Y5/2）で構成されている。

出土遺物 2は土製素焼の犬と思われる玩具。粘土を型に入れて作っている。3は京焼系の磁器碗で、底部に「表」の文字が墨書されている。屋敷内の奥向きではなく、表で使用されたものであろうか。

4～6は軒瓦である。これらの瓦の表面には、離れ砂に混入された雲母が多く認められることから、江戸時代後半以降のものと考えている。

時 期：江戸時代後半以降、幕末頃のものと考えられる。



第 46 図 SK001 測量図・出土遺物実測図

(2) 溝

江戸時代後期から幕末にかけての溝は、SD001～SD003 の計 3 条である。

SD001 (第 45 図、図版 16-1)

調査区中央部やや北西寄りに位置する素掘溝。検出長約 4.5m、幅 0.6m 弱、深さ 15～18cm。中央南東寄りに位置する SD003 の北西延長線上に一致することから同一の溝かもしれない。東南端を明治期の廃棄土坑である SK004 に切られている。この場所で直角に折れ曲がって、調査区外南西方向に続く可能性がある。

埋土は暗灰黄色土 (2.5Y5/2) で、整地土層に由来する地山の土を 30% ほど含む。径 10～20cm 程度の円礫、角礫がぎっしり詰まった状態で検出されているが、暗渠ではないと判断している。

出土遺物 瓦片が少量出土した。

時期：埋土の性質や検出のされ方、出土遺物の状況から、江戸時代後半以降、幕末頃のものと考えられる。

SD002 (第 45 図、図版 16 - 4)

調査区中央部南東寄りに位置する石組溝。鈍角に屈曲して調査区外の南西に続く。北西方向にも続くようであるが、西南壁沿いであることから詳細は不明である。溝本体の幅は約 0.9m、石材の間の水が流れた溝底の幅は 0.2 ~ 0.25m 程度とみられる。遺存している石材は 1 石のみで、この場所は溝の東南角屈曲部にあたる。付近の溝底には、石材を抜き取った痕跡が確認されている。

出土遺物 確実にこの溝から出土している遺物は、黒色の石製碁石 3 点 (図版 18 - 4) のほか、屈曲部から南西に向かう付近で出土した 5 枚の古銭がある。なお、古銭の詳細は小結にて報告する。

時 期：江戸時代後半以降、幕末頃のものと考えられる。

SD003 (第 45 図、図版 16 - 4)

調査区中央部南東寄りに位置する素掘溝で、SD002 にほとんど接している。この溝も、SD002 と同様に屈曲して南西方向に続く可能性が高い。検出長は約 7m を測る。溝幅は東南部で約 0.2m、西北部で約 0.5m、深さは東南部で 5 ~ 10cm 程度。埋土は黄灰色粘質土 (2.5Y5/1) である。

出土遺物 若干の近世陶磁のほか、火箸が 1 本出土している。このほか、素焼きの碁石 1 点が出土している。なお、このほかの石製で黒色の碁石 5 点と素焼きで赤褐色の碁石 2 点については、この溝から出土したものであるのか、近接する SD002 出土であるのか峻別することはできなかった。

時 期：江戸時代後半以降、幕末頃のものと考えられる。

(3) 礎 石

試掘調査時に検出されたものも含めて計 10 基確認された礎石については、江戸時代後期から幕末にかけての家老屋敷のもので、明治 20 年の県立病院改築まで使われたものと推測しているが、確証は無い。江戸時代の整地土層上面から若干頭を出す状態に埋め込まれているものは礎石 1 ~ 3 の計 3 基のみで、このほかについての詳細は明らかではない。

礎石 1 (第 45 図、図版 16 - 1)

調査区中央部北寄りの SD001 と接する位置で検出された礎石で、Ⅲ層上面から若干頭を出す位置に埋め込まれている。長辺 0.36m × 短辺 0.32m の不整形。

礎石 2 (第 45 図、図版 16 - 3)

明治時代の埋甕である SK010 に近接する位置の礎石で、Ⅲ層上面から若干頭を出す位置に埋め込まれている。長辺 0.30m × 短辺 0.26m の長方形。

礎石 3 (第 45 図、図版 16 - 4)

調査区中央部南寄りの東北壁沿いに位置する礎石で、Ⅲ層上面から若干頭を出す位置に埋め込まれている。長辺 0.48m × 短辺 0.30m の不整形。

2. 明治以降の遺構と遺物

(1) 土 坑

明治以降の土坑であることが判明しているのは、医療廃棄物が埋められていたSK004（第2節の2参照）と、調査区西北部に位置するSK015のほか、便槽を埋めたSK010の計3基である。

SK010（第47図、図版16-6）

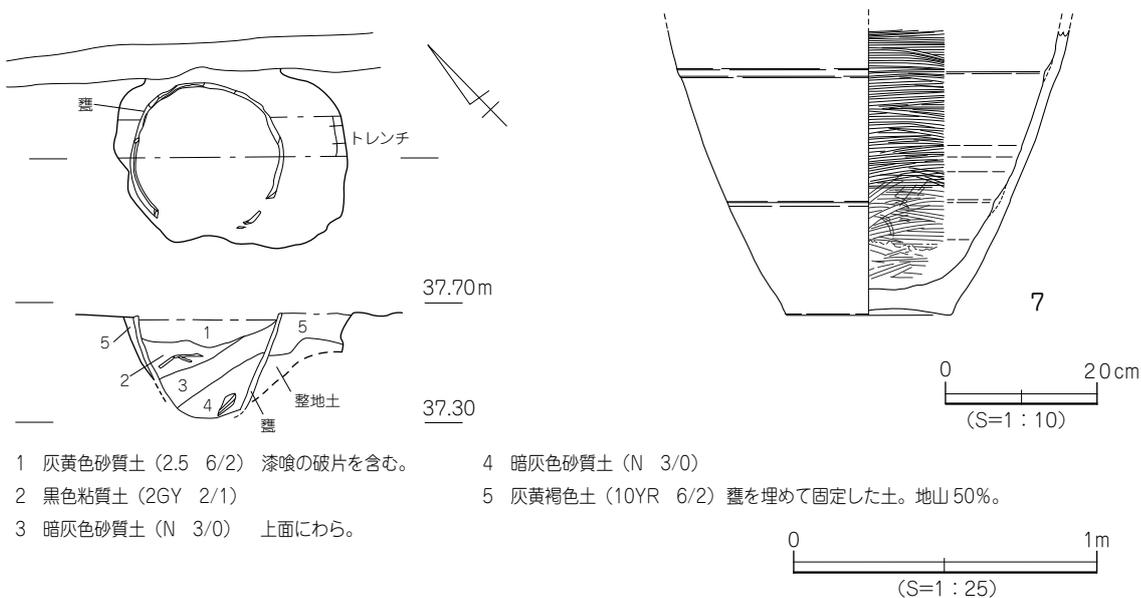
調査区中央部に位置する、甕を埋めて便槽とした土坑。土坑の規模と形状は、約0.7m×0.6m、深さ約0.1～0.3mの不整長方形である。江戸時代の整地土層であるⅢ層上面で検出された。

土坑の埋土は灰黄褐色土（2.5Y6/2）。埋甕の内部については、下部は暗灰色砂質土（N3/0）、中間に排泄物と考えられる黒色粘質土（2.5GY2/1）、上部に灰黄色土（2.5Y6/2）が、斜めに堆積している。中層上面には、跳ね返りを防ぐための藁が敷かれていた。

出土遺物 7は便槽として使用されていた甕である。下半部しか遺存していない。外見上は江戸時代後半の備前焼に近いが、断面の色調が赤いことから、明治以降のものである可能性が高いと考えている。

埋甕の中層から医療廃棄物もしくは実験器具に加えて、太めの蛍光管の残骸と水銀が少量出土している。便所を埋める際にごみが捨てられたのであろう。

時 期：蛍光管は戦前にも存在したものであるが、明治のはじめにまで遡るものではない。昭和12年にアメリカのゼネラル・エレクトリック社から発売され、日本での正式な発売は、東京芝浦電気から昭和16年のことであった。したがってこの埋甕は、明治以降に設置され、県立松山病院から私立松山女学校・松山東雲高等女学校時代のいずれかの時期に使用された可能性が高い。廃絶したのは昭和20年7月26日の松山空襲後のことと考えられる。



第47図 SK010 測量図・出土遺物実測図

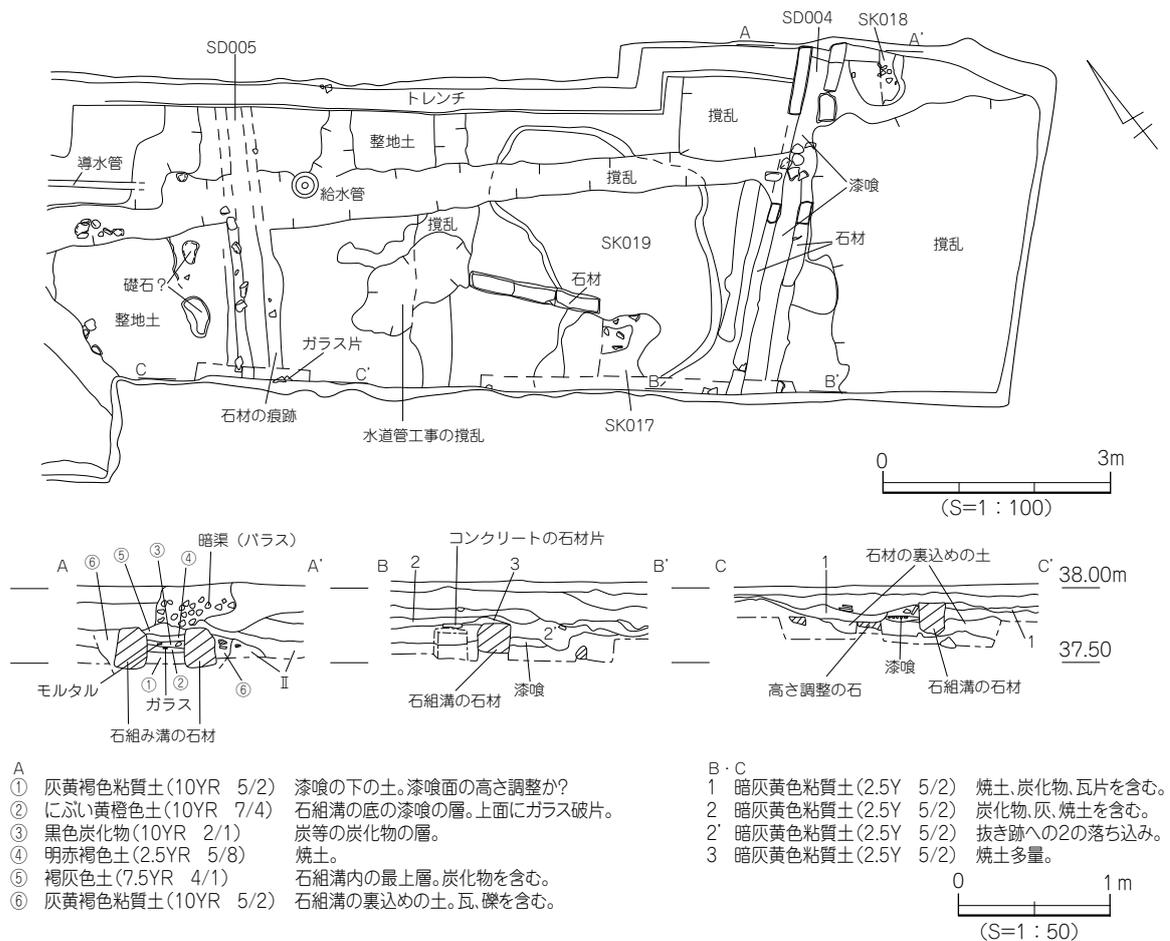
(2) 溝

明治以降の溝であることが判明しているのは、石組溝である SD004 と SD005 である。ともに調査区西南部に位置している。

SD004 (第 48 図、図版 17-5・6)

調査区東南部にて検出された 2 条の石組溝のうち、南側の溝。角柱状に加工された石材を 2 条平行にならべて、その間に漆喰を貼って溝としたものである。石材の一部は後世の攪乱によって失われたり、元の位置を離れた状態で検出されている。幅 0.2m × 高さ 0.25m、長さ 1.8 ~ 2m ほどの角柱状に加工された花崗岩を 0.24m 程度離して平行に並べて埋め込み、その間に厚さ 4 ~ 5cm ほどの漆喰を貼っている。漆喰の色調は、にぶい黄橙色 (10YR7/4) で、硬く締まっている。その下部に厚さ 7 ~ 8cm ほどの灰黄褐色粘質土 (10YR5/2) が水平に詰め込まれているが、これは漆喰に対する裏込めの土であると考えられる。

漆喰の上面に窓ガラスの破片と思われるガラス片が散乱する状況が確認されている。また、これの直上には、厚さ 2 ~ 4cm の黒色炭化物 (10YR2/1) が堆積し、さらにその上には、焼土である厚さ 4 cm 程度の明赤褐色土 (2.5YR5/8) が溜まっている。ところによっては、さらにこの上に、炭化物を含む褐灰色土 (7.5YR4/1) が分布する場所もある。



第 48 図 SD004・SD005 と西南部の土坑測量図

出土遺物 ガラスの破片以外の遺物は出土していない。窓ガラスのような薄いガラスで割れ口は鋭く、熱によって溶けた状況は認められない。

時期：石組溝の底を漆喰で固める技法は、松山城堀之内地区における江戸時代後半以降の溝においても認められている。これらの溝は、後の時代にも継続して使われることが多く、明治以降にモルタルで固めている場合もあるようである。なお、今回検出した石組溝は、明治20年の県立松山病院の状況を記録した図面のほか、この施設を引き継いだ松山女学校の大正15年の見取図にも記載されている。これらの図によれば、この石組溝は、病院の段階に病棟として使われ、その後、数学教室や国語教室が設けられた二階建て建物の北側を東西に結ぶ廊下の北辺に一致している。なお、大正15年の図面にかかっている建物は、その後、昭和20年7月26日の松山空襲の際に焼失する建物であると判断されることから、先に説明した溝の断面における土層の堆積状況は空襲によるものと考えている。焼夷弾による爆風で飛び散ったガラス片の上に、校舎が崩れ落ちたものであろう。石材の表面が焼け焦げて剥離している状況も認められているが、このことも空襲による火災の事実と符合する。以上の状況から、この溝は、明治20年ごろに造られ、松山空襲の際に廃絶した施設であって、江戸時代にまでその起源が遡る可能性は無いものと判断している。この評価は、隣接するSD005についても同様である。

SD005（第48図、図版16-1）

調査区の東南部で検出された2条の石組溝のうち、北側の溝。角柱状に加工された石材を2条平行にならべて、その間に漆喰を貼って溝としたものである。石材のほとんどは、後世の攪乱によって失われている。詳細は前述のSD004と全く共通であるが、この溝の方位は大きく西に降っている。これは、県立松山病院や私立松山女学校の図面によると、販売部や習画室が置かれた別棟の建物の南辺の位置に対応する。

第4節 小 結

SD002出土の銭について簡単にまとめておく。西暦は初鑄年である。銭のうち、聖宋元寶（北宋、西暦1101年）、元符通寶（北宋、西暦1098年）、皇宋通寶（北宋、西暦1039年）、天禧通寶（北宋、西暦1018年）各1枚と、聖宋元寶と鏽でくっついた状態にあるため銭名が判読不能のものが1枚である。溝を埋めた客土中に、古い時代の墓に供えられていた六道銭（六文銭）が混入したもので、江戸時代の遺構と直接の関係はないものとする。

参考文献

- 『松山市史』第二巻 近世（附図） 1993年
- 『松山東雲学園100年のあゆみ』 1986年
- 『松山東雲学園百年史—資料編一』 1986年
- 陸原 保『改訂版 東洋古銭価格図譜』 1970年 万国貨幣洋行

第8章 調査の成果と課題

今回報告します6遺跡の調査では、縄文時代から近世までの遺構や遺物を確認した。ここでは、時代別に概要をまとめる。

(1) 縄文時代

縄文時代の遺構は未検出であるが、道後城北 RNB 遺跡と道後北代遺跡からは該期の遺物が出土した。特に、道後城北 RNB 遺跡からは、縄文時代後期や晩期の遺物が層位的に検出された。本調査検出の第9層中からは刻目凸帯文土器を主体とする晩期後葉、第10層中からは後期中葉に時期比定される土器が数多く出土した。第9層出土品は北部九州編年の夜臼Ⅱ a 式に相当し、第10層出土品には四ツ池式や津雲 A 式、彦崎 K1・K2 式に相当する土器が含まれている。これらの資料は現在、松山平野における縄文土器編年の指標となっている。

(2) 弥生時代

文京遺跡 29 次調査や土居窪Ⅲ遺跡からは、弥生時代中期から後期の遺構・遺物を確認した。文京遺跡 29 次調査では、弥生時代中期後葉から後期前葉の遺構を検出した。中期後葉では貯蔵穴と考えられる土坑、後期前葉では堅穴建物が検出され、調査地内に該期の集落が存在していたことが判明した。なお、地形の状況より本調査地が道後城北地区における弥生集落の南端に位置するものと推測され、同地域の集落範囲が知れる貴重な成果が得られた。一方、土居窪Ⅲ遺跡では包含層中より弥生時代前期から後期の土器が出土したほか、中期後葉から後期前葉の溝を検出した。調査地が所在する祝谷丘陵では、環濠と思われる巨大溝や 200 基を超える貯蔵穴群の検出など該期の遺跡が多数検出されている。近年の調査・研究では、弥生時代中期中葉を中心とする集落が丘陵上に広範囲に展開していることが明らかになりつつあり、本遺跡も集落の一部に含まれるものと考えられる。

(3) 古墳時代～古代

道後北代遺跡では、古墳時代中期の自然流路を検出した。流路内からは遺存状況の良好な土器が出土している。古代の遺構は未検出であるが、文京遺跡 29 調査や道後北代遺跡より該期の遺物が少量出土している。

(4) 中世

道後北代遺跡からは、鎌倉時代から室町時代にかけての掘立柱建物址や土坑のほか、農耕に伴う溝や足跡が検出された。調査地北側にある道後今市遺跡 9 次調査では 13 世紀代の水田址が発見されていることから、調査地や近隣地域には当時、農村的な集落が営まれていたものと推測される。これら

のことから、今回の調査成果は道後城北地区東部地域における中世集落の様相や変遷を解明する貴重な資料である。

(5) 近世以降

松山城北郭遺跡や松山城東郭跡からは、松山城築造に伴う石垣址や石組溝などが検出された。とりわけ、東郭跡からは江戸時代後期から幕末にかけて存在した家老屋敷に伴う礎石のほか、溝や瓦を主体とした廃棄土坑が検出されている。なお、同調査からは、明治時代以降の土坑（便槽）や石組溝も発見されている。現在、松山城関連の調査は継続的に実施されており、これらの調査成果は当時の状況を知る貴重なものであり、今後の調査・研究に役立つ重要な資料といえよう。

【参考文献】

- ① 松山市史料集編集委員会 1996 「松山市史料集 第2巻考古編Ⅱ」
- ② 吉本 拓 1986 「湯之町廃寺」「内代廃寺」愛媛県史 資料編考古
- ③ 宮本 一夫 1990 「文京遺跡8・9・11次調査」愛媛大学埋蔵文化財調査報告Ⅱ
- ④ 宮本 一夫 1991 「文京遺跡10次調査」愛媛大学埋蔵文化財調査報告Ⅲ
- ⑤ 相原 浩二 1991 「若草町遺跡」松山市埋蔵文化財調査年報Ⅲ
- ⑥ 宮崎 泰好 1991 「祝谷六丁場遺跡」松山市文化財調査報告書第24集
- ⑦ 梅木 謙一 1991 「松山大学構内遺跡」松山市文化財調査報告書第20集
- ⑧ 梅木 謙一 1992 「道後城北遺跡群」松山市文化財調査報告書第30集
- ⑨ 梅木 謙一 1994 「道後城北遺跡群Ⅱ」松山市文化財調査報告書第37集
- ⑩ 眞鍋 昭文 1995 「持田町三丁目遺跡」埋蔵文化財発掘調査報告書第58集
- ⑪ 宮内 慎一 1995 「松山大学構内遺跡Ⅱ」松山市文化財調査報告書第49集
- ⑫ 眞鍋 昭文 1995 「愛媛県立松山北高等学校遺跡埋蔵文化財調査報告書2」埋蔵文化財発掘調査報告書第55集
- ⑬ 中野 良一 1998 「湯築城跡」埋蔵文化財発掘調査報告書第66集
- ⑭ 梅木 謙一 1998 「松山大学構内遺跡Ⅲ」松山市文化財調査報告書第68集
- ⑮ 宮内 慎一 1999 「岩崎遺跡」松山市文化財調査報告書第71集
- ⑯ 眞鍋 昭文 2002 「祝谷畑中遺跡」埋蔵文化財発掘調査報告書第101集
- ⑰ 田崎 博之 2004 「文京遺跡Ⅲ」愛媛大学埋蔵文化財調査報告Ⅻ
- ⑱ 吉田 広 2005 「文京遺跡Ⅳ」愛媛大学埋蔵文化財調査報告ⅩⅤ
- ⑲ 相原 浩二 2007 「松山大学構内遺跡Ⅳ」松山市文化財調査報告書第115集
- ⑳ 宮内 慎一 2008 「道後湯月町遺跡・道後湯之町遺跡」松山市文化財調査報告書第123集

写真図版

写真図版 1 ～ 6 : 道後城北 RNB 遺跡

写真図版 7 ～ 9 : 文京遺跡 29 次調査

写真図版 10 ・ 11 : 土居窪Ⅲ遺跡

写真図版 12 ～ 14 : 道後北代遺跡

写真図版 15 ～ 18 : 松山城東郭跡

写真図版データ

1. 遺構は、主な状況については、4×5判や6×7判の白黒ネガフィルム・カラーリバーサルフィルムで撮影し、35mm判フィルムカメラ・デジタルカメラで補足している。一部の撮影には高所作業車・やぐらを使用した。

使用機材：

カメラ	トヨフィールド 45A	レンズ	スーパーアンギュロン 90mm他
	アサヒペンタックス 67		ペンタックス 67 55mm他
	ニコンニュー FM 2		ズームニッコール 28～85mm他
フィルム	白黒 ネオパン SS・アクロス		

2. 遺物は、4×5判で撮影した。すべて白黒フィルムで撮影している。

使用機材：

カメラ	トヨビュー 45G
レンズ	ジンマー S 240mm F 5.6 他
ストロボ	コメット /CA32・CB2400
スタンド等	トヨ無影撮影台・ウエイトスタンド 101
フィルム	ネオパンアクロス

3. 単色図版は、一部を除き、白黒プリントを等倍で使用できるように焼き付けている。

使用機材：

引伸機	ラッキー 450MD・90MS
レンズ	エル・ニッコール 135mm F5.6A・50mm F2.8N
印画紙	イルフォードマルチグレードIV RC ペーパー

4. 製 版：写真図版 175 線
印 刷：オフセット印刷
用 紙：マットコート 76.5kg

【参考】『埋文写真研究』 vol.1～20・『報告書制作ガイド』『文化財写真研究』 vol.1～4

[大西 朋子]



1. 調査地全景（南西より）



2. 東壁土層（北西より）



3. 第6層上面遺構検出状況（北より）



4. 柱穴検出状況（北西より）



5. 第10層掘削状況（北より）



1. 第9層遺物出土状況（北より）



2. 第9A層遺物出土状況（南より）



3. 第9B層遺物出土状況①（北より）



4. 第9B層遺物出土状況②（北より）



5. 第10A層遺物出土状況①（北より）



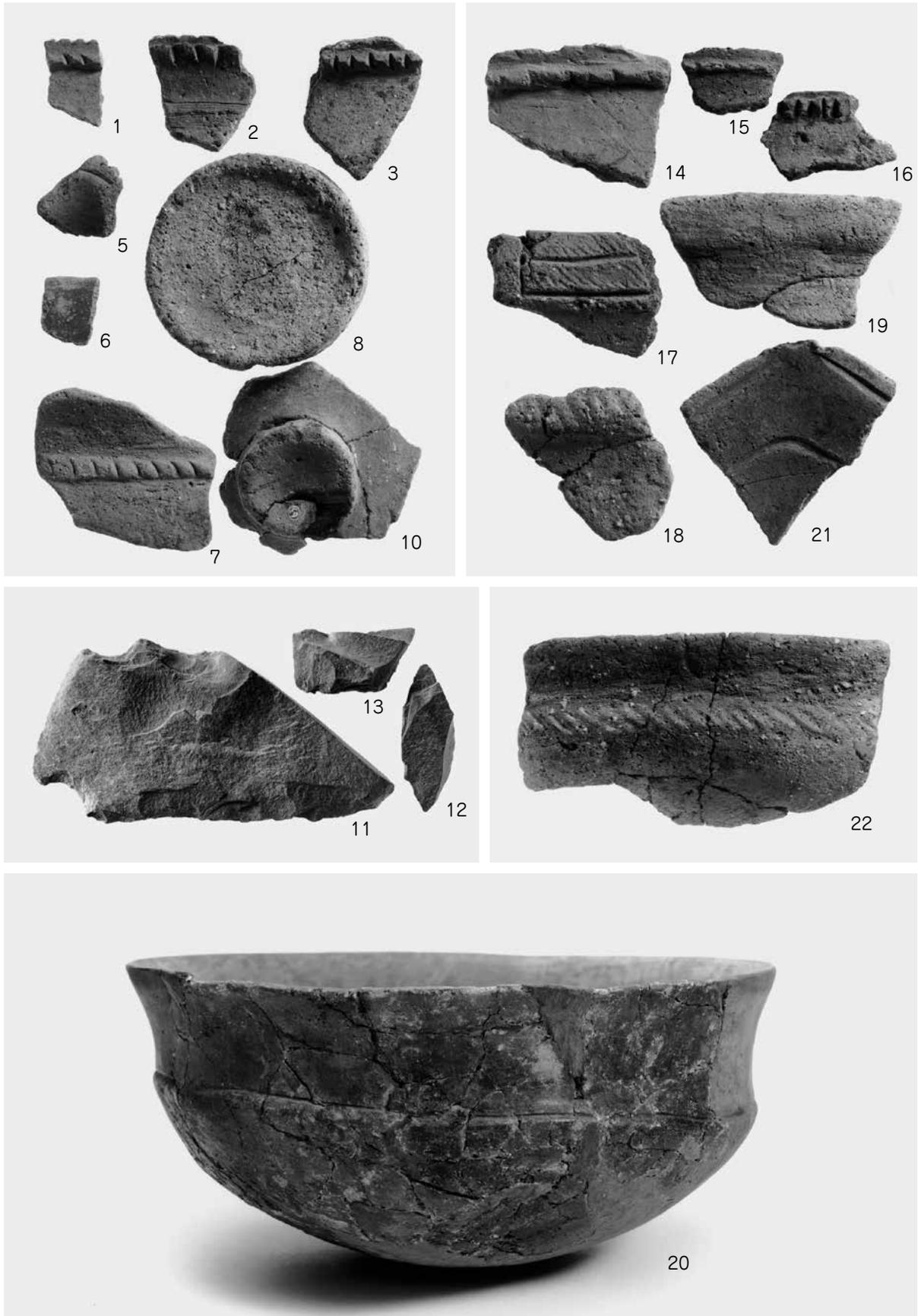
6. 第10A層遺物出土状況②（北より）



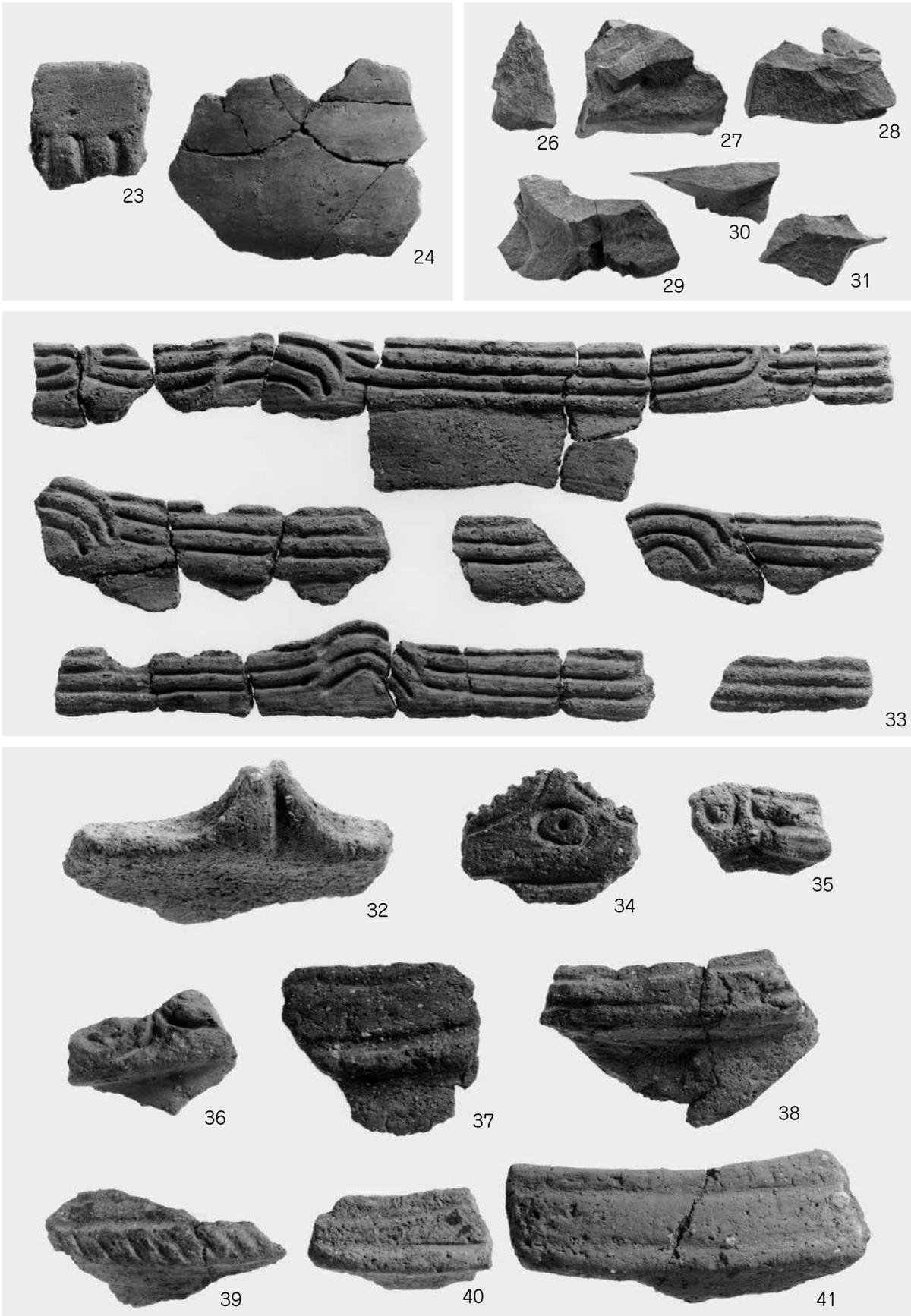
7. 第10A層遺物出土状況③（北より）



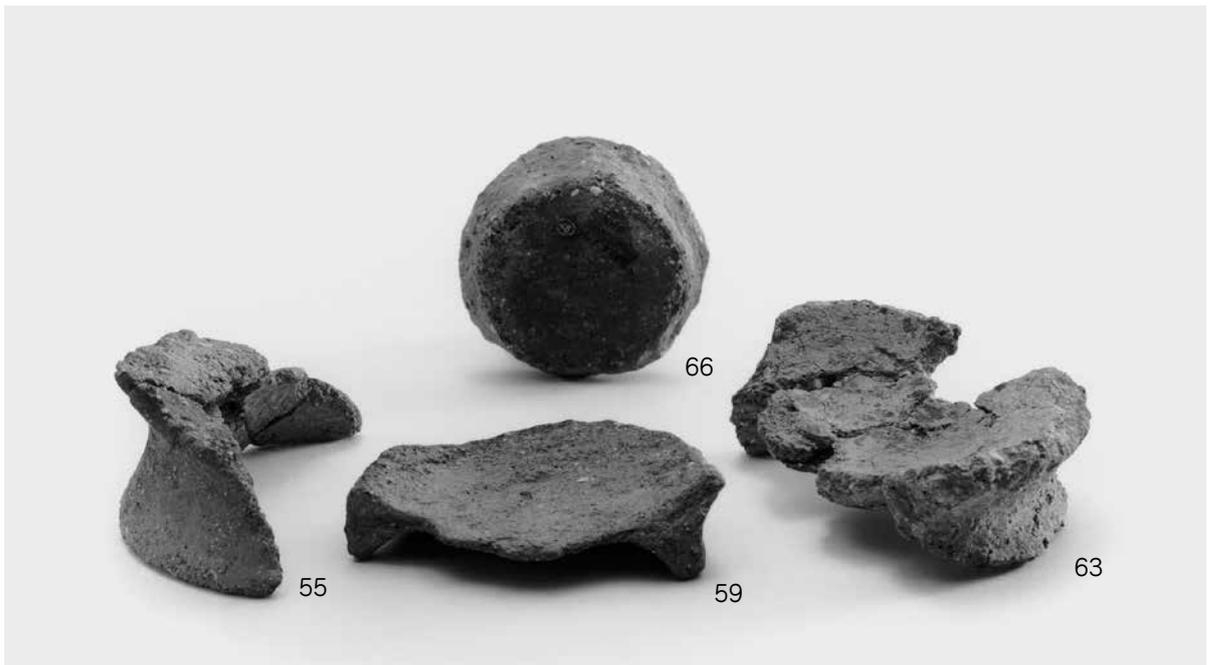
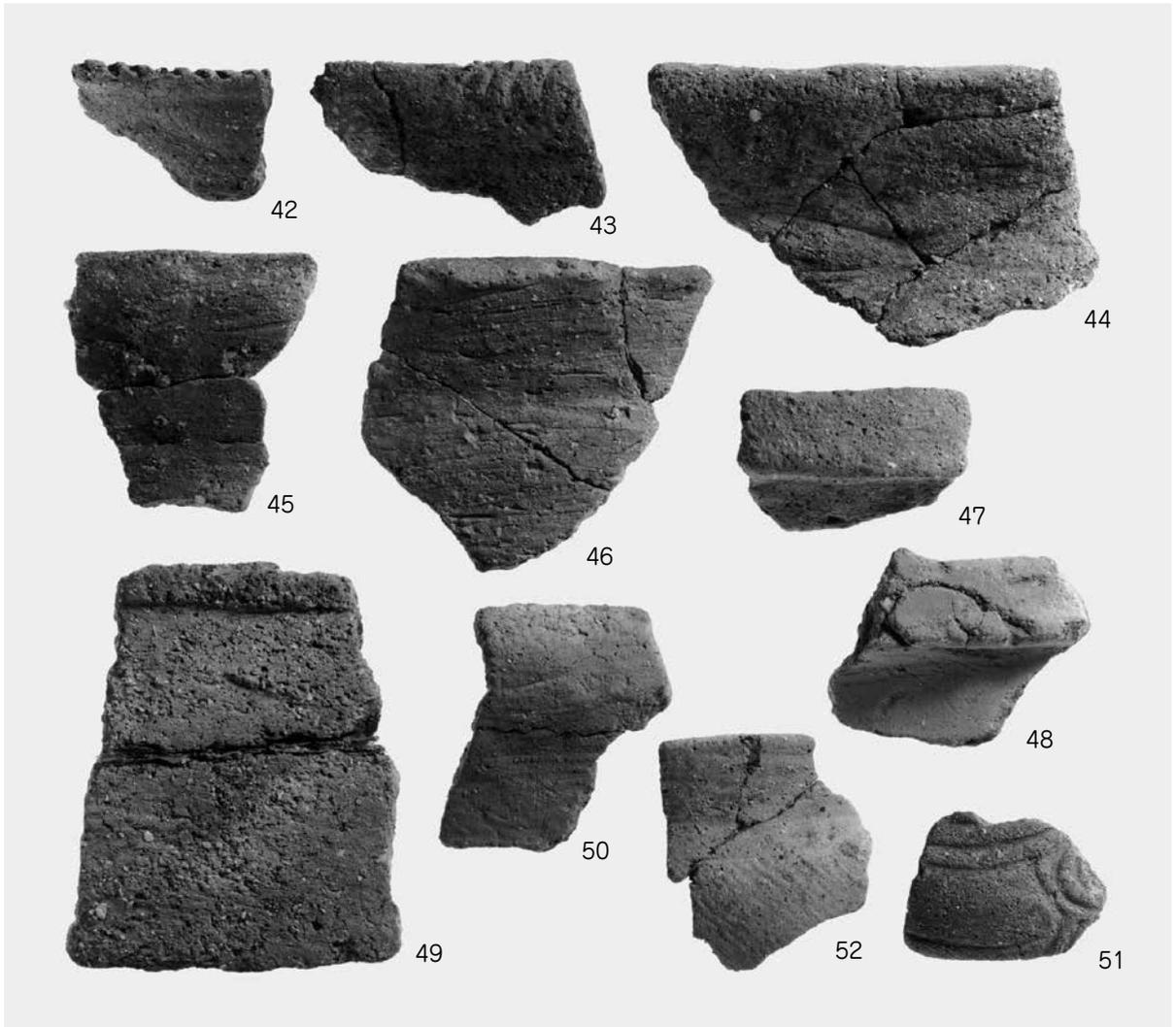
8. 第10A層遺物出土状況④（北より）



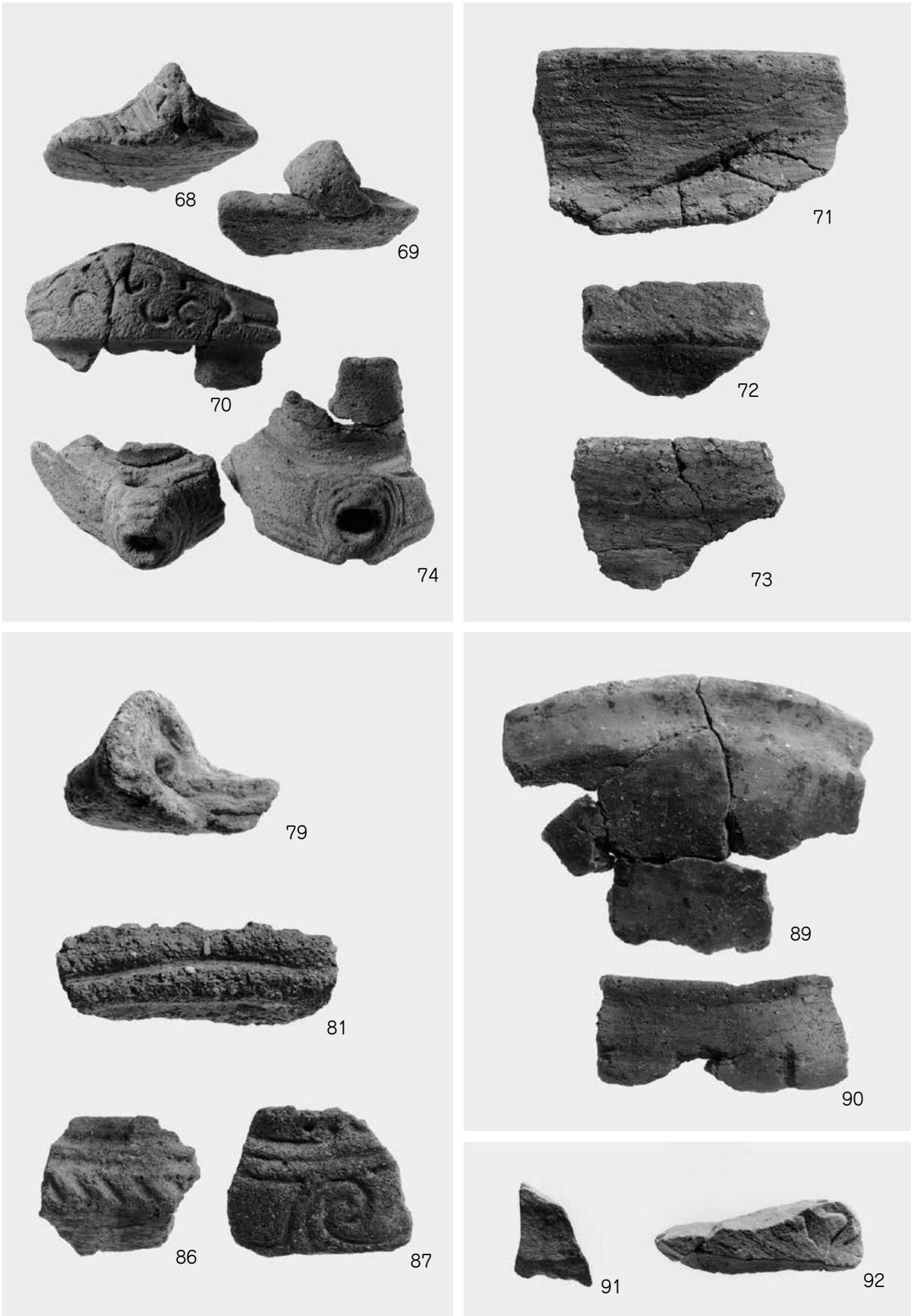
1. 出土遺物 (第9A層: 1~3・5~8・10~13、第9B層: 14~22)



1. 出土遺物 (第9B層: 23・24・26～31、第10A層: 32～41)



1. 第10 A層出土遺物



1. 出土遺物 (第10 B層 : 68 ~ 74、第10 A層または第10 B層 : 79・81・86・87・89 ~ 92)



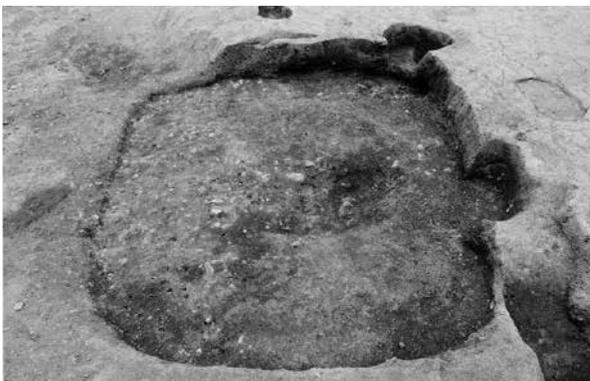
1. 調査地全景 (南西より)



2. 東半部遺構検出状況 (西より)



3. 西半部遺構検出状況 (南より)



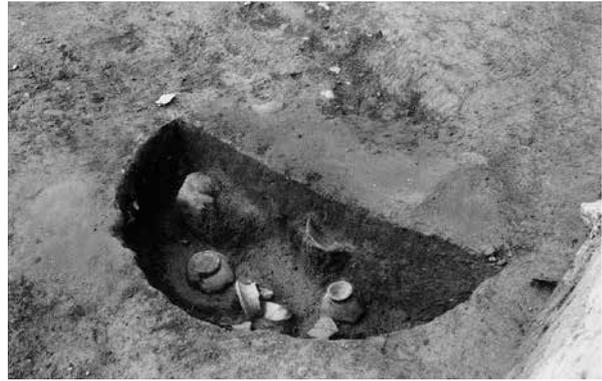
4. SB 1 完掘状況 (南より)



5. SB 1 遺物出土状況 (南東より)



1. SB2完掘状況（東より）



2. SK1遺物出土状況（南東より）



3. 作業風景（南より）



4. 現地説明会風景（南東より）



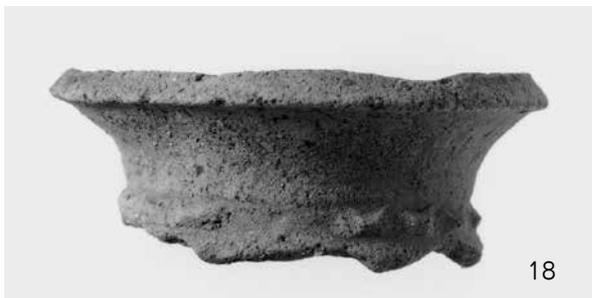
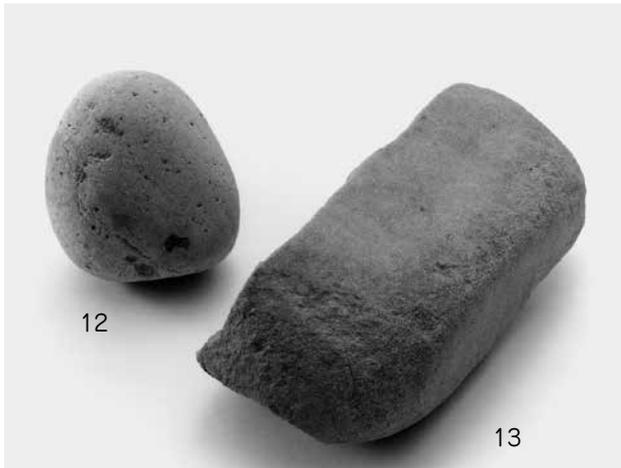
5. SB1出土遺物



4



11



1. 出土遺物 (SB 1 : 12 ~ 14、SK 1 : 18・20、SP 55 : 23・26、SP 16 : 29、地点不明 : 32)



1. 調査地全景（北より）



2. 南壁土層（北より）



3. SD1完掘状況（北より）



4. SD2完掘状況（西より）



5. 遺構検出状況（北より）



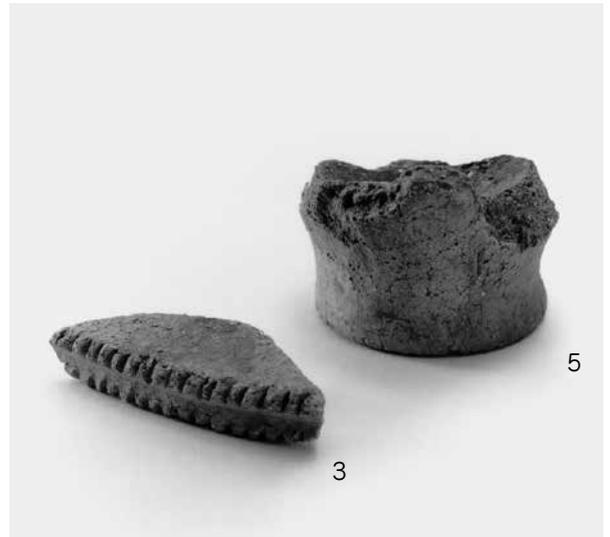
1. SD2遺物出土状況（西より）



2. 作業風景（西より）

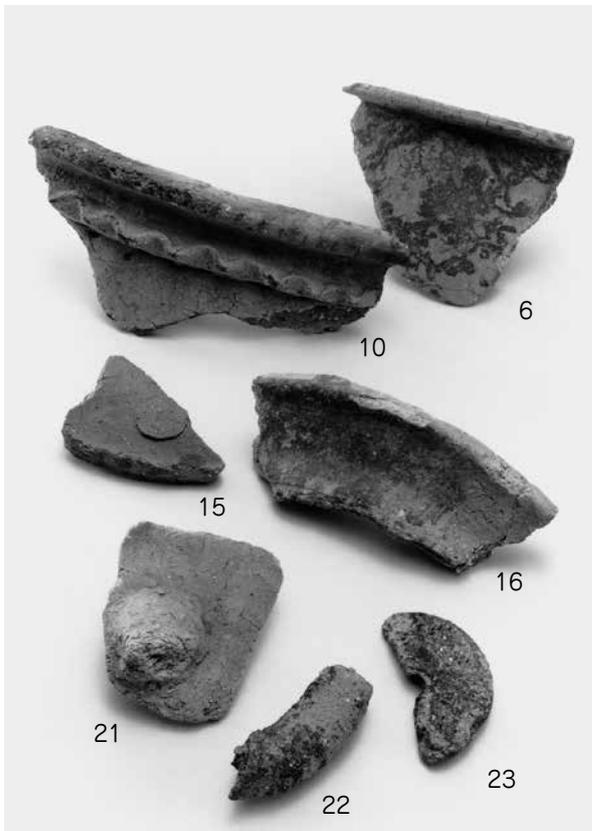


1



3

5



6

10

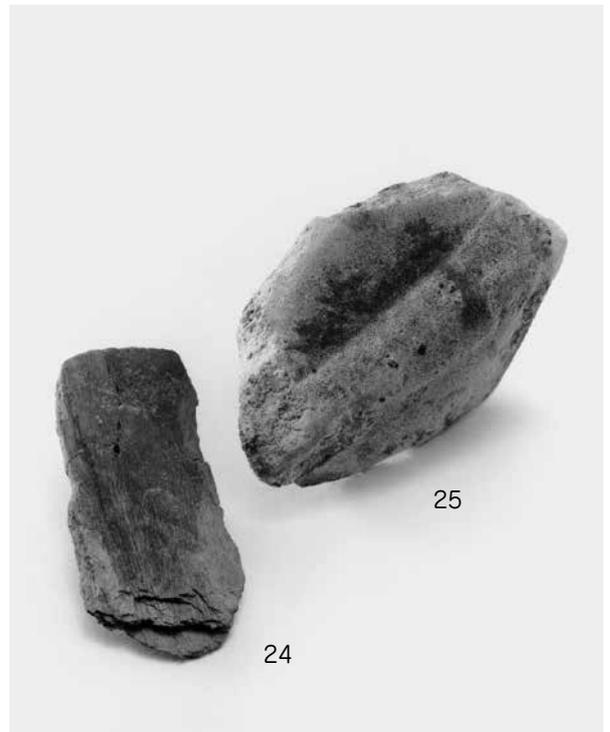
15

16

21

22

23



24

25

3. 出土遺物（SD1：1、SD2：3・5、第7層：6・10・15・16・21～25）



1. 調査地全景（南東より）



2. 第Ⅹ層上面遺構検出状況（南西より）



3. S R 2 遺物出土状況（南西より）



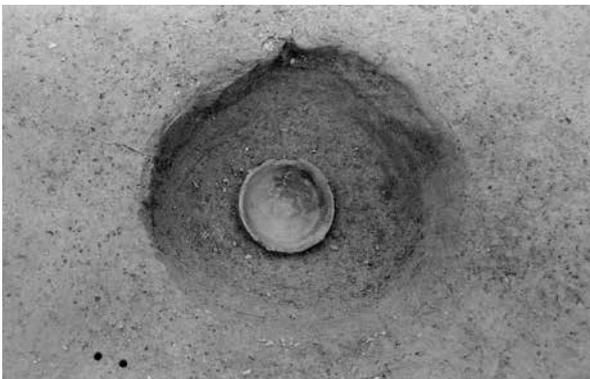
4. 第Ⅷ層上面遺構検出状況（南西より）



5. S D 8 ・足跡検出状況（南東より）



1. 第Ⅶ層上面遺構検出状況（南より）



2. 掘立1遺物出土状況（西より）



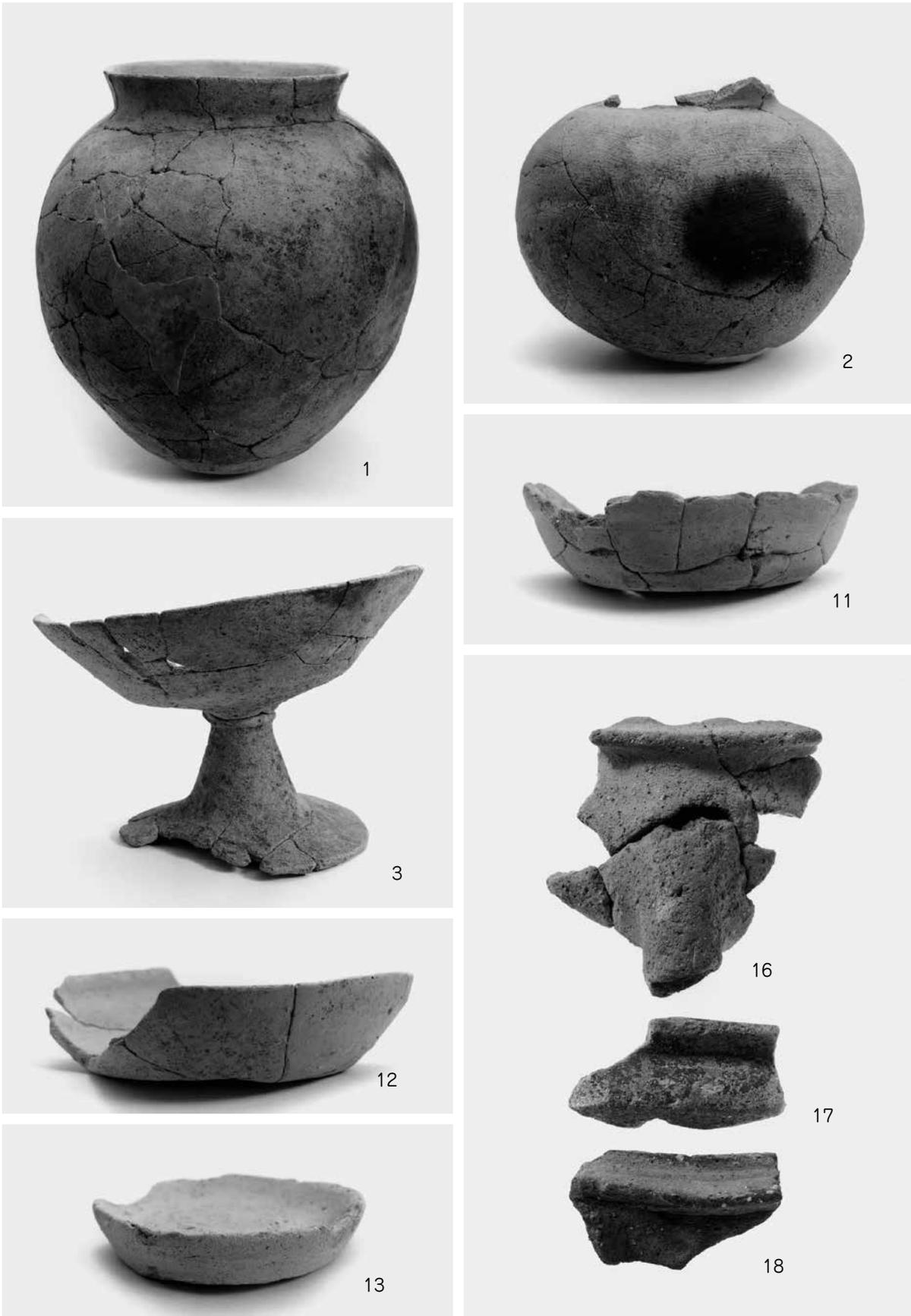
4. SK1遺物出土状況（北西より）



3. SD5遺物出土状況（北より）



5. SK7・8検出状況（東より）



1. 出土遺物 (SR2 : 1 ~ 3、SK1 : 11・13、SK9 : 12、第Ⅶ層 : 16、第Ⅹ層 : 17、地点不明 : 18)



1. 調査地全景（北西より）



1. 調査地南部全景（北西より）



2. 調査地中央北部全景（北西より）



3. 調査地中央部土坑群と礎石2（南西より）



4. 調査地南部の土坑群と礎石3（南東より）



5. 礎石2と整地土層（南西より）



6. SK 010・埋甕半截状況（北東より）



1. 江戸時代の瓦廃棄土坑（東北東より）



2. 調査地中央部土坑群調査状況（東北東より）



3. S K 009（北東より）



4. S K 001（北北西より）



5. S D 004（南より）



6. S D 004 土層断面（南西より）



1. 石垣検出状況（東南東より）



2. 石垣すりつけ部（南東より）



3. 矢穴（南東より）



4. 碁石

報 告 書 抄 録

ふりがな	どうごじょうほくいせきぐん
書名	道後城北遺跡群Ⅲ
副書名	道後城北RNB・文京29次・土居窪Ⅲ・道後北代・松山城北郭・松山城東郭跡
巻次	
シリーズ名	松山市文化財調査報告書
シリーズ番号	第169集
編著者名	宮内 慎一・大西 朋子
編集機関	公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団 埋蔵文化財センター
所在地	〒791-8032 愛媛県松山市南斎院町乙67番地6 TEL 089-923-6363
発行年月日	西暦2014(平成26)年2月28日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
どうごじょうほく 道後城北 RNB遺跡	まつやましどうごひまた 松山市道後樋又	38201	117	33° 51' 7"	132° 46' 8"	19880105 } 19880204	300	宅地開発
ぶんきょう 文京遺跡 29次調査	まつやましてっぽうちよう 松山市鉄砲町	38201	471	33° 50' 54"	132° 46' 8"	20060710 } 20060831	480	宅地開発
どいくぼ 土居窪Ⅲ遺跡	まつやましどうごみどりだい 松山市道後緑台	38201	392	33° 51' 11"	132° 46' 49"	20010903 } 20010914	26.32	宅地開発
どうごきたしろ 道後北代遺跡	まつやましどうごきたしろ 松山市道後北代	38201	519	33° 51' 6"	132° 46' 38"	20081117 } 20090216	約590	宅地開発
まつやまじょう 松山城 きたくるわ 北郭遺跡	まつやましへいわどおり 松山市平和通	38201	118	33° 50' 50"	132° 45' 49"	19871021 } 19871030	250	宅地開発
まつやまじょう 松山城 ひがしくるわあと 東郭跡	まつやましおおかいどう 松山市大街道	38201	463	33° 50' 39"	132° 46' 15"	20060309 } 20060428	263	宅地開発

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
道後城北 RNB遺跡	集落	縄文 弥生 中世	溝・柱穴	縄文土器・石器 弥生土器・石器 土師器	縄文後・晩期の土器 を層位的に検出
文京遺跡 29次調査	集落	弥生 中世	竪穴建物・土坑 柱穴	弥生土器・石器 土師器・須恵器・陶磁器	弥生中期の貯蔵穴を 検出
土居窪Ⅲ遺跡	集落	弥生	溝	弥生土器・石器	弥生中・後期の溝を 検出
道後北代遺跡	集落	縄文 弥生 古墳 中世	自然流路 自然流路・土坑 掘立柱建物・溝・土坑 足跡	縄文土器 弥生土器 土師器・須恵器 陶磁器	中世の農村的集落跡 を発見
松山城北郭遺跡	城郭	近世	石垣		北郭の石垣の一部を 検出
松山城東郭跡	城郭	近世 近代	溝・土坑・礎石 溝・土坑・礎石	土師器・陶磁器・瓦・銭貨・基石	江戸時代後期から幕末に かけての石組溝を検出
要 約	<p>今回報告する6遺跡では、縄文時代から近代に至る遺構や遺物を確認した。道後城北RNB遺跡では縄文時代後期や晩期の土器が層位的に検出され、それらの資料は松山平野における該期の土器編年の指標となっている。文京遺跡29次調査や土居窪Ⅲ遺跡では弥生時代中期から後期の遺構が検出され、道後城北地区における弥生集落の広がりを知る手がかりを得た。また、道後北代遺跡では古墳時代の自然流路や中世段階の建物址のほか農耕に伴う溝や足跡を検出した。特に中世の資料は調査地一帯の土地利用や集落変遷を解明するうえで重要な調査成果といえよう。このほか、近世では松山城北郭遺跡や東郭跡の調査にて松山城築城に関連する石垣や石組溝が検出され、当時の状況を知る貴重な資料を得ることができた。</p>				

松山市文化財調査報告書 第169集

道後城北遺跡群Ⅲ

道後城北 RNB・文京29次・土居窪Ⅲ
道後北代・松山城北郭・松山城東郭跡

平成26年2月28日 発行

編集 公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団
発行 埋蔵文化財センター
〒791 - 8032 松山市南斎院町乙67番地6
TEL (089) 923 - 6363
松山市教育委員会
〒790 - 0003 松山市三番町六丁目6番地1
TEL (089) 948 - 6605
印刷 不二印刷株式会社
〒790 - 0054 松山市空港通2丁目13番30号
TEL (089) 973 - 1266
